

**2005年度
渥美国際交流奨学財団年報**

Atsumi International Scholarship Foundation

Annual Report



渥美健夫氏遺影

渥美国際交流奨学財団は故渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志に基づき日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて、1994年4月1日に設立されました。

当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に奨学援助をいたします。

日本にやって来た留学生の皆さんが、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思えます。

若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道が開かれてゆくことを願っております。

2005年度 渥美国際交流奨学財団年報

目 次

◇ 理事長のことば 「小さな交流こそが国際交流の出発点」	渥美伊都子 -----	2
◇ 常務理事オピニオン 「留学生支援のビジョンとミッション」	今西淳子 -----	3
◇ 交流事業・思い出		
・ 軽井沢旅行		----- 5
・ 渥美奨学生の集い 講演：井上博允選考委員「ロボティクスの誕生と発展」		----- 8
・ 新年会		----- 9
・ 研究報告会		----- 10
◇ 2005年度奨学生のページ「エッセイ」		----- 13
◇ 2006年度奨学生のページ「自己紹介」		----- 27
◇ 2005年度海外学会派遣プログラム参加報告		----- 40
◇ A I S F ネットワーク		
・ ラクーン会		----- 44
・ 第5回日韓アジア未来フォーラム		----- 52
・ 関口グローバル研究会 (S G R A)		----- 56
■ 渥美奨学生2005年度著作・発表論文・特許リスト		----- 58
□ 付録		----- 74
・ 設立の趣旨について		
・ 2005年度業務日誌		
・ 2005年度収支決算、貸借対照表		
・ 財団人名簿		
・ 奨学生名簿		
・ 2007年度渥美奨学生募集概要		

小さな交流こそが国際交流の出発点

渥美伊都子



早いもので渥美国際交流奨学財団は創立12年目を迎えました。毎年12名というささやかな奨学事業ですが、年を重ね、奨学生の総数は142名となりました。その内ほとんどが日本の大学院から博士号を取得し、現在その6割の博士達は大学や研究所、企業に就職しています。お陰様で当財団がつつがなく発展出来たのも、設立時よりご支援下さいました皆様方のお励ましのお賜物と心から感謝申し上げます。

毎年お正月にはラクーン会(一年間の奨学期間を終えて入会する同窓会)の皆さんをお招きして新年の餅つき大会を開くことを恒例にしており、今年も関口の財団ホールに、韓国、香港、沖縄、九州からも含む奨学生の方々が家族同伴で三々五々集まり参加総数80名余となりました。お互いに初対面でも同じ財団、同じ国ということで会話は弾み、つきたてのお餅やおせち料理などを食べながら賑やかな新年会となりました。皆さんとお話しているうちに初めて面接した頃のことを思い出し、又その子供達が高校生や大学生に成長されている姿を見るにつけ、つくづく月日の流れを感じました。同時に財団も成長し国際色豊かなネットワークが出来つつあることを強く感じさせられました。

昨秋、私は、第1期奨学生の高偉俊さんに案内して頂き、初めて中国を旅しました。西安では高さんの友人で日本に留学経験のある西安交通大学建築学部助教授の周典さんに大変お世話になりました。先ず学校を案内していただきましたが、2万人を越す学生が全寮生であることに驚きました。食堂では朝、昼、晩の食事を食べられますし、学生の部屋は2段ベッドの4人部屋でした。朝は早くから研究室も食堂も開いていますが夜は10時に消灯となります。学生達はよく勉強し規律正しい生活をしているようで、日本の大学生生活とは大分違うのではないかと思われました。兵馬備

とか華清池博物館等も見学しましたが、西安は歴史の古い、静かで落ち着いた雰囲気の良い都市でした。

次に上海に行きましたが、こちらは新旧取り混ぜた活気のある近代都市でした。上海財経大学の助教授をしている第7期奨学生の範建亭さんに案内をお願いしました。街では朝早くから近くの広場に沢山の人が集まり太極拳をしたり、夜遅くまで外で賑やかに歌ったり踊ったり、大きな声でおしゃべりしたり、活力ある中国の人々の日常生活を感じました。

特に印象的だったのは魯迅の家でした。魯迅は日本の本を買う為に内山書店によく行っていたのですが、その店主の内山完造氏の親切さに引かれて近くに引越し、晩年はすっかり世話してもらったとのこと。魯迅記念館は、かつて内山書店のあった場所に建てられた、現在は中国工商銀行になっている建物の2階にありました。現在は銀行が管理運営しているようです。記念館には沢山の著書や衣装の外に内山さんに葉を依頼する手紙などが保存されていました。魯迅が住んでいたのは、近くの路地の奥にひっそり建つ粗末な家でした。書斎兼寝室にあるカレンダーや時計は、この家で魯迅が亡くなられた1936年10月19日5時25分を表示していました。

旅の終りに範さんの自宅へお招きいただき、美味しい手料理をご馳走になりながら楽しいひと時を過ごしました。お陰様でこの旅も皆様の暖かい心のこもったご案内により、無事終ることが出来たことを感謝しております。

これからは国境を越えた個人の役割が大きくなりつつあります。私は奨学生一人一人と相互理解を深めていく小さな交流こそが国際交流の出発点だと思います。そして、それが次の世代に繋がるよう願って止みません。

留学生支援のビジョンとミッション

常務理事 今西淳子

留学生を支援するという事は、意欲のある優秀な青少年が日本での勉強や体験を通じて国際社会で活躍するようにお手伝いすることだと考えていた私が、12年前にこの仕事を始めた時、日本の留学生支援は戦後賠償から始まったもので、日本が迷惑をかけたアジア諸国の青少年を招聘し、日本の優れた教育を受けて母国に持ち帰っていただくのが目的だと言われて、大いに戸惑ったことを覚えています。それに比べると、最近、日本の少子高齢化と人口減少を受けて、優秀な留学生は日本に留まってほしい、もしよろしければ日本人になっていただきたい、という声まで聞こえるようになり、時代の変化をつくづく感じています。もっとも、母国に帰るかどうかという問題は、受入側の思惑に関係なく、おそらく国籍にも留学先にもかかわらず、二つ以上の「母国」を持ってしまった「留学生」という立場の人間がしばしば直面する普遍的な悩みであるようにも思います。

日本政府は1983年に、日本に留学生を10万人受け入れようという政策を打ち出し、当初1万人に過ぎなかった在日留学生が2004年5月には117,302人に達して目標を達成しました。数は順調に伸びたものの、受入れ体制の整備が不十分だったために、留学生の対日観が悪くなったり、犯罪が起きて留学生に対するイメージが悪くなったり、多くの問題を引き起こしたと言われています。そして、最近の入国管理局による日本語学校生の受入制限の強化は、来年以後の留学生数の減少を招くとも言われています。

一方、ダイナミックに発展を遂げるアジアを中心に留学はますます盛んになり、欧米、オセアニア、東アジア諸国では積極的な留学生誘致が繰り返されています。日本国内では、国立大学は独立行政法人化され、私立大

学は少子化による学生数の減少により経営難が激化すると見込まれ、大学は生き残りをかけて改革を進めていますが、往々にして国際化もその戦略として取り込まれています。このように混沌とした状況の中、日本国政府は、アジアに対する政治外交が不在のまま、積極的な政策を打ち出せないでいるように思います。

グローバル化と地域化とナショナリズムが錯綜するアジアの一員である日本は、今後どのような理念に基づいて、アジアを中心とした各国からの留学生を受け入れるべきか。関口グローバル研究会（SGRA）では、昨年11月に、以上のような問題意識に基づいて第21回SGRAフォーラム「日本はどう外国人を受け入れるべきか：留学生」を開催しましたが、その時の議論に基づいて次の4点を、朝日新聞アジアネットワークに提案しました。

1. 日本の留学生受入れ政策の目的が、戦後賠償を含む「支援」から「相互協力」へ大きく変化しつつあることを確認したいと思います。「東アジア共同体」の構築を遠い視野にいれ、EU型モデルを参考にした、青少年の地域内交流の促進を大いに奨励すべきです。短期留学を中心とした非常に大規模な量的拡大が必要です。アジア各国の大学間で留学生を相互に交換する短期プログラムや、母国で2年、留学2年で両方の学位をとるツィニングプログラムなど、新しい試みは一部の大学で既に始まっていますが、さらに多くの大学が積極的に推進していただきたいと思います。

2. 留学交流の基本は「平和共存」のための「人と人の交流」であり、市民間の「信頼醸成」であることを強調したいと思います。東アジア共同体構想を進めるにあたっ

ても、「安全保障」を目標に据えた、この基盤整備は欠かすことができません。大量に受入れながらも、ひとりひとりの交流が大切なのであり、しかも交流すれば心が通い合うとは限らないので、専門家による細やかで柔軟な支援体制が必要です。特に、欧米に比べ日本を含めたアジア諸国で普及が遅れている異文化理解教育が不可欠です。文化の違いへの対応を習得あるいは体験した上で、はじめて次の問題、たとえば「歴史問題」についての対話が可能になると思います。

3. 一人ひとりの力を強化することが留学および留学生

支援の第一義的な意義であり、その意味で「市民」の育成を強調したいと思えます。企業によるメセナ事業、市民によるボランティア活動、NPO、NGOの活動の中には、日本社会がアジアからの留学生に伝えることのできるものがたくさんあります。企業インターンシップも含む、大学の外で日本を体験するプログラムを推進していただきたいです。



中国新疆ウイグル自治区にて

す。実際、多くの留学生のエッセイの中で、日本人の礼儀正しさや規則遵守や時間厳守等が高く評価されています。留学生は日本の市民社会から、さまざまなことを着実に学びとっています。彼らが将来帰国して、市民社会建設の担い手になっていくのです。

4. 日本に限らずアジア諸国の欧米偏重（特にアメリカ偏重）は歴然としていますが、「アメリカか日本」を脱して、「アメリカも日本も（あるいはアジア各国も）」という多層的な留学を志向させるような対策が必要となるでしょう。誰でも日本語（日本人には英語）と一緒に第2、第3の外国語を学習できるように制度を見直していく必要があると思います。この点は、むしろ日本以外の国の方が進んでいるかもしれません。北京大学で交流した日本語学科の学生の殆ど全員が、第一外国語は英語だということでしたし、東南アジア諸国や韓国では、英語に加えて中国語や日本語を学ぶ学生が増えています。日本もトライリンガル教育をめざすべきでしょう。

2000年に190万人だった全世界の留学生は、2025年には700万人を超えと言われています。この巨大なマーケットをめぐる、英語圏を中心に、高等教育機関のグローバル競争が始まっています。しかしながら、日本の留学生政策は、経済優先の欧米型グローバル競争とは別の次元で考えるべきでしょう。日本へ留学した理由を聞いた調査では、奨学金やアルバイトなど、経済的な理由がかなり上位を占めます。日本がお金を払ってまでも、留学生に来ていただきたい理由を煎じ詰めれば、安全保障であると、私は考えています。

靖国神社参拝問題も含め、国際関係がこじれると、その解決策として必ず青少年交流の促進が挙げられます。ところが、青少年の国際交流事業に携わる私たちは、「平和構築のため」というミッションの認識が不十分なのではないかと思えます。第22回SGRAフォーラム「戦後和解プロセスの研究」で、日英戦後和解について講演していただいた山梨学院大学の小菅

信子教授は、「市民社会や有志の個人が、戦争がもたらした偏見や憎悪について、市民交流に際しての懸案として、意図的かつ意欲的に取り組んでいく必要がある」と書いておられますが、昨今の日本と近隣諸国との関係を考えるにつけ、私たちは、このことをもっと自覚的に押し進めなければいけないと感じます。

100年ぶりの民法改正を伴う公益法人改革の議論がかましいですが、公益事業を担っていくためには、常にビジョンとミッションを確認することが必要だと感じています。そして、既に10年以上続けているこの事業に対する私自身のパッションを維持していくことが私に与えられている課題ですが、それは「人と人の交流」から生まれていると言うことができるでしょう。

（2006年5月20日）

交流事業・思い出

軽井沢旅行

今年の軽井沢は美味しかった！



2005年7月22日(金)から24日(日)まで、恒例の渥美財団軽井沢レクリエーション旅行が開催されました。軽井沢にしては蒸し暑かったですが、今年度奨学生、ラクーン会会員とその家族、SGRA会員やフォーラム参加者は、緑の森の新鮮な空気を満喫しました。プログラムは例年同様、一日めは、マルコムさんの率いる離れ山ハイキングに始まり、理事長を囲んで夕食会、マキトさん(1995年ラクーン)の軽井沢オリエンテーション、花火、パワーポイント教室が滞りなく行われました。二日めの午後は、渡辺利夫拓殖大学学長、トラン・ヴァン・トゥ早稲田大学教授、平川均名古屋大学教授(SGRA顧問)をお招きし、SGRAフォーラム「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」が開催されました。三日めの渥美別荘でのバーベキューは、ブレンサインさん(2001年ラクーン)のモンゴルの羊肉の串焼きと、全振煥さん(2001年ラクーン)の韓国のLAカルビの競演でした。それぞれ7kgも注文した肉が全部なくなってしまったほど大ヒットでした。金外淑さん(1997ラクーン)、韓京子さんと金娟鏡さん(2005ラクーン)は、韓国風サラダと春雨のお料理を作ってくださいました。恒例の原嘉男(鹿島美術財団常務理事)ご夫妻のおでん屋さん、今年はおみじの枝に結んだ赤いのれんが決まっていました。皆さんにかまっていたいただいて、おすそわけもいただいて(本当はいけないんですけど)ヴォヴォとラカ(今西家の犬たち)も大喜びでした。大喜びしすぎたために怖がらせてしまった皆さん、ごめんさ〜い。

□花火



□ BBQ



□ SGRA フォーラム「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」



渥美奨学生の集い

2005年10月24日(月)午後6時、渥美財団ホールにおいて「渥美奨学生の集い」が開催され、今年度奨学生、元奨学生、財団役員約30名は、当財団の選考委員で、東京大学名誉教授の井上博允博士から「ロボティクスの誕生と発展」というテーマのお話を伺った。井上先生は人間型ロボット(ヒューマノイド)に注いだ40年のライフワークを楽しく語られた。最終講義に基づく80枚以上のPPTスライドと数ギガバイトの映像のいくつかを見せていただきながら、ご自分の経験談を交えてお話くださったので、様々な分野の専門家である参加者全員の興味を上手く引いていた。

先生が大学院にはいった時、「将来ものにならない研究テーマを与えると、その学生の人生がだめになる」と考えていらした指導教官から与えられたテーマのうち、先生は「人工の手でクランクを回す」という課題を選んだ。健康な人間ならだれでも簡単にできる動作だが、大型コンピューターで制御される鉄と電気線の塊がクランクをゆっくりと回している36ミリカメラで撮った映像を見た時、時間の重さを肌で感じた。京都から参加してくださったロボット専門家の李周浩さん(1998ラクーン：立命館大学情報理工学部助教授)は、「自分が生まれた頃にこのような高度なことができたことに驚ろいた」と感想を述べた。

その後、まるで生物の進化のように人間型ロボットは発達してきた。井上先生の研究室では、人工の「手」と「知能」と「目(感覚)」の3グループで進めてきたが、それがヒューマノイドというプラットフォームで統合され、段々美しい形や動きをロボットに与えてきた。配布資料には井上研究室に所属した学生や研究者全員の名前がリストされていた。研究室の研究者たちが毎年のように受賞した数々の賞が先生にとっては宝物であるとのことだった。

愛知万博ではロボットと共存する2020年の社会を予測して展示した。ロボットが目や頭や手足が弱くなった高齢者の手助けになれば、ロボットも産業化できるだろうという希望に満ちた未来を描いてくださった。

質疑応答では、「ロボットがやってはいけないことは何か」「ロボットがしたことに対する責任は誰がとるのか」という質問があった。このような重要な問題を審議するためにロボット倫理委員会が設立されたということだった。私は、「東アジア経済統合の面でもロボットを次世代産業として一刻も早く実現すべきと思うので、先生のライフワーク(まだまだお若いですから)にしてください」とお願いした。講演後の懇親会は、今年も羅仁淑さん(1988ラクーン：国士舘大学非常勤講師)の弟さんのお店「とうがらし」(本郷の東大正門近く)のお料理をケイタリングした。本場の韓国料理を、参加者全員が堪能した。(文責：F. マキト)



2006新年会

2006年1月14日(土)正午～3時、恒例の渥美財団新年会が開催され、今年度奨学金受給者とラクーン会会員と家族約50名が、渥美財団ホールに集まりました。今年の冬は東京も非常に寒い日が続いていますが、当日は比較的暖かくて餅つき日よりでした。お雑煮や、おしるこや、おせち料理や、焼き鳥でお腹が膨らんだ後、歴代渥美奨学生の紹介がありました。1995年度が3名、1996年度から2002年度までは各1名、2003年度は3名、2004年度は



4名、2005年度は11名の参加でした。高偉俊さん(1995ラクーン)はご家族も一緒に北九州から、金外淑さん(1997ラクーン)は神戸からお越しくださいました。「皆さん、各年度で誘い合ってたくさん参加してください」という理事長からの挨拶がありました。その後、韓京子さん(2005ラクーン)からご紹介いただいた康明珠(カンミョンズ)さんによる韓国伝統打楽ソルチャンクの演奏があり、掛け声も入って賑やかなひと時を楽しみました。最後に、ビンゴをして、新年の運試しをし、参加者はビンゴの賞品やカレンダーを持ち帰りました。3階回廊のリサイクルコーナー古着は、包聯群さん(2005ラクーン)の支援する中国黒龍江省のウンドル村に送ることになりました。



2005 年度研究報告会

2006年3月4日（土）午後2時から6時まで、東京都文京区関口の渥美財団ホールにて、2005年度渥美財団研究報告会が開かれ、当期渥美奨学金受給者が研究成果を発表しました。今期・来期の渥美奨学生やラクーン会（同窓会）会員、財団役員、留学生支援財団の方々、来賓の皆様を含む50名以上の方々にご参加いただきました。最初に、渥美伊都子理事長から、ホールに飾ってある雛飾りの紹介やひな祭りについてのお話がありました。渥美奨学生の皆さんは、自分の博士研究の成果を「子供にもわかるように」「15分以内で」説明するという大変難しい課題にもかかわらず、しかも何人かの方々には初めてのパワーポイント（プレゼンテーション用ソフト）を使ってそれぞれ素晴らしい発表をしてくださいました。12名の発表の後、お忙しい中ご出席くださった指導教官の先生方、東京学芸大学副学長の馬淵貞利先生と、東京大学大学院総合文化研究科の黒住真先生よりコメントをいただきました。そして、突然参加してくださったタイ国カセサート大学のムシカシントン・プラチャーさん（1999ラクーン）と琉球大学の林泉忠さん（2000ラクーン）のご挨拶の後、運営委員のマックス・マキトさん（1995ラクーン）からパワーポイント SGRA の紹介がありました。その後、参加者はひな祭りのご馳走のちらし寿司と中華料理を食べながら歓談を楽しみました。



2005 年度奨学生と財団スタッフ

□来賓挨拶



馬淵貞利先生
東京学芸大学副学長



黒住真先生
東京大学大学院総合文化研究科



□懇親会



ムシカシントン・ブラチャーさん
カセサート大学（1999 ラクーン）



林泉忠さん
琉球大学（2000 ラクーン）



■発表テーマ

- 包 聯群「言語接触に関する事例研究－中国黒龍江省ドルブットモンゴル人コミュニティ言語を中心として－」
韓 璿巧「都市機能高度化に伴う複合建築の省エネルギー手法に関する調査研究」
韓 京子「近松の時代浄瑠璃の研究」
江 蘇蘇「Ad-Hoc Network におけるの時空間符号の適用」
金 範洙「近代朝鮮における日本留学を通じた新思想の受容と展開」
金 娟鏡「『育児ネットワーク』が母親役割に及ぼす影響に関する研究－幼児を持つ母親を対象とした日韓比較－」
藍 弘岳「荻生徂徠の『文学』－東アジア思想史における徂徠学の構成－」
テネグラ、ブレンダ レスレション ティウ「送金とコミュニティ活動に関する社会学的研究」
ヴォー・チー・コン「多項式最適化問題の緩和手法とその並列実装」
王 健歡「多変量時系列統計と脳科学の数量化分析の研究」
趙 長祥「中国山東半島にある家電企業の集積と急成長要因・プロセス分析」
王 雪萍「改革・開放期の中国政府派遣留学生－1980年～1984年の日本への学部留学生派遣を中心に－」

(写真は研究発表の奨学生の皆さん 上段より左から右へ発表順)



2005年度渥美奨学生のページ 「エッセイ」

包 聯群 「焼失した小学校の再建をみんなの手で実現させることができた」 ----	14
韓 珺巧 「夢追人」 ----	15
韓 京子 「かぐや姫と浦島太郎」 ----	15
江 蘇蘇 「Culture Difference と Generation Gap の狭間」 ----	16
金 範洙 「日本での留学生生活をふりかえって」 ----	19
金 娟鏡 「『食』の異文化適応」 ----	20
藍 弘岳 「台湾人・中国人としての私と江戸思想」 ----	21
テネグラ、ブレンダ レスレション ティウ 「ジェンダー研究への関心」 ----	22
ヴォー・チー・コン 「生活の最適化：日本とベトナムの過ごしやすさの比較」 ----	23
王 雪萍 「窓の外で手を振っている中国人スタッフ」 ----	24
王 健歡 「私の童軍生活」 ----	25
趙 長祥 「人生の停留所（驛站）」 ----	26

火事で焼失した小学校の再建をみんなの手で実現させることができた

パオレンチュン
包 聯群

東京大学（言語情報学）

中国黒龍江省泰来県には515人が居住するウンドル村がある。2003年8月30日、笹川科学研究助成による満州語の調査をしていた私の目の前で、村の人々の心を痛める事件が発生した。1946年に設立され、多くの人材を育てた歴史をもつモンゴル族小学校が火事によって一瞬の内にその形を変えてしまった。村の人々はあまりにも悲惨な出来事に言葉を失った。

この村ではモンゴル族が全体の73%、漢民族が15%、満州人が10%、ダグル族が2%を占めている。村の周辺はすべて中国語が話されている環境であるが、ウンドル村の人々の日常用語にはモンゴル語がもっとも多く使われている。小学校の児童は40名程度で、母語であるモンゴル語を勉強できる唯一のモンゴル族小学校であった。しかし、火が発生する前から一部の人による小学校合併の動きがあった。小学校4年生から2.5キロ以上離れた別の村に通わせ始めていた。火が発生した後、小学校3年生からのすべての児童を別の村に通わせた。教師もそれぞれ別の村へ派遣された。仮教室に1年生と2年生の児童及び教師一人が残された状態であった。

村民が学校再建委員会を設け、地元の行政へ事情を説明し、学校再建を求めた。その後、県教育局の責任者が村に行き、村民たちに経済的な理由により再建できないという説明をした。絶望した村民たちは、私宛に日本からの応援を求め手紙を送ってきた（2004年4月6日）。手紙を読んだ私は、日本側を代表する責任の重さを感じる一方、母校でもあった小学校のために何かをしなければいけないと思い、母校出身3名が中心となり、在日小学校再建委員会を立ち上げ、様々な活動を開始した。

しかし、実行は容易ではないことに気づいた。多くのボランティア団体（東武練馬コスモスの会、東京・

沖縄・東アジア社会教育研究会、SUNUS、フフ・モンゴル・オドム、モンゴル民族文化基金など）に支援を求めた。国際交流も視野に入れて、東武練馬コスモスの会の支援のもとに留学生たちが中心となり、様々な祭り（10回程度）に参加し、モンゴル料理の販売をした。それによって、異文化を紹介し、国際交流を進める一方、学校再建資金の一部（他は支援金）を集めることができた。

その時、最も重要なのは教師を派遣できるかどうかという問題であることに気づき、2005年3月に一時帰国して地元の各行政機関を訪問し、黒龍江省民族委員会から学校再建に必要とする資金の半分を支援する約束をしてもらった。泰来県教育担当の副県長さんも日本の多くの皆様と多くの留学生のご支援を理解し、特別な計らいによって、小学校に5人の教師を派遣し、モンゴル語科目の再開も許可された。今年の5月に日本から10万人民币を学校側に渡し、小学校の再建を求めた。9月に東武練馬コスモスの会が中心となる日本人10人グループが小学校の開校式に参加した。地元の行政官僚も大勢参加し、日本への感謝の気持ちを述べ、日中友好関係が永遠に続くことを祈ると発言した。



最後に言いたいことは、村民の笑顔を取り戻した「小学校再建活動」の背景には、渥美国際交流財団からの欠かせないご支援が存在していた。お金と時間のかかる小学校再建活動は、私にとって、経済的に大きな支えがなければできないことであった。財団の奨学金とご支援が私のパワーとなり、それらを活動に生かせるからこそモンゴル族小学校が再建できたと位置付けている。

(2005年10月記)

夢追人

かん ぐんこう
韓 琺巧早稲田大学・博士（建築学）
国立ローレンス・バークレー研究所研究員
（在カリフォルニア）

「夢」は寝ている間に見るものだと思っている人々が多いに違いない。ここで、私が話したい「夢」は寝ている間の夢ではなく、現実の中の夢だ！つまり、理想・目標について語りたい。

私は夢を見ることが大好きだ。子供のころ、私は小さな村に住んでいた。「どうして星がきらきらしているのか」、「どうしてりんごは木の上に実がなり、トマトは株に実がなるのだ？」、「どうして秋になると虫が鳴き始めるのか」・・・自然の不思議について、先生に質問した。いつもにこにこしながら、徐々に答えてくれた先生は私の憧れだった。「先生になれば、何でも分かる。」という簡単なロジックで「先生になろう」という小さな夢を追いかけて、小学校を卒業した。

中学校に入り、英語、物理、化学、世界歴史、世界地理など様々な新しい学問の分野が目の前に広がっていった。英語を勉強すれば、あの「青い目、金髪、高い鼻」の外国人と会話ができて、楽しそうだ。物理、化学の実験は面白い。特にラジウムやポロニウムを発見したピエール・キュリー夫人（マリー・キュリー）の伝記小説は私に大きな影響を与えた。私はキュリー夫人のようなすばらしい人間になりたい！その夢を持ち、私は物理化学に情熱を注いだ。全校、全省、全国の競争試験を受け、多くの賞をもらい、全国トップ第2位の優秀成績を取得した。両親も、先生も私が大学に入り、更なる化学分野での研究を深めることを期待してくれた。

どうして化学の夢から建築に変わったのか。この質問に回答するためには、中国の受験体制を説明する必要がある。13億の人口を持つ中国では、同じ期間に、全国統一の大学入学試験を行う。名門大学に進学するための競争はとても厳しい。家庭も、学校も学生たちに必死に受験勉強をさせる。本格的な受験勉強の期間に休憩として図書館で建築雑誌を閲覧することが私の趣味になった。古代エジプト文明の代表といわれるピラミッド、「愛のカタチ」のタージマハール、未だに多

くの秘密を残しているボロブドゥール寺院、古代ギリシャの栄光の証であるアテネのアクロポリス、美しく神秘に満ちたマヤ遺跡・・・建築の美しさで私を震撼させた。私には広い、多彩な世界が待っている！私は世界へ行きたい！そして、志望大学を選択した時は、誰にも相談せず、建築分野のトップクラスである同済大学を選んだ。

大学卒業後、河北省トップの建築設計研究院に就職した。日々の仕事のお陰で、世界中の都市や環境に触れるチャンスがあった。そして、「世界へ」という気持ちが強くなった。中国の経済発展優位主義で様々な環境問題が発生し、青い空、きれいな溪流、豊かな緑が人々の生活の中から消えている。「日本の環境は美しい」と留学中だった姉から聞いた。「行ってみたい。」と私の「世界へ」の夢は「日本」から始まった。都市環境分野の研究を始めたら、中国だけではなく、世界中の都市環境問題が見えてきた。そして、私の夢は中国から世界へ展開し、全人類の美しい都市環境を作りたい、保ちたいと考え直した。

困った時も、辛かった時もあったが、私は夢を一日も捨てたことがなかった。このように、私は「井の中の蛙」から、小さな夢を追いかけてながら遠い夢へ一歩一歩近づいてきた。「夢」は暗夜の灯台のように私の行く手を明るく照らしてくれた。

かぐや姫と浦島太郎

ハン キョンジャ
韓 京子東京大学・博士（日本文化研究）
徳成女子大学非常勤講師（在ソウル）

去年の年報は『徒然草』を引用しました。今年は平安時代の物語と御伽草子でファンタジー仕立てに、と言いたいところですが。

ご存知の方も多いと思うのですが、韓国の新学期は3月から始まります。学校によっては2月の末からだったりもするようです。幸い非常勤の勤務先がみつかり、博論の口述試験を終え、さっそく帰国したものの、もう音を上げ日本に戻りたいと思う毎日です。新しい生活をスタートする前の猶予期間が短かすぎたようです。のんびりやの私にとっては過酷な日々が続いております。

まず帰国して、つくづく反省するのは人の言うことは素直にしっかり聞こうということです。2月の最終面談の日、今西さんが「韓さんは2月中にエッセイ出しちゃってね。3月になると忙しいでしょうから。」っておっしゃったのにもかわからず、まだ二ヶ月もあるし1枚くらいなら（博論に比べればなんてことない高をくくっていました）すぐ書けるしと、ずっと後回しにしていたら、締め切りが目前になってしまい、エッセイの構想どころじゃなくなっていました。

留学は8年間でしたが、毎年休みには帰国していたので、目まぐるしくかわりゆく韓国を同時に見ているつもりではありました。しかし、実際に生活の拠点を移してみると、あまりにも韓国は変わってしまっていて全くついていけません。まさに浦島太郎状態です。文部省の奨学金制度という「亀」に乗り、日本という「龍宮城」で8年過ごし、祖国に残した両親のことが気にかかり、博士号という「玉手箱」をいただいて帰国してみると、祖国はもう何百年も経っていたということです。そして、玉手箱をあけて、博士号をもって就職すると、あっという間に白髪のおばあさんになってしまうのです。玉手箱はあけてはいけないうような気がします。ちなみに私の住んでいた横浜市神奈川区には、この浦島太郎の伝承が伝わっており、なにか縁があるのかも思ったりします。

研究室では帰国すると報告したら、ある先輩に「そうですね。帰るのですね。ずっといるものだとばかり思っていました。かぐや姫でしたか。」っていわれました。月からやってきて月へ帰るってことなんでしょうが、「ほほう。そう譬えるか」と感心しました。ただ、いくつもの難題を出されたのは私の方でしたが。

私の留学先である東京大学の国文科はとても古風なところですが、余談ですが、留学初日、指導教官の研究室を探していた私を迎えたのは、なんと「はと」でした。4階に迷い込んだはとが出口を探せず、暴走(?)していたのです。もしかしたらこのはとも新人だったのかもしれませんが。この時、とても不気味で留学先を間違えたと思ったものです。先生の研究室といっても、個人の研究室ではなく、二人の先生がいっしょに使っているお部屋です。外に名札がかかっていなかったの、結局見つかりませんでした。劣悪な環境にもかかわらず、誰一人表立って不満を言うのを聞いたことはありません。同じ建物にあった中国思想の研究室が新しいところに移り最先端化してゆく一方で、国文科は何十年も昔の姿を保持している、パワーポイントを使

うこともこの先何年もないようなところでは。機械に弱い私にとっては、そういうところが居心地がよかったのかもしれませんが。

しかし、そこを一步出たら立ってはいられないような激流が流れていました。それでも、研究室の外の渥美財団のおかげでパワーポイントを少し使うようになり、なんとか韓国での授業に活用することができるようになりました。内にばかりこもってはいは進化しないようです。

最後の一年、渥美財団で知り合った人々、特に同期の留学生とは楽しい日々を過ごさせてもらいました。なぜだか、初日から仲がよかったように思えます。まだ、卒業旅行の企画案が出たばかりで実行に移されていませんが、是非近いうちにその感想をお伝えできればと思います。どうぞ、11期の今後の活躍をご期待ください。

Culture Difference と Generation Gap の狭間

こう こそ
江 蘇蘇

横浜国立大学・博士（物理情報工学）
東芝セミコンダクター社

この時代ともなればほとんどの人がカルチャーショックを受けたことがあると思う。公の場で平気でキスをする欧米人カップル、どこでも大声を出して喧嘩するアジア人（日本人を除く）、電車の中で眠りたくてもとりあえず目をつぶって下向いている日本人。初めてこういった状況に出会った時の戸惑いや驚きも時間が経てば空気のように感じる。そして上級者となればむしろそんな文化を自分で実践してしまう。キスをしているカップルがいたら目のやり場に困っていたのに今は自分たちでも駅の改札でしてみたり、彼女が文句を言いながらその場を立ち去るところを彼氏が後から追いかけたり、電車に乗っている時間が貴重だと思ひ一生懸命人間観察に励んでいた私も周りが寝ていて観察の収穫がないからなのか、12時間睡眠した直後でも平気で眠りについてしまう。人間の順応性は素晴らしいと思う。

しかし、そんな私でも理解し難いこともある。まず、友達づきあいである。中国では仲良くなったら女の子

は腕を組んだり、手をつないだりしてスキンシップを取って「友情表現」をする。そんな環境に慣れた私は日本人友達の腕に触れただけで、「あ、ごめん」と謝られてしまう。Culture Shock！日本に来て一週間でこの日本文化を習得し、自分を抑制しながら生きてきたが、どうやら中国の血が濃く、今でも無意識に日本人友達に接近して歩いたりしている。これに気づいたのも友達の一言のお蔭で、「すーすー、もう少し右を歩いて！私縁石に乗ってしまいそう」・・・どうも左側を歩いていた友達が接近してくる私をずっと少しずつ避けていたらしい。この文化の真の理由は分からないが、友達曰く、「レズに勘違いされるから」で、そのくせお泊りする時は同じベッドで寝るのをちっとも構う様子がない。理解不可能！

日本人は恥ずかしいと思うことが多い。大声を出した時、階段で躓いた時、女の子が電車で競馬新聞を読んでいる時。とにかくいっぱい。競馬新聞を読んで研究して馬券を買うのは立派な趣味だと思うのだが、「そういうのは一人で家でこっそりよ。親父くさいって思われるから恥ずかしい」というのが日本人の見解みたい。じゃあゴルフは一昔前まで親父さんたちのスポーツだったが今は宮里藍選手が大ヒットしているのはどう説明が付くのか。「それとこれは違うよー」なにがどう違うのか中国人の私にはさっぱり分からない。

大声を出すと言えば、私は日本人の女の子がよく発している「きゃー」を尊敬している。この一言にいろんな意味や状況が込められている！ある日、後ろを歩いていた友達が急に「きゃー」と叫んだ。すごいトーンの高い声にびっくりして振り向いたら、友達が転んで地面に倒れている。慌てて助けつつ習得したのが、日本語の「きゃー」は非常事態の時に使うのだと。そんなある日、横に並んで歩いていた友達はまた急に「きゃー」と叫びだしたので、転んでからじゃあ遅いと思い慌てて手を差し出したら、その子は前のほうに向かって走り出した。前のほうに知り合いがいたらしい・・・「きゃー、お久しぶりー」その後レストランでご飯を食べていたらまた「きゃー」と言うので知り合いかと思いきや、「きゃー、おいしそう」だそうである。まあ、「きゃー」も人によってはトーンが高かったり低かったり、声が大きかったり、小さかったり、「きゃー」が「わぁー」になったりもする。言葉を習い初めて、いろんなフレーズに敏感な私にとっては最も悩ましかったこの「きゃー」、今では聞こえても反応しなくなっている。野次馬な性格を持つ中国人は街中で「きゃー」

が聞こえたらきっと飛んでいって何事かを突き止めないと気がすまないのに、私はもう聞いて聞こえぬふりで歩き出す。そんな私を中国人友達は無感情な人と言う・・・

高校生にもなれば日本人は両親と遊ぶのを嫌う。理由は「つまらない」とか、「親は口うるさい」とか、一番理解できないのが、「親と遊んだら友達一人もいないと思われるから」である。中国ではいくつになっても親とショッピングしたり、旅行したり、遊園地に行ったりする。家族だから一緒に過ごすのは当たり前。反抗期は生理上あるものの、日本人みたいに必要以上にひどくはない。親と全く口を聞かない、親の言うことを聞かない、しまいには、ぐれる。こんな理不尽なことまで「反抗期だから」とか「難しい年頃だから仕方ない」と親までが庇護する。これもまた本当に理解できない。そんな日本人に比べて私はむしろ反抗期がないように見え、そんな私を日本人もきっと理解できないと思う。

私も親と100%理解し合えているとは言えない。中国にいる中国一般家庭に比べたら、日本文化を親より何倍も吸収している私と親の間にも違った意味でのGeneration Gapが多くある。少しだけ私と親の対話を思い出しつつ書いてみる。

■八月のある日

母：今日の日曜日会社の友達が遊びに来るの。いっぱいおいしい物作らないと。

私：日本人はお客が来てもお茶とかお菓子ぐらいで、ご飯ご馳走しても質素な物しか出さないよ。中国にいる時みたいに豪勢に出したら逆にびっくりするよ。

母：そんなことないよ、きっと。お客なんだからお茶だけは失礼でしょう。見栄えも悪いし。それにきっとお土産持ってくるでしょ？

私：お土産って言っても中国人みたいに両手にいっぱい何かを抱えてくる感じじゃないよ。

母：いつからそんなに冷たい人になったの？友人には惜しみなく接しないと！こっちがどう接するかで相手も同じように接してくるもんだよ！人間は一人では生きていけないの。友達や周りの人を大切にしていかないと。

私：それは分かっているけど、日本の文化は豪勢にというのがなくて、シンプルでも充分友達付き合いがうまくいくの。中国の友達と性質は違うかもしれないけど。

母：あなたは日本に長くいすぎたね。常日頃自分は中国人だと思わないと。

私：別に自分が日本人だと思ってこういうことを言っているわけじゃないよ。

その日曜日。トータル10皿の料理：かに、えび、豚の角煮などなどゴージャスに飾られたテーブルは、会社の同僚二人により遠慮もなく姿形なく消費された。満足気に帰っていった二人を巡って：

母：日本人は全く遠慮がないね！同じ皿でもいい食材ばかり食べるね！

私：そうだね。

母：それにお土産はケーキ5個、うちら家族一人一個ずつに、彼女ら二人一個ずつ・・・

私：だから言ったじゃん。

母：それにしてもちょっとひどくない？人によるのかなー

私：・・・・・・・・

その二週間後、仕事から帰った母は不機嫌だった。

母：前に家に来た二人、今日私に何を言ったと思う？

私：何？

母：この前ご馳走様。本当においしかったわ。今度また行かせて！また李さんが作った料理食べたいなーだって！招待されたら招待し返すのが道理でしょ？こっちは外国人で物静かだからってそれにつけこんで、恥づかしくないの？！

私：まあ、あの二人も悪いと思うけど、日本ではめったにこういう風に友達づきあいをしないから、どうせ中国の文化だからと甘えている部分もあるんじゃない？

母：あなたは日本人の肩を持つわけ？自分が何人かしっかり考えなさい！

私：え・・・お父さん、何とか言ってよ！

父：まあ、お母さん今機嫌悪いから大目に見てあげて。でもお母さんの言う通り自分は中国人だという自覚は大事だよ。

私（心の中で）：なんでこんなことで売国奴にされるわけ・・・

■ある夏休み

父：最近研究はどう？

私：ぼちぼちな。そんなに忙しくない。学校も毎日行かないといけなわけじゃないから、よくコーヒー

ショップで論文書いているよ。

父：コーヒーショップ？わざわざお金を払って論文書きに行くの？お金の無駄遣いでしょうが！！まわりはうるさいし集中できないでしょう！！

私：でも家にいても寒いから暖房つけるでしょ？周りには人いっぱいだけど、慣れれば居心地いいし、けっこう集中できるよ！

父：寒いなら研究室に行きなさい。お父さんが日本で研究していた時期は朝5時起きでバイト先に行って、9時に仕事あがって大学に行き、夕方5時ぐらいまで研究して、ご飯食べる時間もなくてまたバイト先に直行して、夜中12時までバイトしていたよ！！よく実験のため夜研究室で寝泊りしていたし、お金がもったいなくて、生活費、学費以外に貯金のため、当時スーパーで一番安かった卵と鶏肉を毎日食べていたよ！味付けだけ変えたりして。あなたは何お嬢様の生活しているの！！そんなコーヒーショップに行く時間があったらもっと研究して論文を出しなさい！年に一本は少ないでしょうが。研究に疲れたらバイトに行きなさい。自分の将来のために今は節約する時期でしょう！

私：“お父さんの時代は今とは違うから仕方ないじゃん。若いうちは若いうちにしか使えないお金の使い方だってあるし。海外行ったり、旅行したり、いろんなことを経験したり、いろんな遊びもいまのうちにしておきたいじゃん。研究は研究でしっかりするよ！

父：海外で経験とかなんとか言って、海外で英語勉強したり、研究したりするのは分かるけど、日本人の若者みたいにブランドショップで物買って高級レストランで食事したり毎日いい生活しているのは経験じゃないでしょう。時間とお金を無駄に使うんじゃない。

私：そこは私もちゃんと考えているよ。英語もしっかり勉強してきたし。

父：あなたは留学生であって日本人ではない！もっと留学生と接してみると分かるが、留学生はみんな苦勞している。苦勞して生活費学費すべて自分で稼いで、その上勉強に励んでよい成績を修めている。苦勞してからこそ幸せが何倍も訪れてくる。あなたは苦勞を知らなさすぎ！奨学金を運よく獲得したからね。それでもできる限りいっぱい知識を身につけてバイトでいろんな社会経験も積んで、苦勞を知らない。自分は常に留学生であることを忘れないでね！

私：また日本人とか中国人とか言っている・・・仕方ないじゃん。高校生の時に日本に来たら少なからず日本気質に染まるじゃん。私は自分の大半は中国人の性

質を残していると思うんだけど。

父：とにかくほどほどにね。自分が強くないと外国人として日本で生きていくのは辛いよ！中国のニュースや新聞もよく読むようにしてね！

私：はい・・・・・・・・

まあこんな具合である。中国人離れしていくことを恐れている両親はよく私に「自分は中国人であることを忘れないで」と忠告をする。勿論自分は中国人だし、日本人だと思っはてはないが、両親の「中国人」と「日本人」の間に明確に一線引いているところが、留学第一世代とその子供の違いなのだろうか。

日本に「長く居すぎた」私は Culture Difference を持たまま感じながら、留学第一世代であった両親との考え方の違いによる Generation Gap にも柔軟に対応していかないといけない。いつもこの二つの壁に挟まれて「苦勞」している。

日本での留学生生活をふりかえって

金 範洙

東京学芸大学・博士（学校教育学）
茨城キリスト教大学非常勤講師

日本に来てから10年余が経つ。今年3月に晴れて博士学位を取得し、この春から大学の教壇に立つことになった。留学生活において節目となる今、過ぎた時間を改めてふりかえっている。日本語もままならなかった日々を思い出すと、今は長い夢から覚めたような心地だ。社会人生活から一転、念願の日本留学を果たした私にとって、留学生活は人生の輝かしい青春時代であった。ここでの生活そのものが、貴重な経験であり、大切な思い出となった。その中でも、国家と民族という固定された観念から離れて自らを客観的に考えることになったのは、留学生活を通じて得た最も大きな結実であったと思っている。

私費留学生として来日した私にとって、留学生活は決して楽なものではなかった。はじめは留学生生活を満喫する余裕などはなく、アルバイトの合間に日本語を必死で勉強した。日本語学校を経て大学に入学し、さらに大学院の修士課程と博士課程に進学して学位を取得するまで、大学以外の場でも実にたくさんの出来事に遭遇し、多くの人と出会った。私は、韓国にいた頃

から、日本と日本人に対して、一定のイメージを無意識に抱いていた。それがここでの「人」としての付き合いにおいて障害となっていることに気づくまでにはかなりの時間を要した。生活費を補うために、食堂の洗い場、ウェイター、清掃、警備など、アルバイトとして多くの職場で働いたが、そこにはさまざまな世代の人がいて、学生以外の人たちと接することができた。留学生ではなく一従業員として共に働いた仲間を通じて、日本人も韓国人も共通の感情を持つ同じ人間であることを自然に感じるようになった。

最近、日本で「韓流」が社会現象になっている。かつてはあまり注目されていなかった韓国文化への関心が一気に高まり、韓国を訪問する日本人の数が急増し、一方で日本を訪れる韓国人の数も過去最高の記録を更新している。これまでは、日本や韓国について、互いにぼんやりとしたイメージしかない人が多かったと思うが、実際に見て触れる機会が増えることによって、人々の心理的距離が確実に縮まってきている。しかし、このような個人レベルでの交流とは裏腹に、歴史問題に象徴される日韓の不信の溝はさらに深まりつつある。国民の親善を図るべき国家が、個人レベルで進んでいる交流の後足を引っ張るという構図が繰り返されているのが日韓の現状である。東アジアの現実を考えると、隣国に信頼される成熟した民主国家が登場するまでには、もうしばらく時間がかかりそうである。

教壇に立ち、熱心に韓国語と韓国文化について学ぼうとする学生たちをみて、彼らに対する愛情とともに、教育者としての重い責任を感じる。多少の時間はかかっても、学生たちが、頭ではなく心で隣国の人々を理解し、国際人としての普遍的な認識と教養を涵養するように最善を尽くしたい。また、日韓の近代史を研究する者として、国家や民族の呪縛に捕らわれない信頼の構築が個人レベルで進行され、日韓関係を含む国際社会の相互理解が深まり発展することを思い描いている。

「食」の異文化適応

キム ヨンギョン
金 娟鏡

東京学芸大学 (心理学)

「私、お肉が一切食べられないんです」と告白するたびに、十人中十人の日本人が「えっ！ 韓国人でしょう？」と、さも異端者を目撃したように驚いた表情を見せます。なかには、「韓国人なのに、かわいそうに……」と、哀れみをかけて下さる方もいます。それほど日本人には、「韓国＝肉料理」のイメージが根強いようです。しかし、年間一人当たりの肉類の消費量を日韓で比較してみますと、日本は牛肉 7kg、豚肉 11kg、鶏肉 10kg の合計約 28kg、韓国は牛肉 7kg、豚肉 15kg、鶏肉 6kg の合計約 28kg と、両国ではまったく差がありません。

さすがに今は慣れましたけど、来日当初は自分が韓国人である自覚もままならないうちに、韓国人としてのあり方を否定された気がして、かなり落ち込んでいました。韓国にいた頃は、(ビビンバのそばろ肉をほじくり出し、そっくり残すのを見て)「汚い」「わがままだ」と、偏った食習慣を非難する人はいても、それを韓国人だからという、社会的アイデンティティと結びつけて評価しようとする人はいなかったからです。ちなみに、もうひとつ告白させていただきますと、「キムチもあまり好きではありません」ただ、銃殺といわれても絶対に口にできないお肉とは違って、ときどき食べたくなるといった程度です。この告白を聞くと、「キムチこそは韓国料理。韓国人らしくない」と再び驚かれるのでしょうか？

小さい頃からたいへんな偏食で、今振り返ってみますと、白身魚を中心とした魚介類と、数品の野菜、海藻、そして甘い物だけを好んで食べてきた気がします。こうした偏った食習慣とともに、お料理ができなかったこともあって、来日して一人暮らしを始めてからは毎日のようにコンビニに出入りしていました。誰からも干渉されることなく、偏食傾向はますますエスカレートし、イチゴミルクとチョコレート、チーズケーキ、そして杏仁豆腐と出合ってから、それらを主食する文字通り甘党の党首になりかけていました。

しかし、甘党党首は半年しか続きませんでした。そのうち、親しい日本人の友人ができ、私の食生活に警

鐘を鳴らしはじめたからです。けれども、実家で食べていたような韓国料理を作るにはハードルが高すぎて、なかなかその気になりませんでした。また、日本の韓国料理店は値段が高く、毎日出入りできる余裕もありませんでした。そんなことで、自分の舌を和食に馴染ませたほうが手取り早く、賢い解決策のように思えてきました。お肉が入っていない日本のお弁当やお惣菜なら、何とか食べられそうな気がしました。実際に食べてみると、みりんやお砂糖を使う甘い煮物や佃煮は、甘党の私の口にぴったりでした。魚がメインのお寿司は、大好物になりました。次第に、梅干、ナスのぬか漬、納豆も食べられるようになり、和食のレパートリーは拡張していきました。また、「韓国＝肉料理」のように固定化されたイメージは強いものの、日本の食文化はさまざまな国々の食を取り入れ、実に多彩です。親友の一押しもあり、中華料理も、イタリア料理も、スペイン料理も、お肉さえ入っていなければ食べられるようになりました。韓国にいた頃は、わずかな食材の韓国料理しか食べなかったのですが、日本に来て、和食をはじめ、世界のさまざまな料理や食材と出会ったことは、私にとって「食」の第一次革命だったと思います。

しかしながら、韓国料理からは確実に遠ざかっていきました。もともとあまり好きではなかったキムチのみならず、にんにくも、唐辛子もほとんど口にしない生活を約7年間も続けてきたのです。一時帰国した時も、梅干とお茶漬を持参して、母には薄味のナムルを作ってもらい、食べていました。それを改めるようになったのは、ある出来事がきっかけでした。二年前、私が一時帰国している間に、日本人の友人が釜山に遊びに来ました。私は友人に、「本場の韓国料理は、日本で食べるよりうんと辛いんですよ。お腹を壊すかも知れませんから、携帯用の正露丸をもって来てくださいね」と警告したのです。しかし、皮肉にも私の警告は友人にではなく、自分にそのまま返ってきました。友人と一緒にガイドブックに載っていたお店を回ったのですが、そのたびにお腹を壊すのは私のほうで、結局その友人は一度も正露丸を使うことなく、辛い韓国料理を堪能して帰りました。帰りの金海空港で、「あなたは、辛いものを食べてお腹を壊す韓国人ですね(笑)」と茶化されました。私にとってはお肉が食べられるかどうかで評価された以上に、衝撃的な厳しい言葉でした。何かとても大事な能力を失った気がして、自分を恥ずかしく思いました。

日本に戻った私は、「食」の第二次革命を決意しました。ついに、自らお料理を作り始めたのです。そしてお料理には、にんにくと唐辛子を入れるように心がけました。しかし、私の胃はすっかり薄味に馴染んでしまっていたようで、頻繁にお腹を壊し、そのたびに正露丸のお世話になりました。努力の甲斐があって、一年ほど過ぎてからは、再び辛いものが平気になりました。また、お料理を作り始めてからは作る楽しみを覚え、自作できるお料理のレパートリーが次第に増えてきました。

去年夏の軽井沢研修のときは、みなさまに韓国料理をお出ししましたが、金外淑さんと韓京子さんの足手まといになることなく、私が無事にアシスタントできましたのは、この二回にわたる「食」の自己革命があったからだと思います。もし、日本に留学することがなかったら、日本人の友人たちと出会うことがなかったら、「食」の異文化に適応する必要もなく、また自文化での「食」習慣を改めることもなかったと思います。この場を借りて、感謝申し上げます。

台湾人・中国人としての私と江戸思想

藍 弘岳

東京大学（地域文化研究）

専攻を聞かれるたびに、いつも悩んでいます。如何に答えたらよいかよく分かりません。素人の方に対しては、よく「江戸思想史」と答えました。すると、この答えを聞いた人から、「あなたは日本の哲学を研究していますか、日本の文学は素晴らしいですが、哲学ってあまりないじゃないですか」と、聞かれたことが何回かあります。この単純な質問には深く考えさせられる問題が潜んでいると、私は思います。

というのは、現在使われている文学、哲学という言葉はどちらも近代西洋で成立した学問区別の枠組みの翻訳語ですが、江戸文学ないし徳川文学をタイトルにした本は数え切れないほど多いのに対して、江戸哲学あるいは徳川哲学という表現をタイトルにした本は、確かに、めったにないのです。それに対して、江戸時代の同時代とも言える中国の明清代の王朝名を借りて、明代哲学、清代哲学という表現をした書名はあります。

そのほかに、東洋哲学、中国哲学というタイトルを持つ書物も多いです。内容は大体儒学関係のもので、江戸時代にも儒学があるし、江戸時代の儒者の著作を探せば、もちろん哲学らしいものがあります。例えば、私の研究対象である荻生徂徠の思想研究を含める『日本古学派の哲学』というような本もあります。あるいはマルクス主義史観からの江戸儒者に関する哲学研究もあります。が、それにしても、なぜあえて江戸哲学をタイトルにした本はないのでしょうか。なぜ江戸哲学の研究は、江戸文学と比べられないほど少ないのでしょうか。その原因はおそらくさまざまですが、私が考え付いたのは、儒者そして儒学（特に朱子学）の母国の中国人は「理」を重んじるのに対して、日本人は「情」を重んじるという通念との関係です。つまり、日本人は情を重視するから、当然理屈っぽい哲学には向いていない反面、心のふれあいを説く文学に向いているのだという考えです。

そして、この通念のバリエーションはさまざまな日中比較文化論関係の著書で説かれています。普通、中国人は公共心がなくて賢くて道徳っぽくて偽善的だというように描かれているのに対して、日本人は素直で公共精神・美意識が強くて情に流れやすいというように描かれている。こうした通俗的な中国人観と日本人観はまったく間違いとは言えないが、正しいとも言えない、ある種のイデオロギーと見てよいでしょう。実際、こうした通俗的な中国人観と日本人観は実は江戸時代の国学者の朱子学批判、漢心批判関係の著作にはすでに見られます。意識されるか否かは別にして、現代の日中比較文化論の多くは実は江戸の国学者らの言説がある種の目的によって再生産されたものに過ぎないと思います。さらに、以上の日本人観に見られる諸特徴は、近代性と結びついてねじれて説かれている場合もあります。日本思想史研究においては、日本の古学と国学は中国から来た朱子学より近代的だという主張もあります。

はたしてそう言えるのか否かはとりあえず別にして、台湾人と中国人の二重アイデンティティを持つ私にとって、このような問題は実に興味深いです。というのは、日本に殖民地化された経験を持つ台湾の台湾史研究では、台湾の近代化経験における近代性と日本性を如何に区別すべきかが論点の一つなのです。このことと関係して、現代台湾では、近代性と日本性が混同されて、ある政治理想・主張のために、利用されています。つまり、中国と対抗・区別するために、自ら

の中国性を薄めるために、日本殖民経験と近代化経験を関係付けて見ている台湾人がいます。そして、私が驚いたのは、彼ら書いた著書に江戸時代の国学の朱子学批判、漢心批判と似ている思考様式と言語表現を見つけたことです。つまり、彼らは台湾人を中国人と区別するために、江戸時代の国学者のようなことをやっています。いや、彼らの持つ漢心は江戸時代の日本人と比べれば、もっと浸透しているから、それだけに彼らの中国嫌いは、江戸の国学者より激しいでしょう。

このように、一見、無関係な現代台湾と江戸日本は、実は似ている悩みを持っています。それは、どうやって儒学を含める中国文化という巨大の影から逃れるか、という悩みです。が、江戸の国学者は中国の表象としての「理」に抑圧された「情」を発見して、「情」という中国文化の影から逃れる武器を手に入れ、日本文化の特徴を発明しました。それに対して、現代台湾の脱中国イデオロギー者らはどのような武器を選択すべきでしょうか。中国からの移民・日本殖民地の住民の子孫としての現代台湾人の独特な心情でしょうか。それとも日本殖民政府のおかげで作られた近代的な制度でしょうか。彼らは両方とも武器として使っていますが、果たしてこの闘いには勝利の可能性があるでしょうか。果たして脱中国は可能でしょうか。そもそも脱中国は必要でしょうか。台湾人が必要なのは脱中国ではなく、複眼的な視点で中国を見ることなのではないかと思います。実際、江戸思想史においては、江戸の国学者のように脱中国を唱えた思想家もいますが、複眼的な視点で中国を見ていた思想家もいます。私の研究対象である荻生徂徠はその一人です。これは台湾人であると同時に中国人でもある私が江戸の日本人荻生徂徠に共感を覚えた所の一つです。現代日本で江戸の徂徠と出会った中国・台湾人としての私はこれからも、複眼的な思考をベースにアジアにおける中国と、台湾における中国と、台湾における日本というような問題を考えていきたいと思っています。

ジェンダー研究への関心

テネグラ ブレンダ レスレション ティウ
Tenegra, Brenda Resurecion Tiu

お茶の水女子大学 (人間発達科学)

お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム 研究員

私は、お茶の水女子大学人間文化研究科の人間発達科学に所属し、ジェンダー論 (Gender Studies) を学んでいる。私が、このジェンダー研究の傾向や、それが他の研究分野とどのように関係しているのかなどについて確実に理解したのは、日本の大学院に入ってからのことである。私が日本に来てからもう6年経つが、自分の専門分野について聞かれた際に、「ジェンダー研究」という表現を使うと、よく理解してくれる人はとても少ないように思う。例えば、「セックス研究」と誤解されたり、「ジェンダーとはなに語?」とか、「なぜ性差研究という表現は使わないの?」など、大学内でも聞かれたこともあった。しかしながら、実際には「ジェンダー」は、既に学者や政治家の間でのみ使用される「専門用語」ではなくなってきている。世間では、男と女は社会的・経済的役割が違うという意識が強くなってきている。「ジェンダー」は、何が生物学的性差で、何がそうでないものかを真剣に考えることを可能にしてくれるキーワードである。このキーワードを使えば、雇用・教育・家庭などに存在する、「男だから」「女だから」という社会的な性別分業を見直すことができる。「ジェンダー研究」は、社会学、人類学、経済学、言語学、文学などといった様々な専門分野からなされており、家庭領域からグローバルといった構造的な問題、雇用・教育・家庭の不平等や、エスニシティを越えた階級、アイデンティティといった幅広い課題を扱う、学際的なアプローチが必要とされる研究分野である。

ちなみに、私が博士論文を書く際に選んだ研究テーマは、「ジェンダーと労働移動」である。具体的には、既存の研究ではもっぱら経済学の視点からの議論が多かった「送金」をテーマにしている。従来の送金研究の分析枠組みは、経済的相関関係や経済的理由に基づく意思決定といった伝統的なカテゴリーに依存しており、ジェンダーの視点を取り入れた分析が少ない傾向があった。そのため、特に女性が行う送金に見られる多様なパターン (例、金銭的に評価されない労働など) を理論的に把握することができなかった。移住女性労働

働者を主体として取り上げ、彼女たちが置かれているジェンダー化された現実を分析することができなかった。さらに、こうした移住女性労働者が行う送金は、ジェンダーや国際労働移動をめぐる議論のなかにどのように位置づけられるのか、という問題がでてくる。

発展途上国であるフィリピンを含む東南アジアの各国においては、経済的、あるいは政情が不安定になるにつれて、女性の移動率が、国内の農村から都市への移動、また国際移動の両面で、増加していることが知られている。日本への女性移住者の主な送り出し国でもあるフィリピンだけでなく、タイやインドネシアといった東南アジアの諸国では、70年代以降、女性の国内移動が活発化し、80年代以降は、国際的な移動も拡大傾向にある。特に、近年のフィリピンからの国際労働移動は、女性の数が男性を上回る傾向を見せている。このような現象はなぜ起こったのだろうか。

以上のような疑問を解くために、働く男女の問題や雇用機会の現状を研究する一方で、その理解を高めるために、「ジェンダー研究」に関する知識を高めることが必須条件になってくると思う。さらに、性別役割分業が社会にもたらす影響を、あらゆる分野で検討することが重要であろう。

生活の最適化：日本とベトナムの過ごしやすさの比較

ヴォーチャーコン
VO CHI CONG

東京工業大学（数理・計算科学）

Freshwind Information Technology Corporation 取締役

お世話になっている渥美奨学財団2005年度の年報（Annual Report）に1ページ（約1400字）のエッセイを出すことになったので、日本とベトナムの人々の生活様態を比較してみたい。

ベトナムは品質の高い、安い労働力によって経済発展している。国の伝統的な価値を残しながら、生活基盤を高め、先進国に仲間入りしたいものだと思う。しかし、ベトナムでは快活な生活を理想とする人が多いようだ。経済的な豊かさよりも快活さを好

む人が多いように思う。毎朝職場に行く前に大体の人がコーヒーショップに向かい、三十分はコーヒーを楽しむ。夕方になると大体の人が早速帰宅し、残業の概念を否定し続ける。夕食は家族団欒の場になる。時間が非常にゆっくりと流れ、時間の無駄遣いと感じてしまうよりは、時間の贅沢だと感動してしまう。先進国の仲間入りの目標というものは、快活な生活のままで達成できるものなのかと、日本に長くいる私はベトナムに帰国するたびにいつも思う。

日本のGDPに象徴されるように、日本人の生活水準、平均寿命は世界トップレベルに達している。留学生、少なくともアジアからの留学生は異口同音に日本は生活しやすいという。彼らはまた、日本での生活は寂しいという。この寂しさはどこから来て、どのように解消すべきか考えてみた。まず、日本人はまじめで向上心が強く、改善を絶えず求めようとする傾向がある。仕事の効率や合理性を限りなく高めようとする。不合理性の中に面白みがあるということを知らない人が多いようだ。例えば、ベトナムでは、車が定刻に来ることはない。遅れた車を車で待っている旅客は、いらいらするどころか面白がったりする。日本では電車の遅れは許せないようになっているのとは正反対であろう。

外国人が日本にたくさん来て状況は変わりつつあると思う。私が入った東京工業大学も外国人留学生が一割を占めるまでになった。英語や国際コミュニケーション能力が問われるような時代になった。しかし、それでも、英語が嫌いだとか苦手だとか、世界に日本語を広めるべきだと考える日本人が少なくない。ベトナム語を広めようと思わない私には不思議な感覚である。たぶん日本は経済大国だから、他の国に自国の言葉を覚えさせる発想が自然に出てくるのだと思う。金持ちだから多少押し付けがましくても良いと思えば納得がいく。世界で日本が政治的にも大国になっていけば、本当に日本語が英語に置き換わり、日本人がより快適に世界で過ごせるようになるだろう。しかし、快適さの追求で、日本大国の国民は幸せな生活を送っているだろうか。

私は今年三月で大学院を出て、社会人になった。学生生活の最後の一年間で私はよく自分のこれまでの生き方を振り返りながら、これからの生き方を模索した。人生の三分の一は日本で過ごしたので、日本での過ごしやすさとベトナムでの過ごしやすさの比較の材料は十分にある。しかし、日本とベトナムではどちらが豊かか考えてもなかなか答えが出てこない。GDPなどの

経済指数からすると、日本はずっと豊かだ。しかし、人々の生活の場を見ると、ベトナムの方が快活に生きていることに気づいてしまう。

私の専門は最適化なので、「最高の人生」という概念によく囚われる。それだけに、目にする人々の生活を比較してしまうのだ。最近気づいたのは、人々が快活に生きると社会全体が楽しく感じられることだ。快活に生きるには、物理的・精神的バランスが不可欠だろう。そのバランスを実現するには、安全な生活、楽しい仕事、親愛する人々と共有する時間の三つがもっとも基本的で、この事実は万国共通であろう。

生きること、それだけでも非常に重要なことだが、幸せな生活を現に送ることもまた非常に重要なことである。住民がそれぞれ幸せを自立的に目標定義し、追求し、自分の生活を最適化できるような社会こそ豊かな社会だと思う。

窓の外で手を振っている中国人スタッフ

ワン シュエピン
王 雪萍

慶応義塾大学・博士（政策メディア）

慶応大学グローバルセキュリティー研究所研究員

2月に中国に一時帰国した。博士学位を取得した後の帰国だったので、気楽な気分で北京で二日間散策した。北京オリンピックが近づいていることもあり、町中に工事が見られ、変化も多く見られた。しかし、私が最も驚いたのは、北京空港で飛行機に乗って、日本に飛び出そうする直前、たまたま飛行機の窓から外を眺めた時だった。窓の外で三人の中国人スタッフが、私が乗っている飛行機に向かって、笑顔を見せながら、手を振って別れを言っていた。彼らのこの行動について機内放送やスチュワーデスから乗客に知らせていたわけではなかった。つまり私がたまたま窓の外を見ていなければ、分からなかったはずだった。乗客に気づいてくれるか分からないにもかかわらず、彼らの別れのあいさつは飛行機が飛び立つまで続き、最後まで笑顔のままだった。

私はこのサービスに驚かされた。初めて北京空港に行ったのは1988年の春に、父親が日本へ留学するために出発した時だった。当時北京空港を歩い

ていたら、掃除のおばさんにぶつかり、おばさんに叱られたことがまだ記憶に新しい。さらにその一年半後の1989年10月に父が中国に帰国した時は、ちょうど天安門事件の6ヶ月後で、まだ北京は嚴重警備していた時期だった。地元から北京まで電車で1時間半しかないのに、北京に入るために、特別許可書を申請しなければいけなかった。さらに飛行場に行った時も、色々な検査を受けて、やっと空港に入れた。その時の状況から考えれば、今の中国人スタッフのサービスは信じられない変化であろう。

確かに、最近中国の変化は激しい。私は日本に来てからそろそろ8年になろうとしているが、毎回中国に帰るたびに中国の変化に驚かされる。これらの変化は中国にだけ現れているだけではなく、日本に来ている中国人にも現れている。8年前に日本に来た時に、ほとんどの日本人には中国人は貧乏だというイメージしかかったようだった。しかし、この8年間の中国の発展で、中国人は日本へ観光に来る人も多くなり、高級ブランド品を買う中国人の姿も銀座などの高級消費地域でもよく見られるようになった。また日本に来た留学生も昔とかなり違ってきた。海外留学は便利になったので、日本留学は難しくなくなり、さらに留学費用も中国の親が負担してくれるケースも増えてきた。今は中国人留学生だからといって、必ずしも一生懸命アルバイトをして、生計を立てているわけではなくなった。中には、アルバイトをすることが恥ずかしいと思う留学生も現れた。彼らは私たちと五、六才の年齢差しかないのに、人生や、勉強、発展に対する考え方がかなり違いがあると感じる。つまり、彼らとの違いは年齢が影響しているだけではなく、中国を離れた時間がブランクになっているように思える。中国の発展による変化に外国人が慣れる必要があるだけではなく、中国人の私たちでさえ、長く離れたからこそ、もう一度中国を認識し、学習する必要があると強く思う。博士論文のテーマとして中国の留学生について研究してきた。その中で留学生たちの中国に対する不理解、不認識こそ、多くの留学生を悩ましている。しかし、私自身も中国人留学生として真剣に発展している中国を常に注目しなければ、時代遅れになってしまうかもしれないという危機感がある。あるいは今私はすでに時代遅れになっているかもしれないという危機感の方がもっと強い。これからも海外に滞在している以上、中国について必死に勉強して変化に就いていかなければいけないと思っている。

私の童軍生活

おう けんかん
王 健歡

総合研究大学院（統計科学）

統計数理研究所外来研究員

「童軍(トングワン)」というと、子供が兵士になることと思われていますが、実は、童軍は香港ではボーイスカウトという意味です。台湾、シンガポール及びマレーシアは「童子軍(トンジジュン)」と呼ばれています。ボーイスカウトというのは、争うこととは全然関係なく、人種、信仰など区別なく、すべてに開放されており、キャンプや奉仕活動を通じて学区や学年を超えた、地域社会における教育活動です。その教育は青少年たちが自ら成長できるような活動です。

私とボーイスカウト運動の関わりは7歳から始まりました。小学校の三年生の時にカブスカウト（ボーイスカウトの年少団員、カブ＝オオカミの子）に参加して、23歳で日本に留学する前までリーダーとして参加して来ました。その魅力は日本に来てもなるべくボーイスカウト活動に参加したかったほどです。



2004年のある日に、インターネットで日本ボーイスカウトのホームページにアクセスしてみました。そして、「新宿」と「ボーイスカウト」をキーワードとして検索しました。西早稲田にある新宿第17団のホームページを見つけました。よく読んでから、日本のボーイスカウトに参加したいと書いてEメールを送りました。次の日に返事もらった時は、とても嬉しかったです。そして、二人の日本ボーイスカウト連盟東京新宿区のコミッショナーから連絡を受けまし



た。2月22日の「世界友情の日」に誘われました。初めて日本のボーイスカウトのイベントに参加して、ちょっと緊張しました。言葉が通じない場合もあるし、違う制服を着ていて宇宙人のように見られました。住んでいる町のグループに入りたいという希望を伝えると、新宿第1団に紹介してくださいました。新宿第1団は、新宿区の上中下落合と中井の辺りのグループです。子供たちはほとんどこの地域に住んでいます。

最初の三ヶ月間、私はすべての活動に参加しましたが、若いリーダーの短期見学と思われて、子供たちに知らん顔をされました。当時は私の日本語に限度がありましたので、私ができることはあまりなさそうでした。自分の存在は全然必要ではないようでした。しかし、カブスカウト隊の隊長山田達也さんはよく私に役割を与えてくれました。山田さんが常に重視することは、若いリーダーを役立てることでした。半年間、いろいろな隊集会、リーダー会議等に参加し、下見等をするうちに、第1団のスタイルがわかるようになってきました。

八月には、長野の高遠で夏キャンプを行いました。私を含めた3人のリーダーがキャンプファイアを担当しました。木も火も準備したのに、大雨が降りました。私たちは小さなホールに移動せざるをえませんでした。キャンプファイア・リーダーの3人は参加者150名と共に歌いながら踊りました。のどが痛くなるまで大きい声で歌いました。

その夜、1団のリーダーと入浴した時、他の団のリーダーが私に話しかけてきました。彼は初めて私にEメールを送ってくれた17団のリーダーだったので、友達が「どうして彼を知っているか」と私に聞いてきたので、私は入団の由来を友達に話しました。私は「もし、あっちの団に入っていたら、今夜はたぶん彼らと友達になっていたよ」と言うと、友達は「絶対違うよ！ケビン1団に入ることが一番いいんだよ。」といました。



日本のボーイスカウトに参加して、確かに、自分の興味以外に、いい友達ができ、経験もいっぱい増え、技能と考え方を交流することができました。これらの素晴らしい体験は、私がどこへ行っても終わることのない童軍生活に役立つことでしょう。

人生の停留所（驿站）

～日本での留学生生活を振り返って～

ちょうちょうしょう
趙長祥

一橋大学・博士（商学）
（在上海）

幾度も花が咲き誇り、幾度も花が散り、幾度めかの春がきた。ちょうど6年になった日本での留学生生活を終え、3月の卒業を機に中国への帰国を決めた。したがって、今年の春を迎えたのは、中国の上海である。現在、上海の朝晩はやや寒いですが、すでに緑がいっぱいで春の気配が感じられる。窓の外では桃の花が満開で、日本の桜と勘違いするほどの感激であった。この上海で日本での留学生生活を振り返って見ると、意外と感慨深い。楽しい時も、辛い時もあり、手応えのある留学生活だった。

6年前の桜の満開の季節に、故郷を後に日本へ行った。最初の停留所は大分県にある小さな温泉の町、別府市であった。別府は小さな町だが、山に囲まれ、海に面し、自然に恵まれた住みやすい場所である。町の隅々に温泉があるため、日本で大変有名な観光地でもある。そんな素晴らしい場所で生まれ育った人々は優しく、思いやりのある人ばかりであっ

た。別府大学の別科で日本語過程を1年間しか勉強しなかったが、そこで出会った先生、アパートのお母さん、バイト先で出会った人々はすべて思いやりのある人で、多くの思い出ができた。今でもこれらの人々と連絡があり、今後もずっとこのつながりを保っていきたいと思う。インターネットカフェや海鮮加工工場でのバイト、大分県留学生日本語弁論大会での優秀賞の獲得、大分県知事との新春番組対談、大分県内の留学生交流活動を通して様々な人と友達となり、楽しみながら充実した勉強生活を送った。

1年後、順調に同志社大学の大学院へ進学した。日本の古都である京都は私の留学生活の二つ目の停留所となった。日本の伝統文化の粋が凝縮された京都では2年間の留学生生活を送った。緊張感のある充実した勉強とアルバイト以外の時間には、自転車で古都を回った。清水寺・銀閣寺・高円寺・嵐山など、多くの京都の名勝をめぐり、日本伝統文化の粋をいっぱい感じ取った。また、京都地区留学生の日本語弁論大会、日本全国留学生フォーラム、近所との触れ合い活動などへの参加を通じて、精神的面から自分自身の留学生生活を豊かにすることができ、人生の思い出も数多く実った。

充実した2年間の京都の生活を経て、一橋大学の博士課程へ進学し、ステージは日本留学の3つ目の停留所一東京へ移った。博士課程の正規在籍の間に卒業するために3年間ほとんど自分の研究と発表論文に没頭した。3年間に無事に卒業したが、折角東京にいたにもかかわらず、ほとんど東京を回らなくて東京に特有の雰囲気や伝統文化に触れ合うことができなかった。今振り返ると非常に残念なことで、もう少しゆっくりして留学生生活を楽しんだほうがよかったと反省している。しかし、幸運なことは博士課程の3年目に渥美財団と出会って、物質的な面だけでなく、精神的な面（人的ネットワークの広がりなど）でも自分の留学生生活を豊かにしてくれたことで、心から感謝している。

6年間の留学生生活を終え、母国へ戻った。人生はこのような一つひとつの停留所から重なったもので、一つひとつの停留所で楽しみながら数多くの思い出を作り、しっかりと歩いていくことなのだ、というのが一番強い感想である。これから日本で結んだ縁、身に付けた知識とチャレンジ精神を以って、新しい生活を切り開いていきたい。

2006年度渥美奨学生のページ 「自己紹介」

- チュ・スワン・ザオ 「草の根レベルの国際交流・理解を目指して」 ---- 28
- 胡 秀英 「ボランティア活動は花も実もなる」 ---- 29
- 玄 承洙 「同人の夢」 ---- 30
- 李 成日 「北東アジアの学問交流の架け橋を目指して」 ---- 31
- 梁 蘊嫻 「自分に忠実に」 ---- 32
- モホッタラ・シャミラ 「来日して10年」 ---- 33
- エレナ・パンチェワ 「私の人生を変えた日本との出会い」 ---- 34
- 徐 景淑 「留学への導き」 ---- 35
- シム・チュン・キャット 「だから私は日本と教育学を選んだ」 ---- 36
- 孫 軍悦 「『共識』から『共感』へ」 ---- 37
- ウィーラシンハ・ナリン 「日本へ留学した理由」 ---- 38
- 禹 成勲 「とも」 ---- 39

草の根レベルの国際交流・理解を目指して

チュ スワン ザ オ
Chu Xuan Giao

出身国：ベトナム

在籍大学：東京外国語大学大学院地域文化研究科・文化人類学

博士論文テーマ：民間信仰と近代の歴史人類学：九州の一地方の事例から



来日してからようやく五年が経った。この五年の間、東京外国語大学で文化人類学の理論を学びながら、日本の一地方で長期に渡るフィールドワークを行ってきた。現在このような形で「自己紹介文」を執筆することは、自分の日本留学の理由を再認し、博士号取得後の進路を考える上で私にとって有意義なものとなるであろう。

私にとって、日本留学は、幼時からの夢であった。農村に生まれ育ち、ベトナム戦争後の困難な時代を生き、私は、これからこの国の人々がどのような方法で平和かつ裕福な生活を送ることができるのかを時に黙考し、また時に親友らと熱心に話し合い、先進国への留学を望んでいた。同時に、仏領時代にファン・ボイ・チャウ志士らによって展開された「東遊(ドンズ)運動」からも大きな影響を受けている。それは、ベトナムの優秀な青年を密かに日本に留学させて、独立運動を担う人材を養成することを目指した1905年に始まった有名な運動である。当時の政局のため、同運動は成功しなかったが、その精神、つまり「東遊＝日本へ行こう」という志向は時代を超えても響いている。

この幼時からの夢と執筆中の博士論文の研究課題とは連続したものであると言えるかもしれない。本研究における最大の関心は、日本の「近代」というプロセスを、長期現地調査を行うことによって民間・民衆レベル、つまり草の根レベルから、理解することである。別言すれば、日本人がどのように国造りをした、しているか、どのような犠牲を払っていたのか、また現在どのような難問を抱えているのかを文化人類学的手法により具体的かつ微視的に検討することである。このような検討は、ベトナムの「近代」を考察するための比較視点を提供することになるであろう。事実、興味深いことに、この研究を通じて、私自身日本の理解を深めるのと同時にベトナム

ムについての理解も深化させた。

本研究は、ベトナム人による海外研究の嚆矢である。人類学的「他者」の研究を行うことは、ベトナム国内における民俗学という研究枠組を相対化すること、自民族中心主義を批判すること、近代に形成された国民国家という堅い枠組を超越することなどの問題系にも繋がっていくことであろう。これは、100年前に「亜細亜大同」「世界大同」を提唱したファン・ボイ・チャウの理念を現代的文脈で読み替える作業といえようか。

上記の目論見で、博士号取得後、まず元の職場であるベトナム社会科学院に復職し、ベトナムでの研究を再開する。さらに、母校のハノイ国家大学、建設中の社会科学院附属大学などにおける日本歴史文化講座、民俗学講座で教鞭をとることも計画している。つまり、私と欧米留学中の友人たちは、ベトナムにはまだ無い、「文化人類学」分野の開拓、その講座の開設という任務を背負っている。このため、本研究から得られる結果は、学術論文だけではなく、一般読者、特に若者向けの書物のための材料としても使われることになる。また、政府機関及び民間団体と協力しながら、日本とベトナムが民間レベルでより緊密な関係を結ぶための一助となりたいとも考えている。そこで、私が目指している国際交流・理解・親善は、民間レベルを中心とするまさに草の根レベルにおける事業である。

ボランティア活動は花も実もなる

フ シュウイン
胡 秀英

出身国：中国

在籍大学：千葉大学大学院看護学研究科・訪問看護学教育研究分野

博士論文テーマ：中国残留孤児帰国者高齢期の健康維持・増進を目指す看護援助



ボランティア活動は、自発性に基づくものであり、地域社会での相互扶助などの動機に裏づけられた活動である。キーワードといえば、「自立性」や「社会性」、「無償性」、「創造性」などを挙げることができよう。

1. 初めてのボランティア活動経験

1987年頃、中国の西南地方の大学病院の国際病棟に看護師として勤めていた時、病棟の職員はほとんど英語ができたが、日本語ができる人がいなかった。入院してきた日本人の不安と職員の困惑を見て、日本語の独学を思い立った。その後、ずっと病院内で日本語の通訳のボランティア活動をしていた。夜中にも呼ばれたことがたびたびあった。

ボランティアをするにはまず、それについて学び、自分で深く考え、それを実践するに当たっての心構え、マナーを知る必要があるから、苦勞をした。ボランティア活動には金銭的、物質的な報酬は存在しない（無償性）。しかし、お金には代えられない大切なことを学ぶことができる。助けを必要とする人の感謝の気持ちや喜びを見るたびに、自分の満足感・役に立つ実感を得て、自分の存在価値の確認ができ、周りへの波及効果にもつながり、生活に張り合いが生まれる。さらに、自分の知らない世界をみて人生の経験を深めていけると感じた。

大学講師を兼務した時、老人看護学の教科書がなくて、検索した資料を参考しながら講義をしていて、知識不足を感じ、留学することを考えた。その時、留学先に日本を選んだ理由は、一つは文化的類似性の高い隣国日本の高齢者ケアの研究分野が進んでいることである。もう一つ大きな理由は、ボランティア活動を通して、日本語がうまくなり、日本語で勉強できる自信があったのである。ボランティア活動は対象となる人や社会全体のためだけでなく、自分のためにもなることがさらに実感できた。

2. 現在のボランティア活動

2002年から、ずっと千葉大学附属病院で中国残留孤児帰国者の外来や入院などの通訳のボランティアをしてきた。感動を味わうことが何度もあった。そして、それらの帰国者があまりよい境遇にあるとは言えない状況を知り、自分の知識を生かして、その方々のために何か役に立つことができないだろうかという思いを込めて、本格的な「中国帰国者の向老期・高齢期の健康維持・増進を目指す介入研究」にとりくむことにした。ボランティア活動をきっかけに、今は研究対象者から大変信頼され、研究は順調に計画通りに進行している。

日本の看護分野で（例えば日本看護科学学会や日本家族看護学会など）ボランティア活動や日中国際看護学会や日本看護協会と中国看護協会の交流会などの通訳など、ボランティア活動に携わってみて、国際理解や親善に非常に強い関心を持つようになった。

今は博士号取得のゴールに向かうラストスパートなので、しっかり頑張っている。

日本留学を終えた後は、日本での勉強から得た知見と示唆を活かして、看護学分野の教育者、研究者として勤めて行きたいと考えている。特に、後進の育成を通して、中国における看護学の発展・国際化のために力を尽くしたいと考えており、同時に、看護学分野における中日両国の友好交流における橋渡しの役割を果たしたいと思っている。具体的には、現在在学している千葉大学と中国の母校との連携や、今、通訳の活動で関わっている日本看護協会と中国看護協会の交流を深めるために最善の努力をして行きたいと考えている。

同人の夢

ヒョン スンス
玄 承洙

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻

博士論文テーマ：チェチェン紛争とイスラーム：チェチェン人の抵抗運動と国際イスラーム過激派の相互関係



昭和の師匠と賞賛された大思想家、安岡正篤に魅了され、易の思想に入門した私は、毎朝、筮竹を使ってその日の教訓を求めることを習慣づけて久しい。私にとって易は、迷信じみた占いではなく、修養法であり人生の指南である。いつか将来の指針を求めて卦を出したことがあった。その結果で得た「同人」の卦には、「大同の交わり」という意味が込められていた。そして大川を渉り曠野で集まることや「族を類す」ことなどが書かれていた。私は『易経』に記された同人卦の意味するところを咀嚼し、これぞ徹底した現場主義に基づく研究人生がこれからも続くに間違いないと感心したものである。

今振り返るに、私はいつも海外事情に好奇心旺盛な少年であったように思える。小学校六年生の頃、偶然に接した日本の漫画がどうしても読みたくなり、その日から日本語を独学で覚えた。大学ではロシア語を専攻とする一方、日本大使館で通訳のアルバイトをしたので、独学で覚えた日本語を実際に活用する機会にも恵まれた。ソウルオリンピックを記念して韓国で初公演された歌舞伎の通訳を任された経験は、日本の伝統文化に魅せられる契機となった。

韓国で修士論文のテーマをチェチェン問題に決めたのが、イスラームと私のもう一つの奇縁の始まりであった。過去 300 年間に絶えずロシアに抵抗してきたこの少数民族の運命は、民族と宗教、国際政治が複雑に絡み合った二つの戦争を通して、信仰と暴力という痛ましい主題を私に投げかけた。当時国際イスラーム過激派との関連で深刻度を増していたチェチェン紛争を、本格的に研究してみたいという私の希望と熱望に反し、韓国でロシアとイスラームを結びつけて考える先生は皆無であった。そんななか、この分野の研究で活発な著作活動をしておられた山内先生はいつも私の憧れの師であった。そのアカ

デミズムに触れたいという結論に達した私は、それまで務めていた外務省に辞表を出し、日本政府奨学生試験に合格して渡日した。

東京大学での 6 年間の研究生生活は、デスクワークとフィールドワークのバランスを保ちながらも常に現場を意識することが、紛争を研究する者にとってどれ程重要であるかを私に教えてくれた。今後もこれまで以上に現場で活動する研究者になりたいと願っている。日本にはすでに紛争研究で現場主義の模範を身をもって体現した研究者がいる。タジキスタンで不遇の死を遂げた秋野豊前筑波大学助教授である。彼の活動哲学を見本とし、かつ易の教えた大同の交わりを紛争現場で実践していきたい。

北東アジアの学問交流の架け橋を目指して

リ チェンル
李 成日

出身国：中国

在籍大学：慶應義塾大学大学院法学研究科・政治学専攻

博士論文テーマ：中韓国交正常化：中国の朝鮮半島政策の転換



私は中国吉林省出身の朝鮮族で、1990年に龍井高級中学を卒業して、北京大学政治行政管理学部（現政府管理学院）に入学しました。大学で政治学を専攻し、2000年7月には北京大学のアジア・アフリカ研究所で国際政治の修士課程を修了しました。同研究所では、主に朝鮮半島を巡る北東アジア国際政治および日中関係について勉強してきました。この間、朝鮮半島問題を研究するため中国国内の研究成果のみならず、日本や韓国の学会の学術成果についても幅広く接触しようと努力しました。この中で、慶應義塾大学の自由な研究環境、豊富な研究資料および朝鮮半島問題研究に関する名声について、深い憧れを持つことになりました。

特に、朝鮮半島問題研究における日本第一研究者である小此木政夫教授の下で、学問を続けたいという念願が捨て切れませんでした。そして、日本留学を決意して、2001年4月より慶應義塾大学大学院法学研究科の博士後期課程で在学しながら、現在に至るまで、「中韓国交正常化：中国の朝鮮半島政策の転換」というテーマで研究を続けてきました。

中国の朝鮮半島政策の転換過程を分析することは、現段階におけるその政策を理解するために重要な研究であるし、さらには、朝鮮半島の平和と安定においても中国の役割を評価できると思われまます。

日本に留学する前には中国国内でずっと生活、勉強したため、自国以外の世界についての理解があまり深くありませんでした。国際政治を勉強している若い学生として、隣国の国家、民族、文化等を理解すること、特に長い間、中国と伝統的な友好関係を持ってきた日本を理解し、その優れた先進技術、経験を理解、勉強することは、国際政治分野における学術研究、交流にとっても、きわ

めて重要であるという認識を持つことになりました。

数年間の留学を通じて、日本の政治、社会、文化を幅広く接触、理解し、さらには専攻分野における勉強、研究にも努力して、今後の学問研究、学術交流のための研究レベルを高めて行きたいです。来年まで、学位論文の執筆に没頭して、博士号を取得しようと一生懸命に頑張っています。博士号をいただいたら、中国に戻って大学あるいは研究機関に就職し、朝鮮半島問題を含め国際政治に関する研究を続けたいと思っています。同時に、日中両国の学術、文化、友好交流においても、小さな力でも貢献したいと存じております。

自分に忠実に

りょう うんけん
梁 蘊嫻

出身国：台湾

在籍大学：東京大学総合文化研究科・超域文化科学専攻比較文学比較文化研究室

博士論文テーマ：江戸時代における『三国志演義』の受容：「義」概念の変容を中心に



子供のときから『三国志演義』などの歴史小説が好きでした。大学時代に、『三国志演義』が江戸文学に大きな影響を与えていることを知り、江戸文学における『三国志演義』の受容を研究するために、日本への留学を決意しました。

来日する前に、尊敬する恩師は「研究は苦痛を伴う仕事だが、苦痛を経験すればするほど、それを成し遂げた時の喜びは大きい」と私におっしゃいました。その先生の言葉をかみしめ、期待に胸をふくらませて日本へやってきた次第です。

東京大学に入学し、江戸文学に初めて触れ、それは私の目に新鮮なものに映りました。例えば、『三国志演義』を題材としている浄瑠璃『諸葛孔明鼎軍談』の中には、わが子を殺すことによって、「忠義」を果たそうとする場面があります。現代の価値観に合わないことに新奇さを覚えると同時に、違和感もありました。そして、違和感があったからこそ、この未知の世界をさらに深く探検してみようという意欲が湧き、歌舞伎や文楽などの江戸芸能を積極的に鑑賞するようになりました。ある時、『菅原伝授手習鑑』において、源蔵が「忠義」のために自分の子供を殺した場面を見て、私は思わず泣いてしまいました。そのとき、自分が江戸時代の人々の考えに少し近づいたと気づき、何ともいえない幸せを実感しました。

博士課程に進学した後、幅広く日本文化を勉強しようとし、江戸文学以外の授業にも参加しました。例えば、古代文学の演習では、『日本書紀』の注釈書である『日本書紀通証』に出会いました。本書は実証的・考証学的な立場から『日本書紀』を注釈したもので、歴史を一つの趣向として芸能化する江戸文学とは異なった性質を持ちます。このような注釈書は、自分の真面目な性格と軌

を一にするものがあるため、私は『日本書紀通証』にも夢中になりました。江戸文学と古代文学を同時に研究するのは非常に大変でしたが、古代文学も研究したいという自分の気持ちに正直に従うことにしました。そして『日本書紀通証』について納得できるところまで追究した結果、『日本書紀通証』を主題とした論文を一本書き上げることができました。そのときの達成感と喜びは何よりも大きいものでした。恩師の言葉が改めて思い起こされ、貴重な体験となりました。

江戸文学ばかりでなく、他の時代の作品や文化をも真剣に勉強したからこそ、江戸文学をより広い視野から見渡せるようになったと思います。執筆中の博士論文の構成は、そのような幅広い見通しを持ったからこそ可能となりました。また、他の時代の作品と比較したからこそ、江戸文学にある「戯れ」の精神をさらに実感できるようになりました。戯れでありながら、同時に、純粹さや真剣さが表現されることが江戸文学の真髄ではないかと思出すことができました。

留学生生活を始めて、専門知識や学問の手法を身につけるだけではなく、自分に正直に、幅広く関心を持って、あらゆることを吸収しようとする姿勢も大事だと痛感しているところです。留学によって習得したことを、やがては社会に還元するのが今の目標です。そのため、台湾へ帰って、研究を続けると同時に、大学で日本文学を教えることで、日本と台湾の友好の架け橋になりたいと考えています。

来日して10年

モホッタラ シャミラ
Mohottala Shirmila

出身国：スリランカ

在籍大学：東京大学大学院情報理工学系研究科・池内研究室

博士論文テーマ：ITSにおける車両認識とクラス分類



はじめまして！モホッタラ シャミラと申します。スリランカ出身です。現在、東京大学情報理工学系研究科の博士課程3年生で、画像認識に関する研究に取り組んでいます。コンピュータビジョンの分野では画像認識が重要な課題で、人間の画像認識メカニズムを解明するため古くから様々な研究がなされてきました。しかし、現実環境の照明変化や影の存在のもとでの画像認識には、まだまだ課題が多く残されています。私は、このような状況にも頑健な画像認識手法を研究しています。具体的な応用として道路の真上から撮影した画像から車両を認識する自動車両認識システムを開発し、屋外実験を通して様々な天候や照明状況に強い認識手法を提案します。

私は高校の卒業と同時に日本に来ました。来日して一年間東京の国際学友会日本語学校で日本語を勉強しました。その後、鶴岡工業高等専門学校の情報工学科に編入学しました。鶴岡での生活は、寒さが厳しくて、言葉も東京で勉強した日本語と違って、友達もなく、辛いスタートでした。膝まで積もった雪と吹雪の中での通学が、暖かい国からきた私にとって何より大変でした。しかし、3年経って卒業する頃には、寒さにも方言にも慣れて、友達もたくさんできて、鶴岡が大好きになりました。私の人生に貴重な経験を与えてくれた3年間でした。

その後、東京の電気通信大学へ、そして東京大学大学院へと進学し、情報工学の勉強と画像認識に関する研究を進めてきました。これからも一生懸命に研究を続け、画像認識の分野に大きな貢献をすることが夢です。

私は日本に来て今年で10年になります。日本で出会ったお母さん、お父さん達や先生方、そして沢山の友達の支えがあったからこそ今日まで頑張れたと思っています。

す。暇な時に習った華道、茶道、日本舞踊などを通して日本文化を理解できただけでなく、趣味も増えました。また、スリランカでは決して経験できない四季を楽しめたことも嬉しく思います。これらの全てが私の人生の宝物です。日本は私にとってもう外国ではなく、第二の故郷です。これからも様々な経験とたくさんの人との交流を重ね、日本での留学生生活をより貴重なものにしていきたいと思っています。将来は、日本で学んだ技術や経験を母国に伝え、進歩し続ける情報化社会と発展途上にあるスリランカを繋ぐ掛橋となることが夢です。

私の人生を変えた日本との出会い

エレナ パンチェワ
Elena Pantcheva

出身国：ブルガリア

在籍大学：千葉大学社会文化科学研究科・日本研究専攻

博士論文テーマ：日本語の擬声語・擬態語における形態と意味の相関についての研究



私が日本に関心を抱き始めたのは、子供時代にある歌舞伎役者を描いた絵を見たことがきっかけでした。その後日本に関する書籍を読むようになり、日本の文化や習慣にますます強く引かれていきました。今考えますとこうして形成された日本への親近感が後の私の日本語学習を促すことになったと思います。

その後、私はほとんどの授業を英語で行う高等学校に進学して高度な英語力を習得した後、ソフィア大学の日本語学科に入学し、本格的に日本語の学習を始めました。その後、大学3年次に千葉大学に1年間留学する機会を得ました。

千葉大学での1年間の留学では「本当の日本」を体感することができ、私の日本語学習にとって大きな収穫となりました。同時に日本に対する関心が更に増大したのですが、特にソフィア大学の日本語教育ではほとんど教えられていなかった日本語の擬声語・擬態語が日常的に多用され、日常会話において重要な位置を占めていることに注目するようになりました。この結果、帰国後に卒業論文の研究テーマとして日本語の擬声語・擬態語を選択しました。しかしブルガリアの日本語教育ではこのテーマが重視されていなかったこともあり、将来再度日本に留学し、日本語の擬声語・擬態語をより深く研究したいと考えるようになりました。

大学卒業後、私は在ブルガリア日本大使館に勤務し、ブルガリアにおいて日本を紹介する文化担当の秘書として主に日本語とブルガリア語の翻訳・通訳の仕事を行いました。このように日本とブルガリアの「窓口」として両国の交流に携わっていましたが、同時に、日本で日本のことを更に勉強したいとも考えていました。

このような時に再び千葉大学に留学する機会を得ました。千葉大学の修士と博士課程では日本語の擬声語・擬態語の研究を行っています。そしてこのテーマで博士論文を作成することを目指しています。

擬声語・擬態語の研究には膨大な量の用例の分析が必要のため、多くの時間が必要です。またこのテーマがもつ重要性を考えますと、ライフワークとしてこの研究を継続していきたいと考えています。

将来的には、ブルガリアあるいは日本において私の研究成果を日本語教育で実践し、日本語教育の進展に貢献できればと考えています。希望としましては、ブルガリアか日本の大学に就職し、日本語教育を行えればと思います。

留学への導き

ソ キョンスク
徐 景淑

出身国：韓国

在学大学：慶応義塾大学大学院文学研究科・美学美術史学専攻

博士論文テーマ：文禄・慶長の役以後の日朝関係と陶磁器：両国における高麗茶碗の意味



1992年の夏、韓国の大学先生の推薦で、鹿児島県にある薩摩焼の陶工である14代沈寿官氏のところで陶磁器の研修をしたことがある。大学で陶芸の実技をやっていた私は作陶ばかりやっていたので、陶磁史に対する知識は非常に欠けていた。特に、当時は韓国で日本の陶磁器に接する機会がなかったため、来日して経験した日本の文化は新鮮であった。

薩摩焼は16世紀末、秀吉の朝鮮出兵の際連れてこられた朝鮮の陶工によって築かれた窯のもので、お店の二階には、代々作られら薩摩焼が展示されていた。初期の薩摩焼は黒釉・白釉のものであったものが、次第に金襴手のような華麗なものに変化した様子を見て、その変化の原因について究明したいという気持ちが起こり、それが陶磁史の勉強へ繋がったのである。また、茶の湯という日本特有の文化を経験する機会があり、これが日本の文化を支えてきた大事な遺産であると感じた。そのことから、日本にある朝鮮の痕跡とも云える朝鮮産の陶磁器や朝鮮陶磁の影響を受けた日本陶磁に興味を持ち始めた。特に目を引いたのが茶の湯の道具である高麗茶碗であった。帰国してからも自分なりに陶磁史の勉強を続けていたが、高麗茶碗は朝鮮の地方産の陶器ではあるとはいえ、その遺物はすべて日本に伝来していた。日本で育てられた高麗茶碗を研究するためには、直接日本の文化に触れ合いながら、当時の高麗茶碗を理解しなければならぬと思い、日本への留学を決心した。

日本に来るまでは日本の陶磁器に対する情報がほとんど得られなかったが、最近になって高麗茶碗などと共に日本の陶磁器も紹介され、日本美術に対する関心も高まりつつある。また、韓国の研究者は、青磁や白磁といった優れた作品以外には興味を示していなかったが、近年になって研究者の間でも高麗茶碗への関心を示すように

なった。ただ、いまだ韓国では日本の陶磁器関連の専門家がいないので、展覧会を企画してもその準備に苦労したとの話はよく耳にする。このような現状から、私の日本留学は正しかったと思っている。

今後、大学で教育に携わりながら研究を続けたいと思っているが、一方では博物館や美術館で働いて、陶磁器をはじめ日本の文化をより多く紹介する場を設けたいという希望ももっている。どの道へ進むにせよ、日本陶磁の専門家として活躍するつもりである。

私の研究によって、日本と韓国は、ある時はよいライバルとして、ある時は架け替えのない協力者として、古代から一時も絶えることなく協力し合いながら文化を創りあげていたことが解明するよう努力していきたい。

だから私は日本と教育学を選んだ

シム チュン キャット
SIM Choon Kiat

出身国：シンガポール

在籍大学：東京大学大学院教育学研究科・比較教育社会学

博士論文テーマ：日本とシンガポールの高校教育に関する比較社会学的研究：

国際化への対応に着目して



「好奇心の塊」とよく言われる私は、昔から人や物などに興味を持つ性分である。特に、他の人が知らない・やらないことほど知りたくなりがちである。中学校のときに日本を留学先として決めたのもそういう性格から来たものだろう。その頃、私の周りにはアメリカやイギリスなど英語圏の国への留学を目指す人が多かった。しかし多くの人が目指す所は、却って私には魅力が感じられなかった。一方、第二次世界大戦で国がほぼ崩壊されたにも関わらず、その後凄まじい発展を遂げ、先進国入りまで果たした日本は、私の好奇心をかき立てた。さらに日本における伝統と最先端技術の共存、文化の奥深さと自然の豊かさなどが中学生だった私の関心を日本に向かわせ、ついに日本への留学を決心させたのであった。

19歳からの五年間、日本で素晴らしい留学経験をした私は、帰国後シンガポールの教育省で仕事をする傍ら、シンガポールのラジオ局で日本の良い歌や習慣、言葉の面白さなどを視聴者に紹介する番組も幾つか担当していた。さらに、中学校のときからずっと演劇をやってきた私は、日本の漫才を取り入れた脚本を書いたり、日本人の役まで演じたりもした。このように、最初の留学を終えた私は帰国後でも日本とは切っても切れない関係にあったわけである。仕事のほうでも日本との繋がりが深く、シンガポールの役人たちが日本の学校や教育機関への視察をする計画をしたり、逆に日本の役人や大学の教授たちをシンガポールの学校へ案内したりしていた。そして、まさにこのような仕事をしていたお陰で、私は、当時東京大学教授の藤田英典先生を存じ上げることになり、二度目の日本留学を決心するに至ったのである。

二度目の留学で私が教育社会学を専門として選んだのは、もちろん教育に関する仕事をしてきた経験も理由の一つであるが、それよりも教育が21世紀において非常

に重要な分野の一つであるだけでなく、教育の根本が人々を幸せにする事業でもあると私は信じているからである。教える・教わることを通じて、人間は生きていく知識や術を得ると同時に、人と人との繋がりや生き方についても学ぶことがたくさんあると私は思っている。このことを信念に、そしてこれまでの経験を活かしつつ、博士号を取得した後でも私は大学や研究機関で教育に関する研究を続けながら、日本とシンガポールを中心にアジアの教育理念を国際的に発信していきたいと強く望む。

「共識」から「共感」へ

そん ぐんえつ
孫 軍悦

出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科・言語情報科学専攻

博士論文テーマ：中国における日本近現代文学作品の翻訳に関する研究



1987年9月に、上海外国語大学附属中学校に入学した私は、英語クラスを志望しましたが、英語の成績が悪かったからか、日本語クラスに振り分けられました。それが私の人生の大きな転機となりました。以来18年間、私は日本語を学び、日本語で生活し、日本語で物事を考えてきました。一つの物事を異なる言語で考えると、異なる結論に導くことができます。日本語は私の視野を広げ、もう一つの扉を開いてくれました。

1996年、大学を卒業すると同時に、某日本銀行の上海支店に就職した私は、日本人責任者と中国人社員との関係を目の当たりにし、「国境」は地図にあるのではなく、人間の心の中に引かれていると痛感しました。日本に留学することを決めたのは、日本語の能力をさらに高めるためだけでなく、噂やイメージで固めた「日本像」に囚われずに、自分の眼で確かめ、自分の身体で「日本」を感じたかったからです。奈良教育大学で聴講した幅広い講義や、図書館で過ごした自由自在な読書生活、世界各国から来た留学生たちとの暖かい交流は、国家によってインプットされた空疎なイメージより、身体で覚えた実感の重要性を私に認識させてくれました。

1997年10月から1998年9月まで上海外国語大学で過ごした一年間の教師生活を通して、私は、日本企業のために即戦力としての日本語人材を育成することのみを目指す大学の日本語教育に疑問を抱きました。単語と文法だけを暗記する学生たちの物足りなさそうな顔を見て、自らの日本に関する知識と想像力の貧弱さを改めて痛感し、仕事を辞めてもう一度日本に留学することを決意しました。

しかし、日本留学が私にもたらしたものは、私の期待よりはるかに膨大で、はるかに複雑でした。それは、日

本に関する、日本人並みの知識や言語能力といったものではなく、日本と中国の間に立つ人間として、如何に固定観念にもイデオロギーにも縛られずに日本と中国の双方を認識し、思考するかという問題でした。真の国際理解は、母国に関する知識を他者に伝えることではなく、日々変化する自己と他者を考え続ける習慣であり、多様な人間が平等に共存する智慧を生み出す共同作業ではないかと、思うようになりました。このことを、中国をもっと知りたい、或いは日本をもっと知りたいと思っている人々に伝え、独立した人格、独立した思考能力、独立した判断を持ち、二つの言語だけでなく、二つの思考様式が身につく学生を育てることが、私の目標です。従って、博士号を取得した後、教育機関で日本語、日本文学の教育に従事しながら、国際交流活動も積極的に続けていこうと考えております。これは、国境線の上に生きる人間の責務であろうと思います。

日本へ留学した理由

ウィーラシンハ ナリン
Weerasinghe Nalin

出身国：スリランカ

在籍大学：電気通信大学電気通信学研究科・電子工学専攻

博士論文テーマ：ユーザ間干渉がない新しい CDMA 方式及びその応用についての研究



私はスリランカから来た、ウィーラシンハ・ナリンと申します。私は1996年4月2日に日本国文部省の国費留学生として来日しました。それから、東京にある「国際学友会日本語学校」で1年間日本語を学び、釧路高等専門学校の電子工学科の3年生に編入しました。それから3年後に高専を卒業し、2000年4月に現在の電気通信大学の電気通信学部・電子工学科の2年生に編入し、その卒業後の2002年4月に同大学の大学院の電気通信学研究科・電子工学専攻の修士課程に入学しました。そして、2004年3月に修士課程を終了し、4月から同大学の博士後期課程に入学し、現在は2年生に在籍しています。

日本へ留学した理由

私が日本への留学を決めた理由はいくつもあります。そのもっとも重要な理由は、博士号を取得するまで安心して続けて勉強できることです。私は子供のときから先生になることが夢でした。そして、高校卒業して念願の大学への入学を決めたのですが、当時はスリランカの大学に入学するまで2年間近く待つことがあり、その間に日本国文部省の奨学金募集の広告を目にして応募し、合格しました。最初はまったくゼロから日本語で学ぶことにとても不安がありました。しかし、私の夢を達成することを考えれば、学生運動がある度に閉鎖されるスリランカの大学で勉強することの方がより不安でした。それに、私は子供のころ父親を亡くしており、母子家庭に育ちました。日本に留学すれば母親に負担を掛けることもなく好きな勉強ができると考え、日本に留学することを考えました。また、留学する前の年の1995年に、広島に原爆が投下されてから50周年記念の番組をテレビでみて、終戦から50年あまりで日本が成長したことをみて、感動を覚えました。そして、子供のときから空手をやっていたことや大学入学を待っている間に興味を

もって独学していた世界の演劇の中でも日本の能と歌舞伎について大変興味をもったことなどが私の日本への留学する決心を後押ししました。

博士号取得後の計画

現在は博士号を取得してからポスドク研究へ進み、さらに好きな研究分野についての知識を深めることを考えています。日本へ留学したことによって、日本および外国からの様々な人々と出会い、そして、大変貴重な経験をえました。スリランカは内戦もあり、いまだ発展途上国であります。また、今スリランカは技術的な知識を教えられる人材を必要としています。日本での勉強と研究が終わり次第、スリランカの大学へ先生として戻り、日本で学んだ全てのことをばねに、私に教育の場を与えてくれた日本および母国の発展のために活躍することを胸にこれからも頑張ります。どうぞよろしくお願いします。

「とも」

ウ ソンファン
禹 成勳

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院工学系研究科・建築学専攻

博士論文テーマ：韓国の中世首都論－高麗の首都、開京を中心とした都市史的研究－



私が生まれ育った韓国の小さな農村は、どこを見回しても村を取り囲んだ山しか見えなかった。高校進学のために行った大都市は、冷たい灰色のビルばかりであった。山は私に他の世界を見せてくれず、ビルの林は自然と私とを隔てる境界となっていた。

しかしこれらは大学生の時の経験と比べれば極めて小さな問題であった。他人と違う考え方が何より強い境界となって、それが罪になったり、そこから暴力が誘発されたりするという事実は私にとって大きな衝撃であった。

修士論文には、当時勤めていた、韓国の国立文化財研究所に所蔵された日本の古代宮都の発掘報告書は大きく役に立ったが、十分ではなかった。日本と中国の建築や都市に対する理解なしに韓国のそれも深く理解できない。そのため留学したかったが、お金の問題は私が乗り越えられない大きな境界であった。

その後博士課程に進学して大学で講義をしながら各種研究と調査に参加した。しかし、私が研究しようとする開城は、北朝鮮に位置している。そこに私は行けない。行ってはいけない。私を取り囲んでいた境界は少しずつ崩れていっているのに、私が今ぶつかっているこの境界はいつ崩れるのだろうか。これは誰が、どうして作ったものだろうか。

1997年、私は結婚し、建築史の知識を広めるために奈良、京都を新婚旅行先として選んだ。以後、再び講義と研究、調査を続けていくにつれ、韓国の建築や都市を日本や中国を視野に入れながら研究したいという気持ちはますます強まった。そうする間、2001年に日本の文部省奨学生として選ばれ、ずっと渴求していた留学と

いう大きな希望が叶えられた。

妻と全く日本語が喋れなかった二人の子供は、私より2ヶ月遅い2001年12月、日本へ来た。いつの間にか、息子は小学校1年生になり、このごろは友達を家に連れて来たり友達の家に遊びに行ったりしている。この子供達は、お互いに自分たちの環境の違いについては分かっている。しかし「違う」と言っても「差別」するとか「境界」づけることはしない。この子供達はお互いに日本人の「友」、韓国人の「友」ではなく、「とも」に遊んで、「とも」に笑う、国境という物理的境界も、他国人と思う心の境界も持たず、そのまま「とも」にある。

私も私と会う人々と「とも」にいきたい。このために私は、昔の都市を日本、中国、北朝鮮はもちろん世界の研究者と「とも」に研究し、「違う」人々が「とも」に生きて行った姿を見つけたい。それでそれを学生たちに教え、私がかう人々と「とも」にしたい。そうして私たちを取り囲んだ境界を少しずつ崩していけたらと思う。

2005年度

海外学会派遣プログラム参加報告

朴 貞姫 「日本語文法学会参加報告」 ----- 41

アンボン ベリル ニャメチェ 「ガーナ、クマシ市における医療調査」 ----- 43

日本語文法学会参加報告

バク チョンヒ
朴 貞姫

博士（応用言語学）明海大学
北京語言大学外国語学院日本語学科長、助教授（在北京）
2003年度奨学生

2005年11月22日から28日の間、日本語文法学会第6回大会、第5回明海日本語教育国際フォーラムなどに参加するために、帰国後初の日本渡航を果たしました。当時の私は日本に未練を残したまま帰国し、9月に現職の北京語言大学に赴任したばかりで、まだ現地の生活などに慣れておらず、まるで身体だけを中国に持ち帰り、心はまだ日本に残してきたような状態でした。そのような状態での日本再渡航は、私にとってとても有意義で、価値のある救いの渡航だったと思われま



2000年12月に発足した日本語文法学会は、日本語の文法研究を核に据えた学会です。日本語を核に据えながら、他の言語の研究者との対話を計り、文法を中心にしながら、他領域の研究者とも協同して日本語文法研究の進展を目指す集まりです。つまり、各個別言語学や他領域で開発・提唱された理論や成果に目配りしながら、互いに学び合うことを提唱し、日本語の文法研究を主要な研究テーマとする研究者と、他の領域にありながら日本語文法に興味を持つ研究者との橋渡しを計ることを学会の趣旨としています。

私は2001年に当日本語文法学会の会員になって以来、在日中はほぼ毎年大会に参加し、研究発表したりしました。研究分野は日朝中3言語の対照で、主として文構造の認知意味論的対照です。

日本語文法学会第6回大会は、2005年11月26日～27日に明海大学で行われました。26日には「これから

のアスペクト研究」というテーマでシンポジウムが開催され、工藤真由美教授、金水敏教授、三原健一教授、木村秀樹教授が、それぞれ「日本語の方言におけるアスペクト体系」、「日本語アスペクトの歴史」、「シタククスにおけるアスペクト」、「中国語のアスペクト」をテーマに講演をなさいました。27日には会場をテーマ別にA、B、Cの3つに分け、研究発表が行われました。私は自分の専門分野と関係のある日本語文法統語論研究中心のC会場と対照言語研究中心のB会場を行き来しながら聴講し、研究の視野を広げました。本学会の研究発表には、発話主体の視点による表現研究が多かったのが特徴です。つまり、客観主義言語学から主観主義言語学への動きが明らかに見え、言語の主観性研究が台頭しはじめ、主客観の統合的研究はこれからの文法研究の主流であることが示唆されました。例えば、主題（トピック）と主題化表現における話者主体の主観性（「は／って」）、モダリティ表現における話者主体の主観性（「らしい／ようだ」）、タイ語と日本語の主題文の対照、目的格と目的語化表現における話者主体の主観性（「非対称のヲ格」）、話者主体の主観性による連結メトニミーと認知メカニズム（車→自動車、花見→桜見、赤いシャツが来る→赤いシャツという綽名の人が来る）などは、いずれも「人間中心」の認知言語学のアプローチでした。7年前、私が修士、博士論文のテーマを認知言語学のアプローチに決めた当時まで認知一機能主義言語学は、まだ日本の言語学界において広範囲に受け入れられておらず、「厳密性が足りない理論」、「都合のいい理論」などと非難されている段階でした。それが、今回の学会発表では少なくとも言語の主観性研究が主流になっていることが分かって、自分の仲間が増えていることの喜びを感じました。学会に参加して新しい刺激を受け、視野を広げることができ、ま

た自分の仲間を見つけることができ、それこそ正に1石3鳥でした。

ただ、残念だったのは、学会参加者が例年より少なく、大きな会場が満員にならず、ちょっとしょんぼりした感じでした。たぶん26日に同時に、同じ場所で、同質の会議を開催したのが参加者数の少ない原因の一つでしょうが(11月26日に第5回明海日本語教育国際フォーラムが同時に、明海大学で行われ、私は惑いを感じました。それで、26日は日本語教育国際フォーラムに、27日は日本語文法大会にと二股かけました)、きっと他の要因もあるのではないかと思います。細分化しすぎていく日本のさまざまな学会、溢れるほど多い同質学会のやたらな増加などは、お互いに影響を与えたいと思います。学会のランクをあげ、研究の質を高めるためには、ある程度まとまった研究分野、研究規模および研究者などが必要でしょう。学会の研究発表は院生だけの役目ではなく、研究者を含め会員全員の聖なる活動であり、したがって、もっと多くの研究者の方々のご参加、ご議論、ご指摘が必要ではないかと思います。

11月23日、東京国際フォーラムC棟602号室で開かれた「第21回SGRAフォーラム—日本人は外国人をどう受け入れるべきか」にも参加させていただきました。フォーラムで懐かしい渥美財団の方々やSGRAの方々と再会することができて、心を癒され、その暖かさに胸がジーンとしました。まさに実家に帰った気分でした。

学会参加と日本訪問を無事に終え、私は28日の早朝便で帰国しました。今回の学会参加を通じて得られたものは実に多いです。お蔭様で、帰国後私は元の自分を取り戻し、すぐ仕事に立ち向かって自分のありったけの能力を発揮し、今は日本語学科長の職に就き、充実した毎日を送っております。

学会参加のご支援、ほんとうにありがとうございました。心より感謝いたします。

(2006.5.20 記)

ガーナ、クマシ市における医療調査

アンボン ベリル ニャメチェ
Ampong, Beryl Nyamekye

博士（薬理学）東京医科大学
国立精神・神経センター研究員
2004年度奨学生

アムステルダムから乗ったKLM航空機が私の生まれ故郷ガーナの首都アクラにようやく着陸したのは、冷え冷えする12月の晩だった。へとへとに疲れる旅だった。前日、東京からアムステルダムへ向かった後、あんな乱気流にあうとは思っても寄らず、何時間も眠れずに体中に張りが残った。

荷物受取りの列に並んでいる間、私はあたりを見回して、何か変わってるところがあるだろうかと探してみた。感心した。確かに経済不況ではあるが、政府は、国の一部を再建するとの約束を実行していた。— 少なくとも外国からの訪問者の目につく部分では。

外へ出ると、家族や友人が私を待ちかねていた。興奮ではずむ会話、抱きあったりキスの渦の中で、結婚したり離婚したりした知人たち、赤ちゃんが生まれた人、悲しいことに亡くなってしまった人、等々の情報を得た。

翌数日間は、帰郷した興奮が冷めやらず、今回の帰郷は何のためだったかを思い出すのに努力を要した。私の研究は、「デュシェンヌ型筋萎縮症」のガーナの特定の地域での発症頻度と特徴を明らかにするため行われた調査であった。デュシェンヌ型筋萎縮症は、進行性の筋肉弱화를特徴とする遺伝性の筋肉疾患として広く知られている。遺伝子の突然変異によって起こり、骨格筋の中のジストロフィンというたんぱく質の欠如を引き起こし、主に男の子が罹ることで知られている。世界の多くの場所で科学者たちがこの疾患のメカニズムを解明するための研究に焦点をあてている。

私の研究に関係する医者に会うことは簡単だった。実際、彼らのほうがずっと意欲的に私と会いたがっていた。無理も無いことだが、それぞれの出会いの初めの数時間は、日本の生活に関する尽きない質問に答えることに費やされた。大変だったのは、この研究のための患者を募ることだった。それぞれ異なる市にある4つの病院がこの研究のために使われた。

それぞれの調査の初日、研究に必要な手順を検討する

ため、医師と会った。次に医学検査のための患者の選考を行った。この研究に適格な患者は、年齢が4～10歳で、進行性の歩行困難を訴えている、などの基準を満たさなければならなかった。いろいろなデータも集められた：症状が起こり始めた年齢、同様の問題を持つ少なくともひとりの家族の存在、息切れなど他の症状の有無、など。

2日目には、他のデータと、筋肉の中の特異なたんぱく質の有無を明らかにするため、広範囲にわたる実験が行われた。3日目には、陽性の診断結果をもつ患者が遺伝カウンセリングのため呼びだされた。

その後、古い友人やクラスメートたちを訪れ、簡単な言葉を日本語でなんとと言うかを教えたりした。

日本に戻る時はそんなに悲しくは無かった。それは、日本の生活に戻らなければならないという事は別として、故郷に帰る楽しみを感じる機会をいつももてるからであり、また次の帰省を心待ちにしている。

AISF ネットワーク

■ラクーン会レポート

■第5回日韓アジア未来フォーラム

「東アジアにおける韓流と日流：

地域協力におけるソフトパワーになりうるか」

■関口グローバル研究会（SGRA）

ラクーン会レポート

常務理事 今西淳子（編）



■ ラクーン会 in ボストン

アメリカのメモリアル・デーの週末の始まる5月27日（金）、生憎今にも雨が降りそうで寒いボストンのHarbor Hotelのレストランで、2年ぶりのラクーン会 in ボストンが開催されました。参加者は、3日前に2番目のお子さんが生まれたばかりの王岳鵬さん（1997 Raccoon: New England Medical Center, Tufts University）とご長男、ニューヘブンから駆けつけてくださった張紹敏さん（1997 Raccoon: Yale University Medical School）、孫艶萍さん（1998 Raccoon: Harvard University Medical School）とお友達のMitchell Albertさん、梁興国さん（2001 Raccoon: Boston University）と奥様とお嬢さん、渥美伊都子理事長、今西淳子、今西明日香の11名でした。参加者は皆、ホテルの船着場を見下ろすレストランで、お洒落なシーフードを楽しみました。



今回の訪米の目的は、今西の長女真帆のブラウン大学卒業式へ参加するためでしたが、入学の時からお世話になっている孫艶萍さんや張紹敏さんと「光陰矢のごとし」と話し合いました。真帆が留学していた4年間、地理的に一番近いYale大学の張さんには、すっかりお世話になり、また、今回もボストン、プロビデンス、ニューポートをドライブしていただき、ありがとうございました。

ラクーン会に先立つ5月25日（水）には、今西が「友の会」の役員を務める松風荘という日本家屋を見に、フィラデルフィアに行きました。この日は、ペンシルベニア州にお住まいの喬辛さん（1996 Raccoon: ATMI 勤務）に1日中ドライブしていただきました。短い間でしたが、最近お買いになったお家にも寄ることができました。最近のアメリカはちょっとおかししい、ラクーンの皆さんのお話を伺っても、競争の激しいアメリカの研究生活はそんなに楽ではないと思いましたが、張さんも一軒屋に引っ越されたとのことですし、アメリカン・ドリームは健在だなあと思いました。



最後の訪問地はバッファローで、任永さん（2002 Raccoon; New York State University Medical School）に久しぶりにお会いし、奥様とお嬢さんと一緒にアメリカの地方都市での静かな生活ぶりを拝見しました。

みなさん、アメリカ旅行中どこでも、いつものように歓迎してくださり、ありがとうございました。

■ たなばたラクーン会 in 関口

2005年7月1日（金）、東京は文京区関口の渥美財団ホールで、昨年に引き続き、たなばたラクーン会が開催されました。会場には、大きな笹（竹）が飾られ、参加者は、短冊に願いを書いて縛りつけました。



皆さんの積極的なご協力のおかげで、テーブルは、食べきれないほどのご馳走で一杯でした。まずは、昨年「集い」ごとに活躍してくださった「ロシアチーム」（リシャットさん、叶盛さん）が、本場のストロガノフにマッシュポテトを添えて振舞ってくださいました。「餃子班」（韓珺巧さん、江蘇蘇さん、王雪萍さん、趙長祥さん）は、水餃子と原産地不詳のシュウマイをたくさん作ってくださいました。「ベトナムチーム」（ヴォー・チー・コンさん、王健歡さん）は、生春巻きを作ってくださいました。包聯群さんは、モンゴルのお菓子を作ってきてくださいましたが、餃子班のお手伝いもしてくださいました。ブレンダ・テネグラさんは、フィリピンのお菓子をたくさん差し入れてくださいました。昨年度奨学生の梁明玉さんと今年度の金範洙さんの「韓国チーム」は、キムチチヂミを作ってくださいました。

当日は、いつもよりラクーン先輩方の出席が少なく、ちょっと残念でした。こんなにたくさんご馳走があったのに！

■ ラクーン会 in 京都

2005年7月3日（日）、京都出張中の渥美伊都子理事長と今西常務理事は、ホテルグランヴィアの日本料理屋「浮橋」で、兵庫県立大学の金外淑さん（1997ラクーン）、理化学研究所発生・再生科学総合研究センターの武玉萍さん（2000ラクーン）、松下電器先端技術研究所のブラホ・コストブさん（2001年ラクーン）と一緒に、ラクーン会 in 京都を開催しました。会話の主役はブラホさんで、日本とマケドニア（ブラホさん

の故郷）とイタリア（奥さんの故郷）とドイツ（奥さんとお子さんの現在の居住地）を飛び回る生活ぶりを聞いて、参加者から「私もがんばっていると思っていたけど、みんなそれぞれ大変なんだ」という感想がとびだしました。今回のラクーン会は、急に決まったため、関西にいらっしゃるラクーンの方全員に声をかけることができませんでした。ごめんなさ〜い。



2005年7月4日（月）、大雨の中、ギュレチ・セリム・ユジェルさん（1996年ラクーン）が代表を務める、京都川原町のイスラーム文化センターを訪ねました。イスラームのイメージを回復するまでは、日本でまだまだすることがたくさんあるそうで、名古屋の万博はじめ、さまざまな機会にイスラームの紹介をしているそうです。また、現在は、京都大学で、イスラーム原理主義の研究をしているとのこと。短い時間でしたが、久しぶりにご家族にもお会いできました。



■ Raccoon Visit in Bangkok

8月7日(日)、子供のキャンプの国際総会でバンコクのホテルに缶詰になっていた今西は、カセサート大学のプラチャーさん(1999年ラクーン)にお願いして、ホテルの外のタイ料理レストランへ連れ出していただきました。ランチの間のトピックは、前回(2005年3月)の続きで、日本とタイを比較した言語と文化発展の関係について。バンコク食事を重ねていくうちに、文化人類学の名著ができるかも。

■ Raccoon Visit in Yangon

8月10日(水)、バンコクの会議の後、キン・マウン・トウエさん(1996年ラクーン)を訪ねてヤンゴンに行きました。早稲田から応用物理学博士を取得したキンさんですが、「清水の舞台から飛び降りる」覚悟で帰国した後、筆舌に尽くしがたい(?)ご苦勞をされ、現在のお仕事に達したご様子を伺いました。「がんばったよね」よりも「よく生き残ったよね」というのが私の感想です。今のお仕事が、今後、順調に発展しますように! 欧米諸国から厳しい経済制裁を受けているはずのミャンマーですが、ヤンゴン市内には工事も多く、なぜか活気がありました。これは、「ミャンマーの北の地方は、そのうち中国のひとつの省になってしまうかもしれない」というほどの、中国からの人と物と金の移動のおかげのようです。キンさんからの「アメリカや日本に行った留学生たちは、ミャンマーに帰ってきてほしい。そうでないと、ミャンマーはよくなる」というメッセージをお伝えします。



■ 韓国ラクーン会 in ソウル

2005年8月27日(土)午後7時から、第4回韓国ラクーン会(Korea Society of Raccoon: KSR)がソウル市のファイナンスセンタービルの地下にある韓定食レストラン「龍水山」で開催されました。韓国ラクーン会は、自主運営組織で、会長の李來賛さんが中心となって、年2回(2月末と8月末)親睦のための会合を行っています。今回も、急な案内にもかかわらず、忙しいスケジュールの中、KTXでかけつけてくださった2名を含め、8名のラクーンが集まりました。今回より、金賢旭さんに幹事をお願いすることになりました。

参加者：李來賛(96)、鄭成春(00)、鄭在皓(00)、朴榮濬(02)、白寅秀(02)、金賢旭(03)、蔡相憲(03)、李濟宇(04)、今西淳子、ゲスト1名

■ ラクーン会 in 上海



2005年9月10日(土)午後6時半より、上海の観光名所豫園内のレストランで、上海で初めてのラクーン会が開催されました。これは、渥美理事長の初めての中国訪問(西安2泊、上海2泊)にあわせたもので、上海財経大学の範建亭さん(01)夫妻、北九州市立大学から出張中の高偉俊さん(95)、渥美伊都子理事長、鹿島上海工程有限公司の林隆董事長、今西淳子、今西勇人が出席しました。高玲娜さん(95)が東京出張中でお会いできなかったのは残念でした。理事長は、西安では兵馬俑をはじめとする古代遺跡を、上海では内山書店跡や魯迅旧宅などの史跡と近代的な超高層ビルを視察しました。街全体(国全体)に満ち溢れる活気に「圧倒されてしまいそう」との感想でした。



■ ラクーン in 北京

2005年9月15日(木)午後6時半より、北京大学の近くにある北京杭州新開元酒店というレストランで、北京では2回目のラクーン会が開催されました。今回のラクーン会には、日本国立琉球大学国際関係学系から出張中の林泉忠(00)、北京大学外国語学院の孫建



軍(02)、北京語言大学外国語学院の朴貞姫(03)が出席しました。久しぶりに会った3人はまるで兄弟みたいな親しさを感じました。3人は、暖かい雰囲気の中でいろいろな話に花を咲かせ、時間の経つのも忘れていました。10時半になって周りに誰もいないと気づいたときやっと別れを告げました。北京での渾身の仲間の集いは、予想を超えて収穫が多く、とても充実で楽しい一時でした。記念に撮った写真を添付します。来年のラクーン会は、理事長を始め今西さまのご一家もご一緒に賑やかなラクーン会にしたいです。(文責:朴貞姫)

■ 彩の森の植樹祭

10月22日(土)、山縣睦子評議員より、栃木県矢板市にある山縣農場で行われた彩の森の植樹祭にお招きを受け、Fマキトさん(1995)、金政武(2000)ご一家、江蘇蘇さん(2006)と今西が参加しました。生憎の雨でしたが、心づくしの田舎のお料理をいただき、植林させていただきました。30年後に戻ったとき、どんな木になっているか楽しみだと話しながら、山桜などの苗木を植えました。



■ ラクーン会 in 広州

11月5日、広州で開催されたEADN(東アジア開発ネットワーク)のセミナーに参加したフィリピン・アジア太平洋大学のF.マキトさん(1995ラクーン)は、広州中医薬科大学の奇錦峰さん(2001ラクーン)、中山大学に留学中のアンジェリーナ・チンさん(2004ラクーン)と一緒に、市内レストランでラクーン会を開催し、広州の住みやすさについて話し合いました。

■ ラクーン会 in 北京

11月12日(土)夜、王府井のフュージョン中華料理店で、ラクーン会を開催しました。北京大学の孫建軍さん(2002ラクーン)、北京語言大学の朴貞姫さん(2003ラクーン)とお嬢さんに加え、(株)インフォデリバ上海事務所代表の陸躍鋒さん(2003ラクーン)が上海から来てくださいました。参加者は、一緒に行った私の友人でビジネス日本語協会代表の池崎美代子さんと、池崎さんのプロジェクトで支援した学生さんの7人でした。

日中関係は政治的には凍りついているし、日本語学部や教師は優遇されているとは言えないようですが、幸いにも日本語学習への意欲は非常に強いようです。それは、やはりビジネスで日本語のできる人材が求めれ、就職に

有利になるからでしょう。それに、日本製のゲームやアニメに感化された層も確実にあるようです。陸さんによると日本語ができるIT技術者とか、日本語ができる中間管理職とかは、大変な人材不足だそうです。

近代的なビルと洒落たインテリアのレストランとヨーロッパブランドのお店は東京の原宿と変わらないですが、食後に繁華街を歩いた時、活気は凄くあるものの、数年前にはいなかった老人の物乞いが多く、しかもすぐくしつこいので閉口しました。ひとりに小銭をあげると、いっぱいやってくるそうです。あまりにしつこかったので、孫さんや陸さんがいなかったら、怖くて歩けなかったと思います。



北京では、朴さんと孫さんの大学の日本語のクラスにお邪魔して「交流」させていただきました。学習を始めて3年目というのに、皆さん流暢な日本語で、何故日本語を学ぶことにしたか、将来は何をしたいかなど語ってくださいました。来年は北京大学の日本語学科の60周年記念フォーラムを開催するそうで、SGRAも何か仕掛けることができないか検討中です。

また、1995ラクーンで(株)日本SGIの金熙さんのご家族に、久しぶりにお会いすることができました(金さんご自身は東京)。私の長女が4年前に北京に行った時にお世話になった御礼を申し上げるために連絡したのですが、結果的には、さらにまたいっぱいお世話になることになりました。

北京の皆さんどうもありがとうございました！

■ ラクーン会 in 広州

緑のまぶしいびかびかの広州空港に着いたら、広州中医薬科大学の奇錦峰さん(2001ラクーン)がびかびかのトヨタの新車で迎えに来てくださいました。奇さんは最近新築のマンションもお買いになったとのこと。チャ

イニーズ・ドリームが実現しつつあるようです。今回、奇さんと中山大学に留学中のアンジェリーナ・チンさん(2004ラクーン)と3名一緒に会えたのは11月17日(木)の夕食後の珠江クルーズでしたから、それがラクーン会 in 広州になりました。

私のもうひとつのボランティア活動の組織が、来年夏に広州で13歳の子供のための国際キャンプを開催します。そのため、今回はキャンプサイトとホームスタッフを決めるための訪問でした。来年の夏まで、準備のために何回か行くことになりそうです。

広州の皆さん、また美味しい広東料理を食べにいきましょう！

■ Raccoon visit from Gerogia

11月20日、アメリカジョージア州に在住するニザミディンさん(1997ラクーン)が訪ねてくださり、渥美理事長と今西は、久しぶりにお会いしました。中国新疆ウイグル自治区出身のニザミディンさんが、アメリカに亡命することになった経緯をお聞きました。

■ ラクーン会 in 台北

前回台北でラクーン会を開催したのは、2004年3月末、ちょうど大統領選挙の直後で、国民党が数え直しを要求するかどうかと騒いでいた時でした。偶然にも、今回のラクーン会は、台北市長選挙の直後。今回は国民党の圧勝となったのが1年半の間の台湾の一番大きな変化かもしれません。



12月5日(月)の夕方、広東料理の老舗「大三元」で、ラクーン会を開催しました。参加者は、国立中央大学企業管理系副教授の洪徳俊さん(1995ラクーン)、同資訊

工学系助理教授の楊接期さん（1999 ラクーン）、幹事をお願いした台湾科技大学電子工程科助理教授の葉文昌さん（1999 ラクーン）、そして、10月21日に産まれたばかりの蔡英欣さん（2004 ラクーン）。蔡さんは、ちゃんと出産前に東大法学部に博士論文を提出し、現在審査中です。楊さんの奥様とお嬢さん、蔡さんのご主人も参加してくださいました。

話題は、「なぜ台北の人たちはミスタードーナツに並ぶのか」、「台湾は大陸からの留学生を受け入れるべきか」、「中央大学の管理者向けMBAコースは素晴らしい」、等等でした。

今回の台北訪問のハイライトは蟹とお茶。葉さんにご案内いただいた海鮮レストランでは、台湾名物のマングローブ蟹、台湾でも珍しいシマイシ蟹、埔里の紹興酒を堪能しました。そして、蔡さんにご案内いただいた茶藝館では、東方美人茶と金萱茶を楽しみ、その後は足つぼマッサージ。というわけで、今回は実に贅沢な時間を満喫しました。台湾の皆さん、またお邪魔しますね！

■ ラクーン忘年会 in 新宿

12月18日、日曜日の夕方、賑やかな新宿のアジアンキッチンで、忘年会を開催しました。ウクライナから出張中のオリガさん（2004）、リンさん（2001）、全振煥さん（2001）、林少陽さん（2003）、ナポレオンさん（2004）、韓京子さん（2005）、趙長祥さん（2005）、嶋津事務局長、今西が参加しました。

■ ミニ・ラクーン会 in 沖縄



今西さんおよび皆さんへ

去る1月26日に、韓国国民大学の南基正さん（1996 ラクーン）がソウル大学の沖縄米軍基地問題研究会の一員として沖縄・琉球大学を訪問されたため、南さんと私が、沖縄で初めてのラクーン会の開催を実現しました。

南さんは日本のラーメンが恋しいということだったので、琉球大学の近くにある有名なラーメン屋「通堂」で一緒に食べながら、南さん帰国後の仕事や生活、そして沖縄の基地問題などについて会話を楽しみました。

これからも、第2回、第3回のラクーン会 in 沖縄を楽しみにしています。

林泉忠（2000 ラクーン）、琉球大学より

■ Raccoon Vist in 金沢

2月19日、北陸を旅行していた今西は、金沢大学医学部付属病院で研修医をしている周海燕さん（1999 ラクーン）に、久しぶりにお会いしました。周さんは、医科歯科大学から博士号を取得した後、東海大学の医学部に学士入学して勉強し直して日本の医師国家試験に合格した努力家です。西洋医学では直せない患者に漢方医学を使いたいという周さんの希望は、着々と実現に近づいています。

■ ラクーン会 in ニューヨーク



2006年3月5日（日）午後6時より、ニューヨークのマンハッタンの55丁目にある「鳥人（とっと）」という焼き鳥レストランで、ニューヨーク・ラクーン会が開催されました。日本からの二匹の狸が少し遅れてレストランにたどり着いたとき、アメリカ滞在中の狸たちは、すでにファーストラウンドの焼き鳥を召し上がっているところでした。

今回のラクーン会には、狸が8匹出席しました。ニューヨークでインターンをしている今西真帆さん、エール大学から1時間以上もドライブして駆けつけた張紹敏さん（97 狸）とお嬢さんのロジーちゃん、コロンビア大学で研究、若しくは勉強している許暁原さん（98 狸）、ご主人の程融さんとお嬢さん嵐さん、沖縄からニューヨーク

経由でボストンに出張する林泉忠さん（00狸）、そして共同研究のため東京からきてニューヨークに2週間滞在する王健歆ケビン（05狸）でした。

狸たちは、「鳥人」によってニューヨークに持ち込まれた日本の焼き鳥を懐かしく食べながら、アメリカ滞在の経験を分かち合い、真帆さんの数年前の中国への旅や前日渥美財団で行った研究発表会など、楽しい話題が続きました。お茶付け、杏仁豆腐、そして何枚のスマイル写真で、ニューヨーク・ラクーン会は終わりました。

（文責 王健歆）

■ ミニ・ラクーン会 in バンコク



■ ラクーン会 in 名古屋

2006年3月19日（日）午後5時30分より、名古屋駅近くの、名鉄グランドホテル内〈北京宮廷料理 名鉄涵梅舫〉にて、ラクーン会が開催されました。参加者は、名古屋大学の胡潔さん（98狸）と梁興国さん（01狸）一家（奥さんとお嬢さん）、名古屋市立大学のランジャンナさん（02狸）そして、日豊興業株式会社の胡炳群さん（02狸）夫妻、東京から出張中の今西淳子の8名でした。

久しぶりにお会いした胡炳群さんからは広州に建設中のトヨタの部品工場の話、3年ぶりにボストンから戻った梁さん夫妻は日本の住みやすさの話、東京に住む息子さんの大学受験が終わった胡潔さんとは子育ての難しさの話、そしてランジャンナさんとは5月14日（日）に東京で開催するSGRAフォーラム「日本人と宗教」の話をしました。その他にも、いろいろなことを話しましたが、とにかく中国とインドのパワーに圧倒されました。

<だんだん世界中が、インド人と中国人になってしまうんじゃない？>

今西常務理事および皆様へ

2006年3月30日～4月3日に、国際看護学会（The 9th East Asian Forum of Nursing Scholars）に参加するために、タイ（Thailand）に行ってきました。3月31日（金）午後6時より、BangkokのSilom Villageでバンコクのカセサート大学水産学部講師のムシカシントン・プラチャーさん（1999 ラクーン）と一緒に学会参加した私の同じ研究室の辻村真由子さんと3人でラクーン会を開催しました。タイ文化の一つタイダンスを観ながら楽しく食事をしましたが、異文化への適応についての重い話もしました。移民の異文化適応だけではなく、留学や帰国就職などの culture change についてもディスカッションしました。経験豊かなプラチャーさんの話は深かったです。私は留学生としての異文化への適応について同感でした。また、帰国後の適応についても考えさせられました。

プラチャーさんは今年も共同研究のために日本に来るそうです。またお会いできる日を楽しみにしております。

（文責：胡秀英 2006 ラクーン）



第5回日韓アジア未来フォーラム

「東アジアにおける韓流と日流： 地域協力におけるソフトパワーになりうるか」

ここ数年広がりを見せている東アジアにおける「韓流」はこれまでの東アジア国際関係に見られない画期的なできごとである。また、この地域において日本の大衆文化が若者の高い関心を集めたのは決して最近のことではない。このような韓流・日流を媒介とした密度の高い人的・文化的な交流の進展はもはや東アジア地域に共通する現象ともいえよう。今回のフォーラムでは政治的あるいは軍事的な「ハードパワー」においては様々な問題をかかえる東アジア地域にとって、急成長する「ソフトパワー」はどのような意味と意義があるのか考えてみたい。具体的に東アジアの視座からソフトパワーとしての韓流・日流の展開にともなう様々な現象、それがもたらす政治的、経済的、社会的インパクトなどについて考えてみるフォーラムであった。

■プログラム

総合司会：金 雄熙（仁荷大学国際通商学部助教授、S G R A 研究員）

【開会の辞】李 鎮奎（未来人力研究院院長、高麗大学経営学部教授）

【基調講演】：「いわば韓流文化論の可能性と限界」全 京秀（ソウル大学人類学科教授）

【講演】

- ①韓国における日本ブーム 林 夏生（富山大学人文学部国際文化学科助教授）
- ②日本における韓国ブーム 平田由紀江（延世大学社会学科博士課程）
- ③戦後中華圏の「哈日」「韓流」現象の歴史とその背景 林 忠泉（琉球大学法文学部助教授）
- ④ベトナムにおける日本ブーム・韓国ブーム ブ・ティ・ミン・チー（ベトナム人間科学研究所）
- ⑤東アジアにおける日本企業のマーケティング戦略 山中宏之（NHKエンタープライズ）
- ⑥東アジアにおける韓国企業のマーケティング戦略 趙 瑒俊（韓国情報文化振興院）

【パネルディスカッション】

進行： 李 元徳（国民大学国際学部副教授）

パネリスト：講演者3名に加えて

木宮正史 東京大学大学院総合文化研究科助教授

林 慶澤（全北大学東洋語文学部）

挨拶：今西淳子（渥美国際交流奨学財団常務理事、S G R A 代表）

閉会挨拶：全 京秀（ソウル大学人類学科教授）

■概要

日韓アジア未来フォーラム in ソウル報告

第5回日韓アジア未来フォーラム「東アジアにおける韓流と日流：地域協力におけるソフトパワーになりうるか」が韓国高麗大学仁村記念館にて11月4日（金）に開催された。前回のフォーラムのテーマを広げ、これま



での東アジア国際関係史に見られなかった画期的な出来事である韓流と日流の文化経済的・国際的意義について考えるフォーラムであった。日韓アジア未来フォーラムは、SGRAと韓国未来人力研究院が共同で2001年より進めてきている日韓研究者の交流プログラムで、毎年交互に訪問しフォーラムを開催している。



韓国未来人力研究院の院長、高麗大学の李鎮奎（イ・ジンギョ）教授による開会の挨拶に続き、ソウル大学人類学科の全京秀（ジョン・ギョンス）教授が「いわば韓流文化論の可能性と限界」という演題で基調講演を行った。全教授は韓流文化論の可能性と限界について、文化論は技術－組織－観念の三拍子がうまくかみ合うときに成り立つものであるとしたうえで、韓流文化論においてみられる三拍子間の格差、すなわち文化遅滞（cultural lag）現象は韓流の衰退につながる恐れがあると指摘した。このような認識から韓流と日流をめぐる文化論は窮極的には自分を見出す鏡探しであり、三拍子がうまくかみ合ういい鏡を探すべきであると力説した。



基調講演に引き続き韓国中央大学の孫烈（ソン・ヨル）氏の司会で第一セッション「文化交流現象としての韓流と日流」が始まった。最初の発表者である富山大学の林夏生（はやし・なつお）氏は、日韓文化交流政策の政治経済について発表した。韓流と日流が一般にはまるで「最近になって唐突に」出現した現象のように受け止められているが、実は「そうではない」とし、政策的には規制されながらも、海賊版が大量に流通するなど非公式な側面も

含む「文化交流現象」が存在したと、そしてそれへの対応がせまられたこともまた、近年の急激な変化をもたらす重要な要因のひとつであったと指摘した。

『韓国を消費する日本』という著書が韓国で注目されている延世大学社会科学博士課程の平田由紀江（ひらた・ゆきえ）さんは「食の韓流」というテーマで発表を行った。韓国側の代表ということで日本人でありながらも流暢な韓国語で発表した。平田さんは日本国内における韓国食文化の形成が在日韓国・朝鮮人の移動土着化によるものであるとすれば、最近の韓国飲食の象徴的な意味の変化は両国間のいろいろな双方向的な交流によるものであると主張した。そして韓国ドラマ「ジャングム」に触発された韓国「伝統」飲食に対する関心などの社会現象を調べ、人的流れおよびメディアの流れと日本国内の韓国飲食との関係を考察し、日本国内の韓国飲食文化に現れている変形されたナショナリズムとその多層的意味について論じた。



「香港のハヤシ」さんである琉球大学法文学部の林泉忠（リム・チュアンティオン）氏は、「哈日」や「韓流」のいずれも、意外に知られていないかもしれないが、中華圏で始まってまた現在も中華圏を中心に、東アジア全体そして東南アジアの一部まで拡大してきている現象であると指摘した。そして「哈日」と「韓流」現象は中華圏のどこから動き始め、如何に中華圏全体に拡大して変遷してきたか、それぞれの特徴と中華圏内外への影響について見解を述べた。

第一セッションの3人の発表が終わり、「韓国のハヤシ」さんである全北大学東洋語文学部の林慶澤（イム・ギョング）氏と延世大学社会学科の韓準（ハン・ジュン）氏はそれぞれ文化人類学、社会学の観点から理論的なコメントを兼ねた討論を行った。

休憩を挟んで第二セッションでは国民大学の李元徳氏の司会で「東アジア地域協力における韓流と日流」というテーマ



について議論が行われた。ベトナム社会科学院人間研究所のブ・ティ・ミン・チーさんは、ベトナムにおける日本ブーム・韓国ブームについて、日本ブームと韓国ブームは、日韓両国ともに過去にベトナムに与えた悪い印象を解消し、しだいにいい印象をもたらすようになったと指摘した。そしてこうした文化的交流はソフトパワーとなって、物的・人的交流につながる経済的・社会的インパクトを与えてきたと肯定的に捉えた。

NHKエンタープライズの山中宏之（やまなか・ひろゆき）氏は、「東アジアにおけるエンターテインメント相互交流」につ

いて、東アジア各国でライブを開催した経験を紹介し、今後の東アジアのエンターテインメント相互交流の展望を探った。また、北京のテレビ局で仕事をしていた時に見た、大金をかけてプロジェクトをする日本対し、草の根から人脈を築いていた韓国のやり方が今の韓流を導いたと語った。

最後の発表者として韓国情報文化振興院の趙瑋俊（ジョ・ヨンジュン）氏は、「デジタル韓流のブルーオーシャン」について、時の経過によりレッドオーシャン（既存市場）に変貌しているIT産業の熾烈な競争の中で、韓国がどうすればレッドオーシャンでの優位を保ち、ブルーオーシャンを創出できるか、その解決策を提示した。また、次第に立場が縮小しているように思われる韓流との総合的な比較分析を通じ、「デジタル韓流」が韓流の新たな可能性であることを逆説した。



第二セッションの3名による発表が終わり、東京大学の木宮正史氏とグローバル・カルチャー研究所の高熙卓（コウ・ヒタク）氏による討論で第2セッションが幕を閉じた。その後、ディスカッションはフロアーに開放されたが、同時通訳を入れても5時間にも及ぶ長い会議で議論が尽くされたためか、述べ80名にも及ぶ参加者の中からコメントや感想は寄せられなかった。

最後にSGRA代表の今西さんによる閉会の挨拶では、日韓アジア未来フォーラムが内容と形式両面において立派なものに一步前進を見せたことについてのお祝いの言葉があり、拍手で締め括られた。

（文責：金雄熙）



11月4日（金）にソウルの高麗大学で開催した日韓アジア未来フォーラムの後、SGRAからの参加者はヨンナルへの1泊旅行へ招待されました。参加した会員の中村様より紀行文をお送りいただきましたのでご紹介いたします。

☆ ☆ ☆

「ヨンナル（寧越）紀行」

SGRA会員 中村まり子

ソウル高麗大学でのシンポジウム終了後の11月5日早朝、ソウル大学全京秀教授を団長としたヨンナル旅行ツアーはバス4台で一路太白山脈のふもとの深い溪谷に点在する小さな美術館めぐりに出発した。SGRAから参加したのは嶋津さん、足立さん、ハノイから来たチーさん、上海からきた高玲那さん、ソウル在住の高熙卓さんと私の6人。高速道路を走ること3時間、最初の訪問先は本の美術館・・・崖を切り開いて建てられた小学校の廃校を利用したもの、分校だったので教室は二つ。昔の教科書などが展示されていた。その後昆虫博物館、民族画博物館、芸術村（画家夫婦が自ら建てた家で絵画制作と展示をしていた）、写真博物館、韓国の山頭火 Byeongyeon（金サッカッ）の記念館へ。



夕刻、宿に到着。すぐさま町の料理屋へ移動、郡長さん（日本の県知事さんか？）主催の歓迎夕食会が開かれた。そこでの挨拶から、都会より学識者を招いての視察とシンポジウムの一団が地元の方々から大いなる希望と期待を抱かれていることが判明した。

翌日は早朝より町の中心部にある公会堂でシンポジウムが開催された。ヨンナルは「美術館、博物館の村」との提案を政府に申請したところ認可され、年間3億円の予算が下り始めたそうで、これからの活性化をさぐる提案が、4人のパネリストによって個々の研究テーマに沿った形で発表された。ドイツのメイン川沿いの町並み保存について、琵琶湖のほとりの近江商人の町・五個荘保存成功についてなど。会場はバス4台分の乗客で埋まり、もっと自然の景観を利用すべきなど提案もなされて大盛況のうちに閉幕した。



昼食後、李朝六代目の若き王が叔父の陰謀にあい幽閉されていた場所を再現したところへ小船で渡り、松林の中に建つ浅茅が宿を見学・・・枯れた葦がそよぐ川辺に立ち当時を偲んだ。

帰途の高速道路は日曜日の行楽帰りと事故で大渋滞、夕6時すぎにようやくソウルに辿り着き2日間の駆け足視察旅行は幕を降ろした。





活動報告 (2005年6月～2006年5月)

☆年4回のSGRAフォーラムを開催

■ 2005年7月23日 第20回SGRAフォーラム in 軽井沢「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」

(於：鹿島建設軽井沢研修センター)

総合司会：李 鋼哲 (総合研究開発機構NIRA研究員、SGRA研究員)

開催の趣旨：平川 均 (名古屋大学大学院経済学研究科教授、SGRA顧問)

F. マキト (フィリピンアジア太平洋大学研究助教授、SGRA研究員)

- ・ 基調講演：「東アジア共同体への期待と不安」

渡辺利夫 (拓殖大学学長)

- ・ ゲスト講演：「東アジアの雁行型工業化とベトナム」

トラン・ヴァン・トウ (早稲田大学教授)

- ・ 研究報告：「中国家電産業の雁行型発展と日中分業」

範 建亭 (上海财经大学国際工商管理大学院助教授、SGRA研究員)

- ・ 研究報告：「韓・中・日における分業構造の分析と展望

—化学産業を中心として—

白 寅秀 (韓国産業資源部産業研究院副研究委員、SGRA研究員)

- ・ 研究報告：「モンゴルの経済発展と東北アジア諸国との経済関係」

エンクバヤル・シャグダル (環日本海経済研究所ERINA研究員)

- ・ 研究報告：「共有型成長を可能にする雁行形態ダイナミクス (フィリピンの事例)」

F. マキト (フィリピンアジア太平洋大学研究助教授、SGRA研究員)

- ・ パネルディスカッション

- ・ 総括：平川 均 (名古屋大学大学院経済学研究科教授、SGRA顧問)



→ SGRA レポート # 3 1

■ 2005年11月23日 第21回SGRAフォーラム「日本は外国人をどう受け入れるべきか—留学生—」

(於：東京国際フォーラム)

司会：イコ プラムディオノ (SGRA「人的資源・技術移転」研究チーム サブチーフ / NTT 情報流通プラットフォーム研究会)

- ・ ゲスト講演：「アジア諸国の留学生事情と日本のこれから」

横田雅弘 (一橋大学留学生センター教授、JAFFSA副会長)

- ・ ゲスト講演：「外国人学生等の受入れに関する提言：留学生支援活動の現場から」

白石勝己 (アジア学生文化協会 教育交流事業部長、SGRA会員)

- ・ 研究報告：「韓国人元留学生は日本での留学をどう評価しているのか」



- 一日・欧米帰国元留学生に対する留学効果の比較から
鄭 仁豪（筑波大学大学院人間総合科学研究科助教授）
- ・研究報告：「日米留学の実態から日本の留学生受け入れ体制を検証するータイ人留学経験者の追跡調査を踏まえてー」
カンピラパーブ・スネート（名古屋大学大学院国際開発研究科講師）
- ・研究報告：「改革・開放後中国政府派遣した元赴日学部留学生の日本認識」
王 雪萍（慶應義塾大学政策・メディア研究科博士課程、SGRA 研究員）
- ・パネルディスカッション
進行：角田英一（アジア21世紀奨学財団常務理事）
パネラー：講師2名のほか
黒田一雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科助教授）
大塚 晶（朝日新聞社会部）
徐 向東（キャストコンサルティング代表取締役、SGRA 研究チーフ）

→ SGRA レポート # 3 2

■ 2006年2月10日 第22回 SGRA フォーラム「戦後和解プロセスの研究」

(於：東京国際フォーラム)

- ・ゲスト講演：「戦後和解：英国との関係修復を中心に」
小菅信子（山梨学院大学法学部助教授）
- ・ゲスト講演：「花岡和解研究序説」
李 恩民（桜美林大学国際学部助教授、SGRA 研究員）
- ・フロアーとの質疑応答
進行：金 範洙（東京学芸大学大学院博士課程、SGRA 研究員）



→ SGRA レポート # 33 (予定)

■ 2006年5月14日 第23回 SGRA フォーラム「日本人と宗教ー宗教って何なの?ー」

(於：東京国際フォーラム)

- 司会：F. マキト（SGRA 運営委員）
- ・基調講演：「日本人にとっての『宗教』と『宗教のようなもの』」
島蘭 進（東京大学教授）
 - ・パネリスト自己紹介「宗教と日本と私」
日本と神道：ノルマン・ヘイヴンズ（國學院大學神道文化学部助教授）
日本と仏教：ランジャンナ・ムコパディヤーヤ（名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授、SGRA 研究員）
日本とイスラーム教：セリム・ユジェル・ギュレチ（イスラーム文化センター代表）
日本とキリスト教：ミラ・ゾンターク（富坂キリスト教センター研究主事、SGRA 研究員）
 - ・フロアーとの質疑応答
進行 島蘭 進（東京大学教授）



→ SGRA レポート # 34(予定)

■ 渥美奨学生 2005 年度著作・発表論文・特許リスト

■ Abliz Yimit アブリズ イミテ (横浜国立大学・博士<人工環境システム>：新疆大学化学化工学院助教授 (在ウルムチ)：2002 年度奨学生)

1. The application of Highly Sensitive Composite Optical Waveguide in the Ozone Detection, Chinese Journal Of Analytical Chemistry, 33(2005)1663-1665.
2. Synthesis and Characteriation of m-Phenylenediamine Dihydrochloride Bicondensed p-Ferrocenyl Benzaldehyde Schiff Base and Its Transition Metal Complexes, Chinese Journal of Synthetic Chemistry, 13(2005)172-174.
3. Effect on Composition of Mist Samples and Environment, Journal of Xinjiang University, 22(2005)448-452

■ Bambling, Michele バンプリング、ミッシェル(コロンビア大学 [慶応大学]・博士<美術史>：メトロポリタン美術館研究員(在ローマ)：1995 年度奨学生)

1. Bambling, Michele. 2005. "Japan's Living National Treasure Program and the Paradox of Remembering" pp. 148-169 in Monuments and Memory Making in Japan, edited by Tsu Yun Hui, Jan van Bremen and Eyal Ben-ari. London: Global Oriental Press.
2. Bambling, Michele. "Bellezza e caducita nell' arte giapponese" [Ephemeral Beauty in Japanese Art] (in Italian) Come ciliegi in fiore: Fascino della bellezza e senso dell' effimero nella tradizione artistica del Giappone (Exhibition Catalogue) Complesso del Vittoriano, Rome (May 2005): 23-32

■ Bao Lian Qun 包 聯群 (東京大学<言語情報科学>：2005 年度奨学生)

1. 「中国少数民族の言語問題と教育機会—黒龍江省におけるモンゴル族を中心として—」『TOAFAEC 東アジア社会教育研究』No10、2005 年 9 月、99-115 頁、東京・沖縄・東アジア社会教育研究会編集 (共著)
2. 「モンゴル語の空間移動動詞 oroqu の意味用法について」『アルタイ語学 I』2006 年 3 月、181-200 頁、日本アルタイ語学会編集

■ Borjigin, Burensain ボルジギン、ブレンサイン (早稲田大学・博士<東洋史>：滋賀県立大学人間文化学部助教授 (在彦根市)：2001 年度奨学生)

1. 「瀋陽郊外のモンゴル人」、2005.5 『日本とモンゴル』第 39 巻第 2 号 (財団法人日本モンゴル協会)
2. 「境界としての興安嶺—アルホルチン旗と西ウジュムチン旗の牧地紛争を事例に—」、2005.7 『早稲田大学モンゴル研究所紀要』、第二号、早稲田大学モンゴル研究所発行

■ Chang Kuei-e 張 桂娥 (東京学芸大学<学校教育学—言語文化>：東呉大学非常勤講師 (在台北)：2003 年度奨学生)

1. 著 (訳) 書／長大後想變成什麼呢 [訳] 【おおきくなったらなんになる? [寮美千子作・はたこうしろう絵・絵本]】／天衛出版社／2005.04
2. 著 (訳) 書／你好! 小熊沃夫 [訳] 【こんにちは ウーフ [神沢利子著・幼児向け物語]】／天衛出版社／2005.05

■ Chu Xuan Giao チュ・スワン・ザオ (東京外国語大学<文化人類学>：2006 年度奨学生)

1. <ベトナム語、2 回連載> 「Nhân loại học Lịch sử — một nhu cầu về phương pháp từ thực tế điền dã tại Nhật Bản, dòng chảy và động thái hiện tại của cách tiếp cận này 日本村落研究と歴史人類学の可能性」ベトナム社会科学文化研究所『Văn hóa Dân gian 民間文化』2005 年 6 号 (pp.45-61)、2006 年 1 号 (pp.60-73)
2. <英語> 「Historical Anthropology and the Field of Japan 歴史人類学と日本というフィールド」SOAS (School of Oriental and African Studies, University of London) and TUFU (Tokyo University of Foreign Studies) Post-Graduate Symposium, 2006 年 2 月、イギリス・ロンドン大学 (発表論文集 印刷中)

■ Fan Jianting 範 建亭 (一橋大学・博士<経済学>：上海財経大学国際工商管理学院助教授：2001 年度奨学生)

1. 論文：範 建亭「第二章 中国経済における民営中小企業の位置」、関満博編『現代中国の民営中小企業』新評論、2006 年 2 月
2. 発表：範 建亭「緊密化する日中経済関係と国際分業」、長崎大学経済学部創立 100 周年記念国際シンポジウム『東アジア

における経済的相互依存の現状と課題』報告書（2005年12月）に所収

■ Gao Weijun 高 偉俊（早稲田大学・博士〈建設工学〉：北九州市立大学国際環境工学部環境空間デザイン学科助教授／西安交通大学兼職教授／早稲田大学理工学部総合研究センター九州研究所客員助教授（在北九州）：1995年度奨学生）

1. 審査論文："Examination of Viability of Co-generation for a Small-scale Housing Development in Kitakyushu, Japan", 2005/05, "Journal of Asian Architecture and Building Engineering", Vol.4 No1 pp.231-236, Yingjun Ruan, Bill Batty, Weijun Gao, Noriyasu Sagara, Yuji Ryu
2. 審査論文：Investigation and Evaluation on District Energy System at Kitakyushu Science and Research Park--Field Study on Running Situation during 2002, 2005/05, "Journal of Asian Architecture and Building Engineering", Vol.4 No1 pp.237-243, Yingjun Ruan, Weijun Gao, Noriyasu Sagara, Yuji Ryu
3. 審査論文：Investigation on the Situation of Combined Heating and Power System in Japan, 2005/05, "Journal of Asian Architecture and Building Engineering", Vol.4 No1 pp.245-251, Yingjun Ruan, Weijun Gao, Haifeng Li, Toshio Ojima
4. 審査論文：Urbanization and its Classification in China from the Consideration of Environment, 2005/05, "Journal of Asian Architecture and Building Engineering", Vol.4 No1 pp.279-284, Xingtian Wang, Weijun Gao, Haifeng Li, Penglin Zhao, Jianxing Ren, Toshio Ojima
5. LBL 報告書：Assessment of Distributed Generation Potential in Japanese Buildings, 2005/05, Berkeley Lab Publications : LBNL-57978, May 2005, Zhou, N, C. Marnay, R. Firestone, W. Gao, M. Nishida
6. 審査論文：Investigation on the Standard for Energy and Environmental Design of Residential House in China, 2005/05, "Journal of Asian Architecture and Building Engineering", Vol.4 No1, Yumiko Ogawa, Weijun Gao, Nan Zhou, Toshiyuki Watanabe, Hiroshi Yoshino, Toshio Ojima
7. 審査論文：Optimization of co-generation system for housing complex — Housing complex' s scale and system' s operating mode, 2005/06, 日本建築学会環境系論文集, No.592, pp15-22, Yingjun Ruan, Weijun Gao
8. 審査論文：Research on Building Waste and Recycling in Kitakyushu Part 1: An Example of Construction and Demolition Work, 2005/11, "Journal of Asian Architecture and Building Engineering", Vol. 4 (2005)No. 2, pp.571-575, Yumiko Ogawa, Toshihide Fukahori, Weijun Gao
9. 国際講演論文："Changing of Atmospheric Environmental Quality and Control of Pollutant Emission of Shanghai", 2005/11, "International Symposium On Sustainable Development Of Asia City Environment Nov.23th to 25th, 2005, Xi'an, China", Qunyin Gu, Jianxing Ren, Fangqin Li, Weijun Gao
10. 国際講演論文："Trend of District Heating Supply Development, in China", 2005/11, "International Symposium On Sustainable Development Of Asia City Environment Nov.23th to 25th, 2005, Xi'an, China", Xindong Wei, Jun Yin, Weijun Gao, Ji Xuan
11. 国際講演論文：Study on the thermal environmental evaluation of greenbelt plan in Shenzhen city, 2005/11, "International Symposium On Sustainable Development Of Asia City Environment Nov.23th to 25th, 2005, Xi'an, China", Haifeng Li, Weijun Gao, Toshio Ojima
12. 国際講演論文："Evaluation on running schedule and operating mode of district energy system at Kitakyushu Science and Research Park", 2005/11, "International Symposium On Sustainable Development Of Asia City Environment Nov.23th to 25th, 2005, Xi'an, China", Yingjun Ruan, Weijun Gao, Yongwen Yang, Ji Xuan
13. 国際講演論文：Feasibility of Introduction of Combined Heating and Power System in Commercial Building of Shanghai, 2005/11, "International Symposium On Sustainable Development Of Asia City Environment Nov.23th to 25th, 2005, Xi'an, China", Ji Xuan, Weijun Gao, Yingjun Ruan, Xindong Wei
14. 国際講演論文：Optimal Model of Distributed Energy System by Using GAMS and Case Study, 2005/11, "International Symposium On Sustainable Development Of Asia City Environment Nov.23th to 25th, 2005, Xi'an, China", Yongwen Yang, Weijun Gao, Yingjun Ruan, Ji Xuan, Nan Zhou, Chris Marnay,
15. 講演：北九州学研都市における地域エネルギーシステムの年度別電力・冷暖房消費状況、2005/05、空気調和・衛生工学会九州支部研究報告 第12号, 75 - 78、玄 姫、阮 応君、高偉俊、相楽典泰、龍有二、楊涌文
16. 講演：GAMS を用いた分散型エネルギーシステムの最適化モデル化及びケーススタディ、2005/05、空気調和・衛生工学会九州支部研究報告 第12号, 83 - 86、楊涌文、高偉俊、阮 応君、周南、Chris Marnay、玄 姫
17. 講演：HEATMAP を用いた北九州学研都市におけるエネルギーシステムの最適化、2005/05、空気調和・衛生工学会九

州支部研究報告 第12号,79-82、阮 応君、高偉俊、小柳秀光、楊 涌文

18. 講演：北九州市における建築廃棄物及び再資源化に関する調査研究 その1 建築解体工事の事例研究、2005/08、2005年度(大阪)日本建築学会大会学術講演会 A-1分冊,1031-1032、小川由美子、金川宗司、高偉俊、

19. 講演：北九州市における建築廃棄物及び再資源化に関する調査研究 その2 建設廃棄物リサイクルのエネルギー消費に関するケーススタディ、2005/08、2005年度(大阪)日本建築学会大会学術講演会 A-1分冊,1033-1034、金川宗司、小川由美子、高偉俊、

20. 講演：中国瀋陽市における住宅エネルギー消費に関する調査研究、2005/08、2005年度(大阪)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊,297-298、于リャン、渡辺俊行、赤司泰義、高口洋人、高偉俊

22. 講演：北九州学研都市における地域エネルギーシステムの年度別冷熱消費状況の比較 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その8)、2005/08、2005年度(大阪)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊,1371-1372、玄姫、阮 応君、高偉俊、相楽典泰、龍 有二

22. 講演：HEATMAPを用いた北九州学研都市におけるエネルギーシステムの最適化に関する研究 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その9)、2005/08、2005年度(大阪)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊,1373-1374、阮 応君、高偉俊

23. 講演：GAMSを用いた分散型エネルギーシステムの最適化モデル E-GAMS 研究 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その10)、2005/08、2005年度(大阪)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊,1375-1376、楊涌文、阮 応君、高偉俊

24. 講演：E-GAMSを用いた電気・ガス料金及び機器効率がシステムの運転状況への影響分析 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その11)、2005/08、2005年度(大阪)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊,1377-1378、高偉俊、楊涌文、阮 応君

25. 講演："中国における住宅内のエネルギー消費に関する調査研究 その2 大連市の場合"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、門路、高偉俊、阮 応君、渡辺俊行、于リャン、高口洋人

26. 講演："中国における住宅内のエネルギー消費に関する調査研究 その3 瀋陽市と大連市の比較"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、于リャン、渡辺俊行、高口洋人、高偉俊、阮 応君、門路

27. 講演："北九州市立大学ひびきの校舎の省エネルギー改善策に関する基本調査-地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その12)"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、太剛志、玄姫、阮 応君、高偉俊

28. 講演：リサイクル木材を用いたパーティクルボードの経済性の総合評価、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、張 榮、小川由美子、高偉俊

29. 講演："上海における地域エネルギーシステムの導入可能性に関する研究 その1 上海地域における地域モデルの構築"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、城下直樹、玄姫、楊涌文、阮 応君、李海峰、深堀秀敏、高偉俊

30. 講演："上海における地域エネルギーシステムの導入可能性に関する研究 その2 都心地域におけるコージェネレーションシステムの導入可能性及び評価"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、玄姫、城下直樹、阮 応君、李海峰、高偉俊

31. 講演："中国におけるESCO事業に関する調査研究 その1 歴史、現状及び問題点について"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、阮 応君、高偉俊、阿部祐介、李海峰、吉田公夫

32. 講演："中国におけるESCO事業に関する調査研究 その2 上海ESCO事業における建築技術の導入可能性に関する評価"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、阿部祐介、高偉俊、阮 応君、李海峰、吉田公夫

33. 講演："地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その13) 分散型エネルギーシステムの技術導入設計支援ツールの開発及び事例分析"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 環境系、楊涌文、高偉俊、阮 応君、小柳秀光

34. 講演："戸建住宅における解体プロセス及びハウスメーカーのリサイクルへの取り組みに関する調査～北九州市における事例調査～"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 構造系、池本裕実、金川宗司、高偉俊

35. 講演："北九州市における建設廃棄物リサイクルのプロセス及びエネルギー消費に関する調査研究 その4 部材製造エネルギー消費量算定と学研都市留学生宿舎におけるケーススタディ"、2006/03、日本建築学会九州支部 研究報告集 第45号 構造系、金川宗司、小川由美子、高偉俊

■ He Zuyuan 何 祖源 (東京大学・博士<先端学際工学 / 光電子工学>:東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻特任助教授:

1998 年度奨学生)

学術誌論文：

1. Momoyo Enyama, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Expansion of spatial measurement range by use of vernier effect in multiplexed fibre Bragg grating strain sensor with synthesis of optical coherence function," *IoP Measurement Science and Technology*, Vol. 16, No. 4, pp. 977-983, 2005
2. Chia-Chen Chang, Zuyuan He, Gregory Senft, Nasir Ahmad, Erin Sahinci, and Waqar Mahmood, "Evaluation on fiber boot of optical component by bend radius measurement in side pull test," *IEICE Electronics Express*, Vol. 2, No. 6, pp. 205-210, 2005
3. Xinyu Fan, Zuyuan He, Yosuke Mizuno, and Kazuo Hotate, "Bandwidth-adjustable dynamic grating in erbium-doped fiber by synthesis of optical coherence function," *OSA Optics Express*, Vol. 13, No. 15, pp. 5756-5761, 2005
4. Xinyu Fan, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Novel strain- and temperature-sensing mechanism based on dynamic grating in polarization-maintaining erbium-doped fiber," *OSA Optics Express*, Vol. 14, No. 2, pp. 556-561, 2006
5. Zuyuan He, Toshihiko Tomizawa, and Kazuo Hotate, "High-speed high-reflectance-resolution reflectometry by synthesis of optical coherence function," *IEICE Electronics Express*, Vol. 3, No. 7, pp. 122-128, 2006
6. Kwang-Yong Song, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Optimization of Brillouin optical correlation domain analysis system based on intensity modulation scheme," *OSA Optics Express*, Vol. 14, No. 10, pp. 4256-4263, 2006
7. Kazuo Hotate and Zuyuan He, "Synthesis of optical coherence function and its applications in distributed and multiplexed optical sensing," *IEEE/OSA Journal of Lightwave Technology*, Vol. 24, No. 6, Jun. 2006 (invited) (in press)
8. Kazuo Hotate, Koji Makino, Zuyuan He, Mitsuteru Ishikawa, and Yuzo Yoshikuni, "High spatial resolution fiber optic distributed lateral stress sensing by stepwise frequency modulation of a super structure grating distributed Bragg reflector laser diode," *IEEE/OSA Journal of Lightwave Technology*, Vol. 24, No. 6, Jun. 2006 (in press)

国際会議発表：

1. Zuyuan He, Yosuke Mizuno, Xinyu Fan, and Kazuo Hotate, "Bandwidth-adjustable dynamic grating in erbium-doped fiber with synthesis of optical coherence function," *Proc. IQEC and CLEO-PR 2005*, pp. 1072-1073, Tokyo, July 2005
2. Zuyuan He and Kazuo Hotate, "Distributed photonic sensing with synthesized optical coherence function," *Proc. SPIE International Congress on Optics and Optoelectronics*, Vol. 5952, pp. 147-161, Warsaw, Aug. 2005 (invited)
3. Zuyuan He, Tetsuya Hayashi, and Kazuo Hotate, "High-speed interrogation of multiplexed fiber Bragg grating sensors with similar Bragg wavelength by synthesis of optical coherence," *Proc. SPIE Fiber Optic Sensor Technology and Applications IV*, Vol. 6004, pp. 65-73, Boston, Oct. 2005
4. Zuyuan He, Toshihiko Tomizawa, Masahiro Kashiwagi, and Kazuo Hotate, "High-speed high-reflectance-resolution optical reflectometry by synthesis of optical coherence function," *Technical Digest of the 11th Microoptics Conference (MOC' 05)*, pp. 110-111, Tokyo, Nov. 2005
5. Zuyuan He and Kazuo Hotate, "Unification of input and output ends in polarization-maintaining optical fiber stress sensor by synthesis of optical coherence function," *Proc. SPIE International Symposium on Optomechtronic Technologies*, Vol. 6049, pp. 25-36, Sapporo, Dec. 2005 (invited)
6. Xinyu Fan, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "A novel strain- and temperature-sensing mechanism based on dynamic grating in polarization-maintaining erbium-doped fiber," *Technical Digest of OFC/ NFOEC 2006, OTuL2*, pp. 1595-1597, Anaheim, Mar. 2006
7. Xinyu Fan, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "A novel distributed strain sensor based on dynamic grating in polarization-maintaining erbium-doped fiber," *Technical Digest of Conference on Lasers and Electro-Optics/Quantum Electronics and Laser Science Conference (CLEO/QELS) 2006, CThL3*, Long Beach, May 2006
8. Kwang-Yong Song, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Brillouin optical correlation domain analysis system with kilometer measurement range based on intensity modulation scheme," *Technical Digest of Conference on Lasers and Electro-Optics/Quantum Electronics and Laser Science Conference (CLEO/QELS) 2006, CThL4*, Long Beach, May 2006

学会・研究会発表：

1. 何 祖源, 富澤敏彦, 柏木正浩, 保立和夫, "光波コヒーレンス関数合成を用いた高速・高反射率分解能リフレクトメトリ," *応用物理学会第 35 回光波センシング技術研究会講演論文集*, pp. 149-154, 東京, 2005 年 6 月
2. 樊昕昱, 何 祖源, 保立和夫, "光波コヒーレンス関数の合成法にアダプティブキャリアを導入した高精度高速光リフレクトメトリ," *電子情報通信学会光ファイバ応用技術研究会, 信学技報, OFT2005-18*, pp. 13-18, 秋田, 2005 年 8 月
3. 林 哲也, 柏木正浩, 何 祖源, 保立和夫, "光波コヒーレンス関数の合成法を用いた FBG センサシステムの性能制限要因の考

察と高性能化,” SICE 第 22 回センシングフォーラム予稿集, pp. 20-25, 大阪, 2005 年 9 月

4. 樊昕昱, 何 祖源, 保立和夫, “偏波維持エルビウム添加光ファイバにおけるダイナミックグレーティングを用いた歪と温度センシング,” 応用物理学会第 36 回光波センシング技術研究会講演論文集, pp. 67-72, 東京, 2005 年 12 月

5. 樊昕昱, 何 祖源, 保立和夫, “偏波維持エルビウム添加光ファイバにおけるダイナミックグレーティングの合成による分布型光ファイバ歪センサ: 実験検証,” 電子情報通信学会光エレクトロニクス研究会, 信学技報, Vol. 105, No. 606, pp. 7-12, 東京, 2006 年 2 月

6. 宋 光容, 何 祖源, 保立和夫, “Brillouin optical correlation domain analysis system with kilometer measurement range based on intensity modulation scheme,” 電子情報通信学会光エレクトロニクス研究会, 信学技報, Vol. 105, No. 606, pp. 13-18, 東京, 2006 年 2 月

7. 何 祖源, 樊昕昱, 保立和夫, “ホモダイン検波とアダプティブキャリアを導入した光波コヒーレンス関数の合成法による高精度光リフレクトメトリ,” 応用物理学会第 37 回光波センシング技術研究会講演論文集, LST-37-7, 東京, 2006 年 6 月

8. 林 哲也, 何 祖源, 保立和夫, “光波コヒーレンス関数の合成法を用いた多点型 FBG センサシステムの能動的ビート周波数補償による高性能化,” 応用物理学会第 35 回光波センシング技術研究会講演論文集, LST-37-8, 東京, 2006 年 6 月

9. 鄒 衛文, 何 祖源, 保立和夫, “光ファイバ中の残留応力のブリルアン利得スペクトルへの影響,” 応用物理学会第 35 回光波センシング技術研究会講演論文集, LST-37-10, 東京, 2006 年 6 月

10. 宋 光容, 何 祖源, 保立和夫, “Distributed strain measurement with millimeter-order spatial resolution based on Brillouin optical correlation domain analysis,” 応用物理学会第 35 回光波センシング技術研究会講演論文集, LST-37-11, 東京, 2006 年 6 月

学会年次大会発表:

1. 林 哲也, 柏木正浩, 何 祖源, 保立和夫, “光波コヒーレンス関数の合成法を用いた多点型 FBG センサシステムの測定速度と測定レンジの向上,” 電子情報通信学会ソサイエティ大会, C-3-134, p. 278, 札幌, 2005 年 9 月

2. 樊昕昱, 何 祖源, 保立和夫, “偏波維持エルビウム添加光ファイバにおけるダイナミックグレーティングを用いた歪と温度センシング,” 電子情報通信学会ソサイエティ大会, C-3-133, p. 277, 札幌, 2005 年 9 月

3. 何 祖源, 富澤敏彦, 柏木正浩, 保立和夫, “光ファイバモジュール診断用の高速高精度光リフレクトメトリ,” 電子情報通信学会ソサイエティ大会, C-3-132, p. 276, 札幌, 2005 年 9 月

4. 林 哲也, 何 祖源, 保立和夫, “光波コヒーレンス関数の合成法を用いた多点型 FBG センサのクロストークと空間分解能,” 電子情報通信学会総合大会, C-3-68, p. 203, 東京, 2006 年 3 月

5. 樊昕昱, 何 祖源, 保立和夫, “偏波維持エルビウム添加光ファイバにおけるダイナミックグレーティングを用いた分布型歪センサ: 実験検証,” 電子情報通信学会総合大会, C-3-67, p. 202, 東京, 2006 年 3 月

6. Kwang-Yong Song, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “Brillouin optical correlation domain analysis system with kilometer measurement range based on intensity modulation scheme,” 電子情報通信学会総合大会, C-3-66, p. 201, 東京, 2006 年 3 月

7. Kwang-Yong Song, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “Distributed measurement with millimeter-order spatial resolution based on Brillouin optical correlation domain analysis,” 電子情報通信学会総合大会, C-3-65, p. 200, 東京, 2006 年 3 月

8. 鄒 衛文, 何 祖源, 保立和夫, “2 次元有限要素法を用いた PANDA 偏波維持ファイバブリルアン利得スペクトルの解析,” 電子情報通信学会総合大会, C-3-26, p. 164, 東京, 2006 年 3 月

その他:

1. Zuyuan He and Kazuo Hotate, “Distributed and Multiplexed Photonic Sensing for Reliability and Security,” Proc. International Symposium on Advanced Electronics for Future Generations – “Secure-Life Electronics” for Quality Life and Society, pp. 429-436, Tokyo, Oct. 2005

2. 林 哲也, 何 祖源, 保立和夫, “光波コヒーレンス関数の合成法を用いた多点型 FBG センサシステムの測定速度・測定レンジの向上,” 東京大学 21 世紀 COE プログラム「未来社会を担うエレクトロニクスの展開」第 6 回ワークショップーセキュアライフ・フォトニクスー 予稿集, pp. 5-10, 東京, 2006 年 3 月

3. 宋 光容, 何 祖源, 保立和夫, “Recent progress in the distributed measurement by a Brillouin optical correlation domain analysis system,” 東京大学 21 世紀 COE プログラム「未来社会を担うエレクトロニクスの展開」第 6 回ワークショップーセキュアライフ・フォトニクスー 予稿集, pp. 11-18, 東京, 2006 年 3 月

■ Hu Jie 胡 潔 (お茶の水女子大学・博士<文学>: 名古屋大学大学院国際言語文化研究科助教授: 1998 年度奨学生)

1. 「やまとうた」と「からうた」—古今和歌集の序文からみる— (『言語文化研究叢書』第 5 号, 第 9 頁~26 頁, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 2005.3)

2. 「婚姻の問題」(『国文学』50、学燈社、2005.4)

■ Husel フスレ (東京外国語大学<地域文化>：昭和女子大学非常勤講師：2003 年度奨学生)

論文：

1. 「内モンゴル人民族主義者の独立・自治志向と中国の統合圧力——第二次世界大戦後の中国国民党の対内モンゴル政策(1945～49年)——」『学苑』No.775、昭和女子大学近代文化研究所、2005年5月、pp.14-36.
2. 「内モンゴルに対する中国共産党・国民党の政策(1945～49年)」『史資料ハブ地域文化研究』No.6、東京外国語大学大学院地域文化研究科、2005年9月、pp.154-156.
3. 「内モンゴルにおける革命歌の形成——内モンゴル人民革命党と内モンゴル人民革命青年同盟の歌を中心に——」『学苑』No.781、昭和女子大学近代文化研究所、2005年11月、pp.32-50.
4. 「内モンゴル自治運動における内モンゴル人民革命青年同盟の役割(1945～47年)」『日本モンゴル学会紀要』No.36、2006年2月、pp.17-33.

学会報告・講演：

1. 「内モンゴル自治運動における内モンゴル人民革命青年同盟の役割(1945～48年)」日本モンゴル学会 2005 年度春季大会、早稲田大学、2005年5月21日
2. 「20世紀前半内モンゴル民族主義運動の軌跡」(講演)、帝国書院、2005年9月15日
3. 「内モンゴルにおける“革命”と民族主義運動の研究—内モンゴル人民革命党の歴史に関する考察を中心として—」、「ユーラシア大陸内陸部研究者の集い」、トヨタ財団、2006年1月11日

■ Iko Pramudiono イコ プラムディオノ (東京大学・博士<電子情報工学>：N T T 情報流通プラットフォーム研究所：2002 年度奨学生)

1. K. Takahashi, I. Pramudiono, M. Kitsuregawa Geo-word centric association rule mining, In Proc of 6th International Conference on Mobile Data Management (MDM) 2005
2. 川前徳章, 毎田泉, Iko Pramudiono, 高橋克巳. Personal Data Mining System を用いた情報検索の提案. データ工学 2005.
3. Bowo Prasetyo, Iko Pramudiono, 喜連川優. Hmine-rev. 夏のデータベースワークショップ (DBWS)2005.
4. 飯塚京士, 佐藤宏之, Iko Pramudiono, 村山隆彦. RDF データを対象としたグラフ検索におけるクエリ生成方式の検討. セマンティックウェブとオントロジー研究会 2005.
5. 佐藤宏之, 飯塚京士, Iko Pramudiono, 村山隆彦, 妹尾正身. グラフを辿って関係発掘 CSM (Context Structure Matching). セマンティック Web コンファレンス 2006
6. 飯塚京士, 佐藤宏之, Iko Pramudiono, 村山隆彦. RDF グラフ検索における検索結果の差異項抽出手法の検討. 情報処理学会全国大会 2006.

■ Jeon Jin Hwan 全 振煥 (東京工業大学・博士<工学>：鹿島建設(株)技術研究所主任研究員：2001 年度奨学生)

発表論文：

1. 全 振煥, 栗原靖夫, 梶田秀幸, 永尾弘孝, 杉本賢司, 天野 彰, 許 永東, 松井 勇, 抗菌モルタルにおける抗微生物作用の検討(その1 実験室試験の結果)、日本建築工上学会大会学術講演会、p115 – p118、2005年10月
2. 栗原靖夫, 全 振煥, 梶田秀幸, 永尾弘孝, 杉本賢司, 天野 彰, 許 永東, 松井 勇, 抗菌モルタルにおける抗微生物作用の検討(その2 曝露試験の結果)、日本建築工上学会大会学術講演会、p119 – p122、2005年10月
3. 川口慶一郎, 和美廣喜, 笠井 浩, 全 振煥, 藤木英一：石炭灰人工軽量骨材コンクリートの自然環境下における品質特性に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、p733 – p734、2005年9月
4. 刑部知周, 稲葉洋平, 笠井 浩, 全 振煥, 渡辺茂雄：石炭灰人工骨材を用いたコンクリートの構造体コア強度特性、日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、p735 – p736、2005年9月
5. 笠井 浩, 全 振煥, 稲葉洋平, 渡辺茂雄：石炭灰人工骨材を用いたコンクリートの温度応力特性、日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、p737 – p738、2005年9月
6. 全 振煥, 笠井 浩, 刑部知周, 稲葉洋平：石炭灰人工骨材を用いたコンクリートの耐久性の評価、日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、p739 – p740、2005年9月

雑誌投稿：

1. 全 振煥：抗菌モルタル調査研究委員会報告、日本建築工上学会、FINEX VOL.17、NO.102、2005年9月・10月、p25 – p31.

2. 全 振煥、笠井 浩：Technical Research Institute of the KAJIMA Corporation、Japan（鹿島建設（株）技術研究所の紹介）、韓国コンクリート学会誌、2005年7月、VOL.17、NO.4、pp.68-72.
3. 全 振煥、笠井 浩：石炭灰より生まれ変わったコンクリート用人工軽量骨材（Jライト）—積算資料「SUPPORT」（5月掲載予定）、2005年5月、p30—p31.

■ Jiang Susu 江 蘇蘇（横浜国立大学・博士〈物理情報工学〉：東芝セミコンダクター社：2005年度奨学生）

Reviewed Journal Papers：

1. Susu Jiang and Ryuji Kohno, "A New Space-Time Multiple Trellis Coded Modulation Scheme Using Transmit Symbol Phase Rotation." WPMC Special Issue on Wireless Personal Communications, Journal from Kluwer Academic Publishers, Springer, pp.153-171, Oct. 2005.
2. Susu Jiang, Kentaro Ikemoto and Ryuji Kohno, "A Differential STBC Integrated with Trellis Coded Modulation," IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Special Issue on Information Theory and Its Applications (SITA Special Issue 2005), Vol.E88-A, No.10, pp.2896-2904, Oct. 2005.

■ Jie Chi Yang 楊 接期（東京工業大学・博士〈教育工学〉：国立中央大学資訊工程系助教授：1999年度奨学生）

Journal papers：

1. Yang, J. C., Ko, H. W., & Chung, I. L. (2005). Web-based Interactive Writing Environment: Development and Evaluation. *Educational Technology & Society*, 8(2), 214-229.
2. Liang, J. K., Liu, T. C., Wang, H. Y., Chang, L. J., Deng, Y. C., Yang, J. C., Chou, C. Y., Ko, H. W., Yang, S., & Chan, T. W. (2005). A Few Design Perspectives on One-on-one Digital Classroom Environment *Journal of Computer Assisted Learning*, 21(3), 181-189.

Conference papers：

3. Yang, J. C., Lai, C. H., & Chu, Y. M. (2005, November). Integrating Speech Technologies into a One-on-one Digital English Classroom. In *Proceedings of the IEEE International Workshop on Wireless and Mobile Technologies in Education (WMTE 2005)*. Tokushima, Japan. 159-163.
4. Lai, C. H., Yang, J. C., Chen, F. C., Ho, C. W., Liang, J. S., & Chan, T. W. (2005, November). Improving Experiential Learning with Mobile Technologies. In *Proceedings of the IEEE International Workshop on Wireless and Mobile Technologies in Education (WMTE 2005)*. Tokushima, Japan. 141-145.
5. Lai, C. H., Yang, J. C., Liang, J. S., & Chan, T. W. (2005, July). Mobile Learning Supported by Learning Passport. In *Proceedings of the 5th IEEE International Conference on Advanced Learning Technologies (ICALT 2005)*. Kaohsiung, Taiwan. 595-599.
6. Shen, C. H., Chen, C. H., & Yang, J. C. (2005, June). An investigation of using 3D virtual reality to develop "earth motion" curriculum in elementary school. In *Proceedings of the Digital Learning Design and Management*. Chiayi, Taiwan. In Chinese.
7. Chen, C. H., Shen, C. H., & Yang, J. C. (2005, June). Design of 3D Simulation Learning Environment for Planetary Phenomena. In *Proceedings of the 9th Annual Global Chinese Conference on Computers in Education (GCCCE 2005)*. Hawaii, USA. In Chinese.
8. Huang, C. F., Yang, J. C., & Chen, C. H. (2005, June). Development of a Web-based Official-document Writing Environment - A Case Study of Postal Organizational Learning. In *Proceedings of the 9th Annual Global Chinese Conference on Computers in Education (GCCCE 2005)*. Hawaii, USA. In Chinese.
9. Yang, J. C., & Chiu, Y. T. (2005, May). Squeak for Supporting Science Learning in Elementary School. TWELF Workshop 2005. Taipei, Taiwan. 107-114. In Chinese.
10. Chu, Y. M., Yang, J. C., & Lai, C. H., (2005, May). Development of an English Learning Passport System for Elementary School Using Speech Technologies. *Digital Learning Conference*. Pingtung, Taiwan. In Chinese.

Technical reports：

11. Yang, J. C. (2005, April). Adoption-Based Design of Content Examples. In Chinese.

■ Kim Bumsu 金 範洙（東京学芸大学・博士〈学校教育学—社会系教育（歴史）〉：茨城キリスト教大学非常勤講師：2005年度奨学生）

投稿論文：

1. 大韓帝国末期渡日韓国留学生の現実認識—留学生団体機関誌の論説にみる文明観・国家観—、『学校教育学研究論集』第13号、125～142頁。東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2006年3月

2. 「武断統治」期の朝鮮総督府留学生監督と渡日朝鮮留学生に関する一考察、『日本研究』第27号、49～64頁。韓国外国語大学校日本研究所、2006年3月

研究発表：

1. 近代在日朝鮮留学生監督体制に関する歴史的考察—留学生運動との関連を中心に—、「韓国日本学会」、於韓国南ソウル大学、2005年7月

■ Kim Hyeon Wook 金賢旭（東京大学・博士〈総合文化—表象文化〉：仁荷大学非常勤講師（在ソウル）：2003年度奨学生）

1. 「翁信仰と渡来文化」、『国文学』50巻7号、2005年7月

2. 「修羅能と『平家物語』」、『世界民俗舞踊研究所』8号、2005年8月

3. 「秦氏と八幡信仰—中世の翁神信仰をめぐって」、『日語日文学研究』54輯2巻、2005年8月

4. 「住吉明神と金春禅竹の『明宿集』」、『ZEAMI』3号、2005年10月

5. 「中世の芸能とシャーマニズム」、『世界民俗舞踊研究所』9号、2006年2月

■ Kim Woesook 金外淑（早稲田大学・博士〈健康科学〉：兵庫県立大学看護学部心理学系助教授（在神戸）：1997年度奨学生）

著書：

1. 金外淑、「認知行動療法を導入した糖尿病患者への心理的援助」、久保（編著）『糖尿病患者への心理的援助』医歯薬出版2006（印刷中）

2. 坂野雄二（著）、金外淑（訳）、「認知行動療法」、韓国：HANA医学出版社、（坂野雄二 1995 認知行動療法 日本評論社）、2005

学術論文：

1. 金外淑、「慢性疼痛に対する認知療法」、『ストレスと臨床』24(1),38-41、2005

2. 金外淑、村上正人、松野俊夫、「気分変動を伴う強迫性障害患者への認知行動的介入」、『心身医学』45(1),225-231、2006

3. 金外淑、村上正人、松野俊夫、「全般性不安障害患者への認知行動的介入」『行動療法』31(1)、2006（印刷中）

4. Kim, WS., Murakami, M., Matsuno, T. "A case study in the application of cognitive-behavioral therapy to the patient with dysthymia and obsessive-compulsive disorder" Journal of psychosomatic research, 58(6 Suppl.), S93 - S94. 2005

研究論文：

1. 金外淑、「行動決定の認知・行動論 - 患者はなぜそのような行動をするのか - 」、『糖尿病診療マスター』3(1),31 - 37. 2005

2. 佐々木和義、伊達ちぐさ、金外淑、鈴木伸一、春木敏、竹政順三郎、澤田隆、「子どもから始める健康づくり実践プログラム」、2005

研究発表：

1. 金外淑、川又幸子、村上正人、「うつ状態を伴う血糖コントロール不良患者への認知行動的介入の一例」、第13回関西行動医学会、2005年1月、神戸

2. 金外淑、村上正人、松野俊夫、「不安障害患者への認知行動的介入の一例」、2004年度日本行動療法コロキウム、2005年3月、札幌

3. 金外淑、村上正人、松野俊夫、「全般性不安障害患者への認知行動的介入」、第46回日本心身医学会総会、2005年5月、奈良

4. 金外淑、村上正人、松野俊夫、「A case study in the application of cognitive-behavioral therapy to the patient with dysthymia and obsessive-compulsive disorder.」18th. World Congress on Psychosomatic Medicine、2005年7月、神戸

5. 小笠原幹子、岩永望、古段佐規子、福長まり、大西富子、鶴林泉、橋本加代、木村悦子、菅原正、佐々木和義、金外淑、鈴木伸一、春木敏、竹政順三郎、澤田隆、「こどもの健康行動の形成を目指した『健康づくり実践プログラム』作成の試み」、第64回日本公衆衛生学会総会、2005年9月、札幌

6. 金外淑、金山文子、土江孝子、長澤君子、湯川悦子、権田龍子、成田康子、「ガン専門病院における新人看護職への職場適応を支援するための心理教育的プログラムの試み」、第18回日本健康心理学会、2005年9月、神戸

7. 金外淑、村上正人、松野俊夫、「虚血性心疾患を合併した2型糖尿病患者に生じた不安・うつ状態への心理的介入」、第31回日本行動療法学会、2005年10月、広島

■ Kim Yeonkyeong 金 娟鏡 (東京学芸大学<心理学> : 2005 年度奨学生)

著書 :

1. 金 娟鏡、2005 アジア映画をアジアの人々と愉しむー円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界ー 山本登志哉・伊藤哲司 (編著) 「Shall We ダンス？」 閉塞した日常に潤いの映画 Pp.32-35, p.47 「友へ チング」 この映画の背景 Pp.60-61、韓国人のウジョンを描いた映画 Pp.95-97, p.99、北大路書房

論文 :

1. 塘 利枝子、高 向山、金 娟鏡、2006 日本・韓国・中国・台湾の養育行動ー子育てに関する労力と責任の世代間比較の観点からー、同志社女子大学社会システム学会現代社会フォーラム第 2 号 Pp.68-82

学会発表 :

1. 塘 利枝子、高 向山、金 娟鏡、玄 正煥、現代におけるアジアの子育て観 1ー日本・韓国・中国・台湾の子育て時間と養育責任者の観点からー、日本保育学会第 58 回大会発表論文集、Pp.916-917
2. 塘 利枝子、金 娟鏡、高 向山、現代における東アジアの親子関係 1ー「親役割観」に関する日本・韓国・中国・台湾の比較ー、日本心理学会第 69 回大会発表論文集、p.171
3. 金 娟鏡、塘 利枝子、高 向山、現代における東アジアの親子関係 2ー「祖父母の育児への関わり」に関する日本・韓国・中国・台湾の比較ー、日本心理学会第 69 回大会発表論文集、p.172
4. 塘 利枝子、高 向山、金 娟鏡、現代における東アジアの親子関係 3ー「親役割観」に関する通文化・通時的比較ー、日本発達心理学会第 17 回大会発表論文集、p.394
5. 高 向山、塘 利枝子、金 娟鏡、現代における東アジアの親子関係 4ー親から受けた子育てとの関係ー、日本発達心理学会第 17 回大会発表論文集、p.395

その他 :

1. 金 娟鏡、国際比較研究の裏話 : インサイダーとアウトサイダーの狭間で、日本パーソナリティ心理学会ニューズレター No.21, p.4 (2005 年 10 月 31 日)
2. 金 娟鏡、海外リポートー韓国における保育政策の動向ー、日本保育学会会報 第 134 号、p.8 (2006 年 1 月 5 日)

■ Ko Hee Tak 高 熙卓 (東京大学・博士<総合文化> : グローカル文化研究所首席研究員 (在ソウル) : 2000 年度奨学生)

1. 「丁茶山と伊藤仁斎」(『民族文化論叢』第 31 輯、嶺南大学民族文化研究所、2005 年 6 月)
2. 「高橋亨の朝鮮思想史論における両面性」(『今日の東洋思想』第 13 号、2005 年 9 月)

■ Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ (東京都立科学技術大学・博士<工学システム> : 松下電器産業株式会社本社 R&D 部門主任技師 (在大阪) : 2001 年度奨学生)

1. V. Kostov, T. Tajima, E. Naito, J. Ozawa, "Analysis of Appropriate Timing for Information Notification Based on Indoor User's Location Transition", IEEE PerCom 2006, IEEE International Conference on Pervasive Computing and Communications, pp. 245-250, Mar. 2006, Pisa, Italy.
2. V. Kostov, J. Ozawa, E. Naito, "Platform for Timely Portable-Push Information Delivery", IEEE CCNC 2006, IEEE Consumer Communications and Networking Conference, pp. 74-79, Jan. 2006, Las Vegas, USA.
3. V. Kostov, J. Ozawa, M. Yoshioka, T. Kudoh, "Travel Destination Prediction Using Frequent Crossing Pattern from Driving History", IEEE ITSC 2005, 8th International IEEE Conference on Intelligent Transportation Systems, pp. 343 - 350, Sep. 2005, Vienna, Austria.

■ Kwak Jiwoong 郭 智雄 (立教大学・博士<経営学> : 九州産業大学商学部商学科専任講師 (在福岡) : 2003 年度奨学生)

1. 『チャイナ・シフトの人的資源管理』(共著)、白桃書房、2005 年 8 月、分担項目 : 第 2 章 韓国から中国への直接投資と企業活動の特徴、pp.28-41、白木三秀、熊迫真一、郭 智雄、齊藤陽子、尹 春華、于 洋、徐 向東、太田仁志、許 海珠、梅澤 隆

■ Lan Hung Yueh 藍 弘岳 (東京大学<地域文化研究> : 2005 年度奨学生)

1. 藍 弘岳「荻生徂徠と顧炎武——対「心性儒学」的批判与「礼制儒学」的建構」『民族文化論叢』31 号、2005 年 6 月韓国嶺南大学校「古学」に関する国際会議
2. 藍 弘岳「荻生徂徠の中国史観」2005 年 11 月台湾、国際青年学者漢学会議

■ Lee Jea Woo 李 濟宇（早稲田大学・博士<建設工学>：鹿島建設（株）技術研究所研究員：2004 年度奨学生）

1. Jeawoo LEE and Masanori HAMADA, "Experimental Approach for Behavior of Buried Pipe subject to Thrust Fault Movement," Proceedings of 8th US National Conference on Earthquake Engineering, EERI, Paper No. 1044, 2006 年 4 月
2. Katsyhiro UEMOTO, Teru YOSHIDA and Jeawoo LEE, "Experimental Estimation of Adfreeze Shear Reinforcement at Joint between Frozen Soil and Underground Structures," Proceedings of Geotechnical Symposium in Rome 2006, Japanese Geotechnical Society., 2006 年 2 月
3. 貝原洋介、李 濟宇、鈴木和仁、樋口俊一、濱田正則、"縦ずれ断層変位を受ける埋設管の挙動に関する実験的研究," 第 60 回土木学会年次講演会論文集、土木学会、2005 年 9 月

■ Li Enmin 李 恩民（一橋大学・博士<社会学>：桜美林大学国際学部助教授：1997 年度奨学生）

学術論文：

1. 李 恩民「從經濟戰到石油外交：1970 年代日本对中国大陸の石油貿易」 単著、2005 年 5 月、国立台湾大学政治学系『中国大陸研究教学通訊』第 69 期 pp.1 ~ 9

報告書：

2. 李 恩民著『戦後中日関係中的的外交与政治』、上海師範大学歴史学 Postdoctoral Fellowship 報告書 1 ~ 343 頁、2005 年 7 月

■ Li Gangzhe 李 鋼哲（立教大学<経済学>：総合研究開発機構（NIRA）主任研究員 / 黒龍江大学教授：1999 年度奨学生）

著書：

1. 『北東アジア・グランドデザイナー共同発展に向けた機能的アプローチ』（共著）2005.11、NIRA 研究報告書（第 1 部第 3 章、pp.32-54）.
2. Regional Financial Cooperation of Northeast Asia in Era 21st : Challenge to Establish a NEADB—Theory and Reality , Edit By Gang-Zhe LI and Li GUO, China Academy for Social Science Press. Beijing, China. Feb., 2006.

論文：

3. "The Development Financial System in the World & New Development Bank Approach in Northeast Asia" , Proceeding of The Third Jeju Peace Forum, commentator paper, Jeju province, ROK, June 10-11, 2005. (English).
4. "The Paradigm Changing of Regional Approach in Northeast Asia and Role of Japan" , 韓国土地公社編『統一と国土』Journal of Land & Unification of ROK. June, 2005. (English)
5. 「21 世紀の東北アジア地域統合におけるパラダイムのシフト：『協力論』と『統合論』の重層的アプローチ」2005.7、環日本海学会『環日本海研究』第 10 号
6. 「21 世紀東北亜経済統合と日中韓の役割」2005.8、中国世界经济学会『「中国经济の趨勢分析と東北アジア経済協力シンポジウム」論文集』（中国・延吉）
7. 「第三の目で見た東北アジアと日本：いったい何が起きているのか」2005.12、『NIRA 政策研究』Vo.19.No.12.
8. 「観光ビックバン時代の到来と東北アジア観光回廊の形成」（共著）2006. 3、『NIRA 政策研究』Vo.20 No.3.

新聞・雑誌投稿：

9. 「東北アジア共同体に夢を抱く「東北アジア人」：私のアイデンティティ」2005.4-7、連載「東北アジア人が語るストーリー」①②③④『セヌリ』（月刊誌、東京）
10. 「図們江地域投資サービス（TRIS）ネットワーク国際会議」、環日本海経済研究所『ERINA REPORT』2005.、Vol.63(5 月号)
11. 「第 3 の目：〈寒流〉が襲いかかる東北アジアと日本」2005.7、SGRA かわらばんレポート『あなたは反日についてどう思いますか』
12. 「東北アジア時代に中国朝鮮族は選ばれるのか」2005.8.17、中国『黒龍江新聞』記事（朝鮮語）
13. 「中韓交流『日流』加わってこそ新時代」2005.11.13、『朝日新聞』コラム
14. 「第 3 回済州平和フォーラム—東北アジア共同体の建設：平和と繁栄に向けて」2005.12、『INAS REPORT』Vol.17
15. 「朝中接近で進め、北朝鮮の改革・解放」2006.3.24、『東洋経済日報』（座談会特集、共著）

■ Liang Xingguo 梁 興国（東京大学・博士<化学生命工学>：名古屋大学物質制御工学専攻助手：2001 年度奨学生）

1. Liang, XG, Jensen K, and Frank-Kamenetskii MD. Acceleration of De Novo DNA Synthesis by Restriction Enzymes. J. Biomol. Structue and Dynamics. 22(6) 766-767 (2005). 14th Conversation on Biomolecular Structure and Dynamics, Albany,

USA (2005).

2. Liang XG, Kuhn H, and Frank-Kamenetskii MD. Monitoring single-stranded DNA secondary structure formation by determining the topological state of DNA catenanes. *Biophys. J.* 90, 2877-2889 (2006)

■ Lin Shaoyang 林 少陽 (東京大学<総合文化—言語情報科学>：東京大学大学院総合文化研究科教養学部特任助教授：2003年度奨学生)

1. 「反諷」(irony) 共著：趙一凡、張中載、李德恩編『西方文論關鍵詞』北京：外語教学與研究出版社、2006年1月、pp. 90 - 102.

2. 「書写」(writing/écriture)、共著：趙一凡、張中載、李德恩編『西方文論關鍵詞』北京：外語教学與研究出版社、2006年1月、pp. 529 - 536

3. 「日本七十年代以降の修辞批評の文脈と思想史的意味——哲学者中村雄二郎と文学者前田愛を中心に」、2005年10月、『日本思想史研究』第5号、東京大学日本思想史・思想史論研究会 pp.122 - 136

4. 「<興(きょう)>=<象徴>か?——二元論的「象徴」批判としての「言—象—意」構造について」、2005年7月、『言語・情報・テキスト』12巻(2005年6月)、東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻紀要、115 - 142頁

5. 「漢語新詩史的「第X代」與文学史的叙述」、陳炳良・梁秉鈞・陳智智德編『現代漢詩論集』、香港：嶺南大学人文科学研究中心出版、2005年6月、6 - 17頁

6. 「夏目漱石『文学論』—「文」の「学」を論ず」、『現代思想』第33巻7号(臨時創刊号「ブックガイド・日本思想」)、2005年6月15日、東京：青土社、108 - 111頁

■ Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ (東京医科歯科大学・博士<公衆衛生学>：理化学研究所遺伝子多型研究センター研究員：2001年度奨学生)

Original Articles (International Journal) :

1. Htay Lwin, Tetsuji Yokoyama, Nobuo Yoshiike, Kyoko Saito, Akio Yamamoto, Chigusa Date, Heizo Tanaka. Polymorphism of Methylenetetrahydrofolate Reductase Gene (C677T MTHFR) is Not a Confounding Factor of the Relationship Between Serum Uric acid Level and the Prevalence of Hypertension in Japanese Men. *Circulation Journal* 2006 Jan;70:83-87

2. Htay Lwin, Nobuo Yoshiike, Tetsuji Yokoyama, Kyoko Saito, Chigusa Date, Heizo Tanaka. The relationship between plasma total homocysteine and selected atherosclerotic risk factors according to the C677T methylenetetrahydrofolate reductase gene in Japanese.

European Journal of Cardiovascular Prevention and Rehabilitation 2005 Apr;12(2):182-4.

3. Kamei Y, Lwin H, Saito K, Yokoyama T, Yoshiike N, Ezaki O, Tanaka H. The 2.3 Genotype of ESRR23 of the ERR{alpha} Gene Is Associated with a Higher BMI Than the 2.2 Genotype. *Obes Res.* 2005 Oct;13(10):1843-4.

4. Nobuo Yoshiike, Htay Lwin. Epidemiological aspects of obesity and NASH/NAFLD in Japan. *Hepatology Research* 2005 Oct 11; [Epub ahead of print].

5. Tetsuji Yokoyama, Kyoko Saito, Htay Lwin, Nobuo Yoshiike, Akio Yamamoto, Yumi Matsushita, Chigusa Date, Heizo Tanaka. Epidemiological Evidence that Acetaldehyde Plays a Significant Role in the Development of Decreased Serum Folate Concentration and Elevated Mean Corpuscular Volume in Alcohol Drinkers. *Alcoholism: Clinical and Experimental Research* 2005 Apr;29(4):622-30.

ABSTRACTS :

1. Htay Lwin, Tetsuji Yokoyama, Nobuo Yoshiike, Kyoko Saito, Chigusa Date, Heizo Tanaka. The relationship of Methionine Synthase gene with homocysteine level and lifestyle related factors in Japanese. XVII IEA World Congress of Epidemiology, August 20-24, 2005, Bangkok, Thailand..

2. Kyoko Saito, Tetsuji Yokoyama, Htay Lwin, Nobuo Yoshiike, Heizo Tanaka. The relationships of alcohol drinking with mean corpuscular volume and serum folate and vitamin B12 concentrations in different aldehyde dehydrogenase-2 genotypes. XVII IEA World Congress of Epidemiology, August 20-24, 2005, Bangkok, Thailand.

■ Mailisa マイリーサ (一橋大学・博士<社会学>：立教大学非常勤講師：1998年度奨学生)

論文：

1. 「生態移民による貧困のメカニズム」、小長谷有紀等編『中国の環境政策 生態移民』、昭和堂、2005年

2. 「生態移民貧困化機制」、新吉楽図主編『中国環境政策報告 生態移民』、内蒙古大学出版社、2005年

学会発表：

1. "The use and Change of Natural Resources in the Middle Reach of Heihe River" 3rd International Workshop of the Oasis Project
(October 18-20, 2005 Kyoto Japan)
2. 生態移民による貧困のメカニズム「生態移民政策についての中日共同国際シンポジウム」、2005年9月、中国社会科学院、北京

■ Mandah, Ariunsaihan マンダフ、アリウンサイハン（一橋大学・博士<地域社会学>：一橋大学客員研究員（日本学術振興会特別研究員：2002年度奨学生）

1. 「満州里会議に関する一考察」、『一橋論叢』、2005年8月、第134巻 第2号
2. 「ノモンハン事件発生原因と「国境線不明」論」、『一橋論叢』、2006年2月、第135巻 第2号

■ Meng Zinmin 孟子敏（筑波大学・博士<言語学>：松山大学人文学部教授：2004年度奨学生）

著書：

1. 明清漢語を中心としての通時的研究—《金瓶梅詞話》和近代漢語的嬗変 方経民、孟子敏、増野 仁、松山大学総合研究所報第46号、2005年10月

論文：

1. 近代漢語句末語気助詞“也”的意義及其演變、語言教学与研究、第3期、2005年5月
2. 從“什麼”、“甚麼”的使用看《金瓶梅詞話》的著録者、中国文化研究、2005年夏之卷、2005年5月
3. 明清期白話作品における「奴」についての考察 孟子敏、増野 仁、言語文化研究、第25巻第1号、松山大学、2005年9月

■ Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャンナ（東京大学・博士<宗教学宗教学史>：名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授：2002年度奨学生）

1. 著書『日本の社会参加仏教——法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理——』東信堂、2005年5月、全468頁

■ Naiwala Pathirannehelage, Chandrasiri ナイワラ・パティランネヘラーゲ、チャンドラシリ（東京大学・博士（電子情報）：日本大学特別研究員（日本学術振興会特別研究員）／東京大学客員研究員：2000年度奨学生）

1. N. P. Chandrasiri, T. Naemura and H. Harashima, "System for 第10回日本顔学会大会、(2005.9).
2. 中洲 俊信, N. P. Chandrasiri, 苗村 健, 原島 博, "対話型似顔絵作成システム NIGAO ~髪モデルの検討~", 第10回日本顔学会大会 (2005.9).
3. 松岡 薫, N. P. Chandrasiri, 苗村 健, 原島 博, "主成分分析を用いた顔画像処理プラットフォーム FaceComposer における顔空間視覚化機能", 第10回日本顔学会大会、(2005.9).
4. Naiwala P. Chandrasiri, Takeshi Naemura, Hiroshi Harashima, "Analysis of Facial Expression Responses based on Face Image Synthesis and Analysis in Real-time," Proc.(CD-ROM) Enactive 2005, Paper no.27 (6 pages), Genoa, Italy, (2005.11).
5. Toshiaki Nakasu, Naiwala P. Chandrasiri, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima: "NIGAO: Interactive Facial Caricature Drawing System using Genetic Algorithm," ACM SIGGRAPH2005 Posters, no. 33 (2005.8)

■ Napoleon ナポレオン（東京工業大学<機械制御システム>：株式会社ヤマタケ研究所研究員：2004年度奨学生）

1. Napoleon Nazir, Hiroki Izu, Shigeki Nakaura, Mitsuji Sampei: "An Analysis of ZMP Control Problem of Humanoid Robot considering Compliances in Sole of the Foot", 16th IFAC World Congress, Praha, July 2005.

■ Pantcheva Elena Latchezarova パンチェワ、エレナ（千葉大学<日本研究>：2006年度奨学生）

1. 「日本語の擬声語・擬態語における形態と意味の相関についての研究（一口蓋化された子音の分布について）：『語彙と文法の相関（一比較・対照研究の視点から）』社会文化科学研究科研究プロジェクト報告、第123集、79頁～101頁、2005

■ Park Young June 朴 榮濬（東京大学・博士<国際関係論>：韓国国防大学校安全保障大学院助教授（在ソウル）：2002年度奨学生）

1. 「脱冷戦期の日中間勢力競争と東アジア秩序」、金栄作編『21世紀東北アジア 共同体形成の課題と展望』（ハヌルアカデメイ、

2006)

2. 「2020 の日中安保関係と 東北アジア秩序」、『韓国の国家戦略 2020』(世宗研究所, 2005)
3. 「人間, 国家, 国際体制、そして日本の近代戦争」『国際政治論叢』45 — 4(2005 年冬)
4. 「戦前日本自由主義者の国家構想と東アジア: 石橋湛山の場合」『韓国政治学会報』39 — 2(2005 夏)
5. 「日本の新防衛計画大綱と中期防衛力整備計画」『軍事論壇』第 42 号 (韓国軍事学会, 2005 年夏)

■ Piao Zhenji 朴 貞姫 (明海大学・博士<応用言語学>: 北京語言大学外語学院日語教研室副教授 (在北京): 2003 年度奨学生)

1. 「韓日中空間標識の時間表現」、共著、『中国語教育と研究』創刊韓国外国語大学、2005.8
2. 『日朝中 3 言語の仕組み—空間表現の対照研究』、単著、日本振学出版、2005.8

■ Ren Yong 任 永 (群馬大学・博士<医学>: ニューヨーク州立大学医学部研究員: 2000 年度奨学生)

1. Title: Parkin Stabilizes Microtubules through Strong Binding Mediated by Three Independent Domains Authors: Fang Yang , Qian Jiang , Jinghui Zhao , Yong Ren , Mark D. Sutton , and Jian Feng Institutes name: Department of Physiology and Biophysics and the Department of Biochemistry, State University of New York at Buffalo, Buffalo, New York 14214 Journal name: The Journal of Biological Chemistry, Vol. 280, Issue 17, 17154-17162, April 29, 2005.
2. Title: Selective vulnerability of dopaminergic neurons to microtubule depolymerization Authors: Ren Yong, Liu Wenhua, Jiang Qian, Feng Jian Institutes name: Department of Physiology and Biophysics, State University of New York at Buffalo, Buffalo, New York 14214 Journal name: The Journal of Biological Chemistry, Vol. 280, Issue 40, 34105-34112, Oct. 7, 2005.

■ Shi Jianming 施 建明 (筑波大学・博士<数理工学・社会工学>: 室蘭工業大学情報工学科助教授 (在室蘭): 1995 年度奨学生)

1. (Chapter in Book) Generalized convexity, generalized monotonicity and applications, Springer, New York, 2005
2. Conical Partition Algorithm for Maximizing the Sum of DC Ratios, Journal of Global Optimization, (31) 253-270, 2005
3. Prediction of MHC class II binders using the ant colony search strategy, Artificial Intelligence in Medicine, (35) 147-156, 2005

■ Sim Choon Kiat 沈 俊傑 (東京大学<教育学>: 2006 年度奨学生)

1. 「高校教育における日本とシンガポールのメリトクラシー～選抜度の低い学校に着目して～」日本教育社会学会『教育社会学研究』第 76 集、169 ~ 186 頁、2005 年 5 月

■ Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ (東京大学<宗教学史>: 富坂キリスト教センター研究主事: 2004 年度奨学生)

1. "The structural limitations of religious education in Japan," in Bulletin for the Council of Societies for the Study of Religion Vol. 34 No. 4 (November, 2005 年)、66 ~ 69 頁
2. "Christian education at Aishin," in The Japan Mission Journal (Fall, 2005 年)、172 ~ 190 頁
3. "Christian education in the sign of the covenant — The case of Aishin High School in western Japan," in Japanese Religions Vol. 30 Nos. 1 & 2 (July, 2005 年)、69 ~ 97 頁
4. 「キリスト再臨運動 — 近代日本における合理性と救済をめぐる言説」、『内村鑑三研究』、第三十八号 (2005 年)、58 ~ 64 頁

■ Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ・スマンティヨ、ヨサファット・テトオコ (千葉大学・博士<人工システム科学>: 千葉大学環境リモートセンシング研究センター助教授: 2001 年度奨学生)

原著論文:

1. J. Tetuko S.S., K. Ito, and M. Takahashi, "Dual band circularly polarized equilateral triangular patch array antenna for mobile satellite communications," IEEE Transaction on Antennas and Propagation, Vol. 53, Issue 11, pp. 3477 - 3485, November 2005 (New Jersey: IEEE)
2. T. Tanaka, J. Tetuko S.S., D. Ishide, K. Kaneko, M. Takahashi, and K. Ito, "Pseudo satellite communications experiments using a simple satellite tracking dual-band triangular-patch array antenna," Journal of The Communication Society - The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers, Vol. J88-B, No.9, pp.1760-1771, September 2005 (Tokyo: IEICE)
3. J. Tetuko S.S., K. Ito, A. Miura and S. Yamamoto, "Antenna system for next generation mobile satellite communications (Dual

band microstrip array antenna)," Journal of Japan Society of Photogrammetry and Remote Sensing, Vol. 44, No.4, pp.46-51, September 2005 (Tokyo: JSPRS)

4. R. Budiman, K. Wikantika and J. Tetuko S.S., "Burnt coal seam thickness monitoring using JERS-1 SAR," Indonesian Journal of Remote Sensing, Vol. 2, No.1, pp.37-46, August 2005 (Jakarta: IJRS)
5. J. Tetuko S.S., K. Ito, D. Delaune, T. Tanaka, T. Onishi, and H. Yoshimura, "Numerical analysis of ground plane size effects on patch array antenna characteristics for mobile satellite communications," International Journal of Numerical Modelling, Vol. 18, No. 2, pp. 95-106, March /April 2005 (London: Wiley)
6. J. Tetuko S.S. and R. Tateishi, "A technique to analyse scattered waves from rough burnt coal seam and its application to estimate thickness of fire scars in central Borneo using L-Band SAR data," Journal of Japan Society of Photogrammetry and Remote Sensing, Vol. 43, No. 6, pp. 48-61, January 2005 (Tokyo: JSPRS)

特許：

1. Antennas for Communications, Japan patent No. 2006-023701, 31 January 2006

学会論文発表・Proceedings：

1. J. Tetuko S.S., "Microwave Remote Sensing and Mobile Satellite Communications," Proceedings of Symposium on Indonesian Environmental Monitoring 2005 (SIEM2005), pp. 29, 20 August 2005.
2. J. Tetuko S.S., "Former Japanese Army's maps and satellite data for earth surface monitoring and activating Asian industries," Open Research Chiba University, 23 September 2005.
3. J. Tetuko S.S., I. Indreswari, and R. Tateishi, "Former Japanese Army's maps and satellite data for Asian cities monitoring," The 11th CEReS International Symposium on Remote Sensing, 13 December 2005.
4. J. Tetuko S.S. and R. Tateishi, "Geological information retrieving using Synthetic Aperture Radar: Krakatau volcanoes complex, Indonesia," The 11th CEReS International Symposium on Remote Sensing, 13 December 2005.
5. T. Tanaka, J. Tetuko S.S., D. Ishide, K. Kaneko, M. Takahashi, K. Ito, S. Yamamoto, A. Miura, "Experiments on simulated mobile satellite communications aiming at ETS-VIII application using triangular-patch array antenna," Technical Report of IEICE, The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers (IEICE) - Antenna Propagations (AP) (Tokyo: IEICE).
6. K. Kaneko, J. Tetuko S.S., K. Ito, and T. Tanaka, "Satellite-tracking dual-band patch array antenna" The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers (IEICE) (Osaka:IEICE)
7. T. Tanaka, J. Tetuko S.S., K. Kaneko, D. Ishide, M. Takahashi, K. Ito, S. Yamamoto, A. Miura, "Pseudo satellite experiments of a simple satellite tracking dual-band triangular patch array antenna," The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers (IEICE) (Osaka:IEICE)
8. T. Tanaka, J. Tetuko S.S., K. Kaneko, D. Ishide, M. Takahashi, K. Ito, S. Yamamoto, A. Miura, "Mobile satellite communication experiments on dual-band triangular-patch array antenna," IEEE Symposium on Antenna and Propagation 2005 (APS) (Washington:IEEE)
9. D. Delaune, J. Tetuko S.S., and K. Ito, "Circularly polarized triangular microstripline antenna with a gap for mobile satellite communications," International Symposium on Antenna and Propagation 2005 (ISAP 2005), WB2-5, pp. 113-116 (Seoul : KEES)
10. D. Delaune, J. Tetuko S.S., M. Takahashi, and K. Ito, "Triangular microstrip line array antenna," 2005 IEICE Conference, Hokkaido, B-1-67, p. 67, 25 September 2005.
11. Basari, J. Tetuko S.S., M. Takahashi, and K. Ito, "Proximity fed circularly polarized triangular microstrip antenna with a truncated tip," 2005 IEICE Conference, Hokkaido, B-1-69, p. 69, 25 September 2005.
12. J. Tetuko S.S. and K. Ito, "Antennas for next generation mobile satellite communications," Open Research Chiba University, Chiba University, 23 September 2005
13. J. Tetuko S.S. and K. Ito, "Antennas for next generation mobile satellite communications," Innovation Japan, Tokyo International Forum, 27-29 September 2005
14. J. Tetuko S.S. K. Ito, and Masaharu Takahashi, "Dual band Circularly Polarized Equilateral Triangular-Patch Array Antenna for Mobile Satellite Communications," International Workshop on Antenna Technology 2006 (IWAT2006), New York, 6-8 March 2006.
15. D. Delaune, J. Tetuko S.S., M. Takahashi, and K. Ito, "Design of parasitic loaded circularly polarized triangular microstrip line antenna," 2006 IEICE Conference, AP2005-141, pp 49-52, January 2006.

■ Sun Junyue 孫 軍悦 (東京大学<言語情報科学> : 2006 年度奨学生)

1. 「罪と懺悔—夏目漱石『こゝろ』の受容と文化大革命直後の中国文学—」、『言語情報科学』第 3 号、東京大学総合文化研究科、2005.4
2. 「翻訳研究理論に関する一考察—中国語訳『ノルウェーの森』の分析を通して—」、『言語情報科学』第 4 号、東京大学総合文化研究科、2006.3

■ Tenegra Brenda Resurecion Tiu テネグラ, ブレンダ レスレション ティウ (お茶の水女子大学<人間発達科学> : お茶の水女子大学 21 世紀 C O E プログラム研究員 : 2005 年度奨学生)

学会・国際会議発表 :

1. "Enfranchisement and the Politics of Belonging: The Case of Filipinas in Tokyo." Presented at the Women's World 2005: 9th International Interdisciplinary Congress on Women, Ehwa Womans University, Seoul, June 19-24, 2005.
2. "The Community Dimension and Social Aspects of "Katas ng Japan": Stories from Filipina Domestic Workers in Tokyo." Presented at SEASREP 10th Anniversary Conference "Southeast Asia, A Global Crossroads," Chiang Mai, Thailand, December 8-9, 2005.

論文 :

3. Tenegra, Brenda Resurecion, 2006, "Remittance as an Aspect of 'Social Fulfillment' : Stories from Filipina Domestic Workers in Tokyo," in SEASREP Reader on Southeast Asian Studies, Quezon City: SEASREP Publications. *Forthcoming.

■ Tisi, Maria Elena ティシ, マリア エレナ (白百合女子大学<児童文学> : 白百合大学児童文化研究センター研究員 : 2003 年度奨学生)

1. "I classici della letteratura infantile: le fiabe di Ogawa Mimei" Atti del XXVIII Convegno di Studi sul Giappone (Aistugia) Milano 16-18 settembre 2004 (「日本児童文学古典—小川未明の童話」伊日研究学会 第 28 回研究会、於ミラーノ、2004 年 9 月 16 日~ 18 日) Cartotecnica Veneziana Editrice, Venezia, 2005, pp. 277-288
2. 「イタリアの現代児童文学めぐり—散文で書く詩人のロベルト・ピウミーニー」『白百合児童文化 X IV』、白百合女子大学児童文化学科、2005 年 6 月、pp.37-44

■ Wang Xueping 王 雪萍 (慶応義塾大学・博士<政策メディア> : 慶応大学グローバルセキュリティー研究所研究員 : 2005 年度奨学生)

1. 王 雪萍「改革・開放期中国による派遣学部留学生— 1980 年度第 1 期赴日学部留学生の追跡調査を中心に」『現代中国』79 号、2005 年 8 月、57 - 69 頁
2. 王 雪萍「中国の教科書から見る分断した日本像と日中関係」『東亜』2006 年 4 月号、72 - 81 頁
3. 李 喜所主編『留学生与中外文化』(中国天津・南開大学出版社、2005 年) 共著

■ Weerasinghe Nalin ウィーラシンハ ナリン (電気通信大学<電子工学> : 2006 年度奨学生)

論文 :

1. N. S. Weerasinghe and T. Hasimoto, "Convolutional Spreading CDMA Scheme and Comparison with the DS-CDMA with RAKE Receiver," to appear in IEEE Trans. Communications. (採録決定)
 2. N. S. Weerasinghe and T. Hasimoto, "A Coded Convolutional Spreading CDMA System with Turbo Equalization for Downlink Transmission over a Frequency Selective Fading Channel," submitted to IEEE Trans. Communications. (査読中)
 3. N. S. Weerasinghe, C. Han, and T. Hasimoto, "CS-CDMA/CP with ZCZ Codes from an M-Sequence and its Performance for Downlink Transmission over a Multipath Channel," submitted to IEICE Trans. Communications. (査読中)
 4. Dianjun Chen, Nalin. S. Weerasinghe, and Takeshi Hasimoto, "A Transmit Diversity Scheme for Convolutional Spreading CDMA Systems over MISO Multipath Rayleigh Fading Channels," submitted to IEEE Trans. Communications Letters. (査読中)
- 国際学会発表論文 :
5. N. S. Weerasinghe and Takeshi Hasimoto, "A Convolutional Spreading CDMA Scheme with Cyclic Prefix for Downlink Transmission," IEEE International Conference on Communications (ICC), Seoul, Korea, May 16-20, 2005.
 6. Nalin S. Weerasinghe and Takeshi Hasimoto, "Binary ZCZ Code from and M-sequence and Its Application to CS-CDMA/CP" , to appear in The Second International Workshop on Sequence Design and its Applications in Communications (IWSDA)

05), Simonoseki, Yamaguchi, Japan, October 10-14, 2005.

国内学会・シンポジウム発表論文：

7. Nalin S. Weerasinghe, T. Hasimoto, "A New Construction method of Binary ZCZ Code from an M-sequence and Its Application to CS-CDMA/CP," IEICE Technical Reports, vol. 105, No. 311, IT2005-56, pp. 31-36, Sep. 27, 2005.
8. D. Chen, T. Hasimoto, Nalin. S. Weerasinghe, "Space-time CDMA," IEICE Technical Reports, vol. 105, No. 424, IT2005-63, pp. 27-38, Nov. 20, 2005.
9. Nalin S. Weerasinghe, D. Chen, S. Watanabe and T. Hasimoto, "Coded CS-CDMA/CP with Iterative Decoding for Attaining Path and Antenna Diversity," Proc. of the 28th Symposium on Information Theory and Its Applications, Onna, Okinawa, Japan, Nov. 20-23, 2005.

■ Wong Kin Foon 王 健歡 (総合研究大学院大学・博士<統計科学>：統計数理研究所外来研究員：2005 年度奨学生)

1. Wong KFK, Galka A, Yamashita O, Ozaki T, John RE (2005) State Space-GARCH Modelling of Anaesthesia EEG Time Series, 2005 年度統計関連学会連合大会
2. Wong KFK, Galka A, Yamashita O, Ozaki T (2005) An application of the State Space GARCH model:a case study of modeling anesthesia EEG data, proceeding of the 5th IASC Asian Conference on Statistical Computing.

■ Yeh Wen-chang 葉 文昌 (東京工業大学・博士<電子物理工学>：台湾科技大学電子工程科助理教授：1999 年度奨学生)

1. Wen-chang Yeh (invited paper)" Remarkable enlargement of grain size in excimer-laser crystallization of Si film and fabrication of single crystalline Si array ", MRS 2006 Spring Meeting, Sanfrancisco, USA, April 2006. http://www.mrs.org/s_mrs/index.asp
2. Wenchang Yeh, Chun-Jun Zhuang, Guozhao Chen, Chil-Chyuan Kuo, Jeng-Ywan Jeng "Relations of melt duration of Si film during excimer laser annealing on lateral growth distance and crystallinity within a grain" 2th International TFT conference, Fukuoka, Japan, Jan. 2006. <http://www.cms.kyutech.ac.jp/ITC06/>
3. Wenchang Yeh,(invited paper) "Remarkable enlargement of excimer-laser induced lateral grain by photosensitive heat retaining layer" 1th International TFT conference, Soel, Korea, March 2005. <http://tftlcd.khu.ac.kr/itc/>

■ Zhang Shao-Min 張 紹敏 (東京大学・博士<医学>：エール大学医学部助教授 (在ニューヘブーン)：1997 年度奨学生)

Publication：

1. Zhang, SS., Xu, X., Li, J., Liu, MG., Zhao, H., Soares, MB., Barnstable, CJ., and Fu, XY. Comprehensive functional specification of mouse retina transcripts. BMC Genomics 2005 6:40.
2. Zhang, SS., Liu MG., Kano, R., Zhang, C., Fu, XY., and Barnstable, CJ. STAT3 activation in response to growth factors or cytokines participates in precursor proliferation of neuronal retina. Exp. Eye Res. 2005 81:103-15.
3. Tombran-Tink, J., Aparicio, S., Xu, X., Tink, AR., Lara, N., Sawant, S., Barnstable, CJ., and Zhang, SS. PEDF and the SERPINS: phylogeny, sequence conservation, and functional domains. J. Structural Biology 2005 151:130-50.

Meeting presentation：

4. Zhang, C., Li, H., Liu, MG., Barnstable, CJ., Fu, XY., and Zhang, SS. STAT3 protects ganglion cells in ischemic mouse retina. 2005 Annual ARVO Meeting, Florida, IOVS, 3092/B645, 2005
5. Xu, X., Aparicio, S., Tink, AR., Lara, N., Sawant, S., Zhang, SS., Barnstable, CJ., and Tombran-Tink, J. PEDF and the SERPINS: phylogeny, sequence conservation, and functional domains. 2005 Annual ARVO Meeting, Florida, IOVS, 3106/B659, 2005
6. Aparicio, S., Liu, MG., Sawant, S., Lara, N., Zhang, SS., Barnstable, CJ., and Tombran-Tink, J. PEDF regulates a group of six interferon-inducible genes that are highly expressed in actively dividing RPE cells via the p38MAP kinase pathway. 2005 Annual ARVO Meeting, Florida, IOVS, 3107/B660, 2005
7. Chen, L., Zhang, SS., Tombran-Tink, J., and Barnstable CJ. PEDF inhibits VEGF-induced cytoprotection of endothelial cell via inhibition of VEGF-R2/KDR phosphorylation. 2005 Annual ARVO Meeting, Florida, IOVS, 3108/B661, 2005
8. Zhang, SS., Liu, MG., Chen, L., and Barnstable CJ. Distinct functions of STAT and MAPK signals in Müller glia development. 2005 Annual ARVO Meeting, Florida, IOVS, 3153/B706, 2005
9. Liu, MG., Barnstable CJ., Fu, XY., and Zhang, SS. Protein kinase C regulates rod photoreceptor differentiation through modulating STAT3 signaling. 2005 Annual ARVO Meeting, Florida, IOVS, 3154/B707, 2005

■ Zhao Changxiang 趙 長祥 (一橋大学・博士<商学>：(在上海)：2005 年度奨学生)

1. 趙長祥「中国家電企業の成長プロセス—海爾集団 (Haier) と海信集団 (Hisense) の事例を中心に—」一橋大学大学院商学研究科博士論文、2006年3月

■ Zhu Tingyao 朱庭耀 (東京大学・博士<船舶海洋工学> : (財) 日本海事協会技術研究所首席研究員 / ハルビン工科大学客員教授 : 1996年度奨学生)

1. Tingyao Zhu, Li Xu, Sanjay Pratap Singh and TaeBum Ha: "Comprehensive Comparative Studies on 3-D Seakeeping Methods With Experimental Results Regarding A Late Post-Panamax Container Ship", the Proceeding of International Conference on Fast Sea Transportation, FAST2005, June 2005, St. Petersburg, Russia.

2. 三宅竜二、朱庭耀、飯島一博、重見利幸、熊野厚:「コンテナ運搬船の構造強度評価に用いる設計荷重」, 日本海事協会会誌、No. 270, pp. 1-13. 2005.

3. 三宅竜二、朱庭耀、熊野厚:「大型コンテナ船の波浪中縦曲げモーメントに関する研究」, 日本船舶海洋工学会講演会論文集、第1号、pp. 65-68. 2005.

4. Tingyao Zhu, and Toshiyuki Shigemi: "Design Loads for Ship Structural Strength", ClassNK Technical Bulletin, Vol. 23, pp. 51-64.

◇ 設立の趣旨について

近年の交通・通信手段の発達により、海外旅行者の数はめざましく増加し、また、世界中の出来事が即座に伝えられるようになりました。このような時代に生きる私達は、もはや国家という単位ではなく、国際社会の一員として物事をとらえていかなければならないのではないのでしょうか。しかし、現在経済大国となった日本は、国際的な活動をもっと積極的に押し進め、世界に対してより大きな役割を果たすことができるのではないかと指摘されています。

渥美国際交流奨学財団は、1993年10月14日に物故いたしました渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志により、このような状況にあります日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて設立されました。当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に対し、奨学援助をいたします。日本にやって来た留学生が、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思っております。

渥美氏は、アジア、西太平洋建設業協会国際連盟（IFAWPICA）会長、世界建設業連盟（CICA）会長、及び社団法人CISV日本協会会長を長年にわたって勤め、国際交流に尽くしてまいりました。CISV（国際こども村）とは、「世界の平和を築くためには子供の時から機会を与え、国籍・人種・言語を越えて同じ人間であることを肌で実感させることが何より大切」という理想のもとに1951年にアメリカで始められた平和運動で、毎年世界各地で子供達を集めてキャンプを行なっています。

また、渥美健夫・伊都子夫妻は、ニューヨークのコロンビア大学に日本美術史の冠講座を寄付いたしました。これによりコロンビア大学では、日本美術史の教授職が常置されることになりました。

渥美国際交流奨学財団は、渥美氏の国際交流の促進への信念を引き継ぎ、一層の発展をめざして、活動してまいりたいと思っております。若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道がひらかれてゆくことを願っております。



◇ 2005年度業務日誌

- 4月 6日 4月例会：食事会（於：結庵）
- 5月10日 5月例会：個人面談（16日まで）
- 17日 第19回SGRAフォーラム「東アジア文化再考：自由と市民社会をキーワードに」
（於：東京国際フォーラム） SGRAレポート#30
- 18日 2004年度会計監査
- 6月 6日 2004年度年報発行
- 6日 第23回理事会・評議員会（2004年度事業報告と決算報告）・親睦会（6月例会）
- 7月 1日 募集要項配布開始（関東地方の大学に通知・ホームページに掲載）
- 1日 七夕ラクーン会 in 関口（7月例会）
- 22日 軽井沢リクリエーション旅行（24日まで）
- 23日 第20回SGRAフォーラム in 軽井沢「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
（於：鹿島建設軽井沢研修センター） SGRAレポート#31
- 9月 1日 9月例会：個人面談（8日まで）
- 30日 2006年度奨学生応募締め切り（応募者総数169名）
- 10月 5日 10月例会：食事会（ベトナム料理：ミュン本郷店）
- 10日 2006年度奨学生書類審査
- 24日 渥美奨学生の集い 井上博允選考委員講演会「ロボティクスの誕生と発展」
- 26日 2006年度奨学生候補者予備面接（11月2日まで）
- 11月 4日 第5回日韓アジア未来フォーラム「東アジアにおける韓流と日流：地域協力におけるソフトパワーになりうるか」（於：ソウル市 高麗大学校仁村記念館）
- 23日 第21回SGRAフォーラム「日本は外国人をどう受け入れるべきか：留学生」
（於：東京国際フォーラム） SGRAレポート#32
- 27日 2006年度奨学生最終選考・面接
- 12月 1日 12月例会：個人面談（9日まで）
- 1月14日 新年会（1月例会）
- 2月 1日 2月例会：個人面談（7日まで）
- 10日 第22回SGRAフォーラム「戦後和解プロセスの研究」
（於：東京国際フォーラム） SGRAレポート#33
- 3月 4日 2005年度奨学生研究報告会（3月例会）
- 15日 第24回理事会・評議員会（2006年度事業計画と予算案）
- 22日 2005年度奨学生最終食事会（於：ホテルイースト21東京）

◇ 2005 年度収支決算明細書

(単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
<u>基本財産運用収入</u>		事業費	35,628,449
基本財産配当金	26,000,000	管理費	11,302,476
基本財産債券利息	10,385,000	次期繰越収支差額	63,316,271
<u>寄附金収入</u>			
寄附金	13,000,000		
<u>雑収入</u>			
運用財産受取利息	12,182		
貸与奨学金返戻収入	0		
前期繰越収支差額	60,850,014		
収入合計	110,247,196	支出合計	110,247,196

◇ 貸借対照表 (2006 年 3 月 31 日現在)

(単位：円)

資産の部		正味財産の部	
I. 流動資産		I. 基本金	
1. 現金	50,906	1. 基本財産	700,000,000
2. 普通預金	23,265,365	II. 当期収支差額	63,316,271
流動資産計	23,316,271		
II. 固定資産			
基本財産			
1. 投資有価証券	699,825,863		
2. 普通預金	174,137		
基本財産計	700,000,000		
奨学資金積立基金			
定期預金	40,000,000		
固定資産計	740,000,000		
資産合計	763,316,271	正味財産合計	763,316,271

◇財団人名簿

(2006年6月現在)

★ 理事・監事

理事長	渥美 伊都子	C I S V日本協会会長・日本ユニセフ協会理事・アジア婦人友好会副会長
常務理事	今西 淳子	C I S Vピースファンド理事・関口グローバル研究会代表
理事	渥美 直紀	鹿島建設副社長
	井内 慶次郎	日本視聴覚教育協会会長
	片岡 達治	元癌研究会癌化学療法センター主任研究員
	加美山 節	国際基督教大学評議員
	加藤 秀樹	構想日本代表・慶應義塾大学教授（総合政策）
	佐藤 直子	ナオコ・カンパニー代表
	田村 次朗	慶應義塾大学教授（法学）
	遠山 友寛	T M I 総合法律事務所パートナー（弁護士）
	永山 治	中外製薬社長
	野辺地 篤郎	聖路加国際病院顧問
	宮崎 裕子	長島・大野・常松法律事務所パートナー（弁護士）
監事	石井 茂雄	石井公認会計士事務所所長
	松岡 誠司	元日本債券信用銀行会長

★ 評議員

青木 生子	日本女子大学名誉教授（国文学）
明石 康	スリランカ平和構築及び復旧・復興担当日本政府代表
秋山 光和	東京大学名誉教授（美術史）
渥美 雅也	東京水産振興会振興部長
蟻川 芳子	日本女子大学副学長・理工学部教授（環境分析化学）
岩崎 統子	フォニックス英語研究会代表
植田 兼司	弁護士
長岡 實	東証正会員協会顧問・日本たばこ産業顧問・(財)資本市場研究会理事長
根津 公一	東武百貨店社長
堀田 健介	モルガン・スタンレー・ジャパン・リミテッド会長
水谷 弘	専修大学名誉教授
山縣 睦	山縣有朋記念館理事長・栃木産業社長
八城 政基	新生銀行代表取締役社長

★選考委員

委員長	畑村 洋太郎	東京大学名誉教授、工学院大学教授（産業機械工学）
	井上 博允	独立行政法人日本学術振興会監事（情報工学）
	片岡 達治	（理事）
	佐野 みどり	学習院大学教授（美術史学）
	田村 次朗	（理事）
	平川 均	名古屋大学教授（経済学）

★事務局

事務局長	嶋津 忠廣
事務局	谷原 正
	伊藤 扶佐江

◇奨学生名簿

1995年度奨学生

Bambling, Michele バンプリング、ミッシェル：博士（美術史）コロンビア大学〔慶応大学〕：メトロポリタン美術館研究員（在ローマ）

Gao Lingna 高 玲娜：博士（社会学）一橋大学：（在上海）

Gao Weijun 高 偉俊：博士（建設工学）早稲田大学：北九州市立大学国際環境工学部環境空間デザイン学科助教授／西安交通大学兼職教授／早稲田大学理工学部総合研究センター九州研究所客員助教授（在北九州）

Jin Xi 金 熙：博士（物理情報学）東京工業大学：日本SGI㈱

Kwack Jae-Woo 郭 在祐：博士（美術史）学習院大学：日本大学文理学部非常勤講師

Maquito, Ferdinand マキト、フェルディナンド：博士（経済学）東京大学：アジア太平洋大学（フィリピン）研究助教授

Park Chul-Ju 朴 哲主：博士（商学）慶應義塾大学：三育義明大学校流通経営学科（在ソウル）

Park Jungran 朴 貞蘭：博士（社会福祉学）日本女子大学：仁済大学社会福祉科助教授／金海市総合社会福祉館館長（在釜山）

Shi Jianming 施 建明：博士（数理工学・社会工学）筑波大学：室蘭工業大学情報工学科助教授（在室蘭）

Yao Hui 葉 会：早稲田大学（日本文学）：法政大学国際文化情報学部非常勤講師

Youn Seokhee 尹 錫姫：博士（商学）専修大学：嵩實大学／仁川大学非常勤講師（在ソウル）

阪神大震災被災特別奨学生

Chen Xiao 陳 曉：神戸大学（医学）

Horng Der-juinn 洪 徳俊：博士（経営学）神戸大学：中華民国台湾中央大学企業管理系副教授（在台北）

Wang Libin 王 立彬：神戸大学（自然科学）：㈱東洋インキ製造

1996年度奨学生

Chantachote, Viravat チャンタチャオテ、ビラバット：博士（法学）慶應義塾大学：タマサート大学法学部専任講師（在バンコク）

Gulenc, Selim Yucel ギュレチ、セリム・ユジェル：東京大学（政治学）：イスラム文化センター事務総長（在京都）

Khin Maung Htwe キン・マウン・トウエ：博士（応用物理）早稲田大学：Ocean Resource Production Co. Ltd 社長（在ヤンゴン）

Kim Woong-Hee 金 雄熙：博士（国際政治経済学）筑波大学：仁荷大学校国際通商学部助教授（在仁川）

Lee Nae-Chan 李 來賛：博士（管理工学）慶應義塾大学：漢城大学知識経済学科（在ソウル）
Nam Kijeong 南 基正：博士（国際関係論）東京大学：国民大学国際学部助教授（在ソウル）
Park Keunhong 朴 根弘：博士（生命理工学）東京工業大学
Qiao Xin 喬 辛：博士（無機材料工学）東京工業大学：ESC, Inc.（在ペンシルベニア）
Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー・マリア：博士（美術史）ハイデルベルク大学[学習院大学]：ハイデルベルグ大学哲学部美術史学科教授（在ハイデルベルグ）
Zhao Qing 趙 青：お茶の水女子大学（比較文化）：（在東京）
Zhu Tingyao 朱 庭耀：博士（船舶海洋工学）東京大学：（財）日本海事協会技術研究所首席研究員／ハルビン工科大学客員教授

1997年度奨学生

De Maio, Silvana デマイオ、シルバーナ：博士（技術史）東京工業大学：ナポリ国立大学オリエンターレ専任講師（在ナポリ）
Fang Meili 方 美麗：博士（言語学）お茶の水女子大学：（在ロンドン）
Isananto Winursito イサナント・ウィルヌシト：博士（応用科学）慶應義塾大学：インドネシア通産省皮革関連産業開発研究センター研究員（在ジョクジャカルタ）
Kim Woesook 金 外淑：博士（健康科学）早稲田大学：兵庫県立大学看護学部心理学系助教授（在神戸）
Laohaburanakit, Kanokwan Katagiri Noi ラオハブラナキット、カノックワン・カタギリ・ノイ：博士（言語学）筑波大学：チュラロンコン大学文学部日本語科助教授（在バンコク）
Lee Hyang-Chul 李 香哲：博士（経済学）一橋大学：光云大学校日本学科教授（在ソウル）
Li Enmin 李 恩民：博士（社会学）一橋大学：桜美林大学国際学部助教授
Nizamidin Jappar ニザミディン、ジャッパル：博士（応用化学）東京大学：キモト・テック（在ジョージア）
Wang Yuepeng 王 岳鵬：博士（医学）東京大学：マサチューセッツ総合病院心臓病科研究員（在ボストン）
Williams, Duncan ウィリアムス、ダンカン：博士（宗教学）ハーバード大学[上智大学]：カルフォルニア大学アーヴィン校東アジア仏教文化助教授（在米カルフォルニア）
Zhang Shao-Min 張 紹敏：博士（医学）東京大学：エール大学医学部（在ニューヘブレン）

1998年度奨学生

Adiole Emmanuel アディオレ、エマニュエル：博士（政治学）東京大学：ナイジェリア・エネルギー環境研究所研究員（在ナイジェリア）
Cao Bo 曹 波：博士（建設工学）早稲田大学：北京 NTT データ会社
He Zuyuan 何 祖源：博士（先端学際工学 / 光電子工学）東京大学：東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻特任助教授
Hu Jie 胡 潔：博士（文学）お茶の水女子大学：名古屋大学大学院国際言語文化研究科助教授（在名古屋）
Kim Jaesung 金 宰晟：東京大学（仏教学）：ピタカ研究所所長（在ソウル）
La Insook 羅 仁淑：博士（経済学）流通経済大学、早稲田大学博士課程修了：国土舘大学政経学部非常勤講師
Lee JooHo 李 周浩：博士（電子工学）東京大学：立命舘大学情報理工学部情報コミュニケーション学科助教授（在滋賀）
Mailisa マイリーサ：博士（社会学）一橋大学：立教大学非常勤講師
Sun Yanping 孫 艶萍：博士（医学）東京大学：ハーバード大学ブリッグム病院放射線科研究員（在ボストン）
Wu Hongmin 呉 弘敏：博士（精密工学）東京工業大学：フクダ電子(株)
Xu Xiaoyuan 許 曉原：博士（農学生命科学）東京大学：コロンビア大学ゲノムセンター（在ニューヨーク）

1999年度奨学生

- Coimbra, Maria Raquel Moura コインブラ、マリア・ハケウ・モウラ：博士（資源育成学）東京水産大学：ペルナンブコ州立大学生物学部遺伝子研究室助教授（在ブラジル）
- Hong Kyung-Jin 洪京珍：博士（化学工学）東京工業大学：韓国環境省環境部環境政策室化学物質安全課（在ソウル）
- Hou Yankun 侯延琨：博士（物理電子化学）東京工業大学：UBS証券会社
- Ju Yan 具延：博士（農学）筑波大学：クヴァナ・パルピング（株）
- Li Gangzhe 李鋼哲：立教大学（経済学）：総合研究開発機構（NIRA）主任研究員／黒龍江大学教授
- Mushikasinthorn, Prachya ムシカシントーン・プラチャー：博士（資源育成学）東京水産大学：カセサート大学水産学部講師（在バンコク）
- Vu Thi Minh Chi ブ・ティ・ミン・チィ：博士（教育社会学）一橋大学：人間科学研究所研究員（在ハノイ）
- Wang Dan 王旦：博士（音楽）東京芸術大学：バイオリニスト／昭光物産(株)
- Yang Jie Chi 楊接期：博士（教育工学）東京工業大学：国立中央大学資訊工程系助教授（在台湾桃園）
- Yeh Wen-chang 葉文昌：博士（電子物理工学）東京工業大学：台湾科技大学電子工程科助教授（在台北）
- Zhou Haiyan 周海燕：博士（医学）東京医科歯科大学：金沢大学医学部付属病院研修医（在金沢）

2000年度奨学生

- Jin Zhengwu 金政武：博士（物質科学）東京工業大学：東芝(株)
- Jung Jae Ho 鄭在皓：博士（物質科学）慶應義塾大学：三星電子LCD総括LCD開発室開発3Team(在韓CheonAnn)
- Jung Sung Chun 鄭成春：博士（経済学）一橋大学：対外経済政策研究院（在ソウル）
- Ko Hee Tak 高熙卓：博士（総合文化）東京大学：グローバル文化研究所首席研究員（在ソウル）
- Lim Chuan-Tiong 林泉忠：博士（国際政治学）東京大学：琉球大学法文学部助教授（在那覇）
- Molnar, Margit モルナル・マルギット：博士（経済学）慶應義塾大学：OECD研究員（在パリ）
- Naiwala Pathirannehelage, Chandrasiri ナイワラ・パティランネヘラゲ、チャンドラシリ：博士（電子情報）東京大学：日本大学特別研究員（日本学術振興会特別研究員）／東京大学客員研究員
- Ren Yong 任永：博士（医学）群馬大学：ニューヨーク州立大学医学部研究員（在バッファロー）
- Suzuki Sato, Hiromi スズキサトウ、ヒロミ：慶應義塾大学（経済学）：（在東京）
- Wu Yuping 武玉萍：博士（医学）千葉大学：大阪大学神戸ポートアイランドB.T.センター（在神戸）
- Xu Xiangdong 徐向東：博士（社会学）立教大学：キャストコンサルティング代表取締役／専修大学講師
- Zeng Zhinong 曾支農：博士（アジア文化）東京大学：(株)アジア太平洋国際交流協会社長

2001年度奨学生

- Borjigin, Burensain ボルジギン、ブレンサイン：博士（東洋史）早稲田大学：滋賀県立大学人間文化学部助教授（在彦根市）
- Fan Jianting 範建亭：博士（経済学）一橋大学：上海財経大学国際工商管理大学院助教授（在上海）
- Jeon Jin Hwan 全振煥：博士（建築材料）東京工業大学：鹿島建設(株)技術研究所主任研究員
- Jiang Huiling 蔣惠玲：博士（電子情報工学）横浜国立大学：(株)NTTドコモ無線リンク開発部アンテナ伝搬技術研究員
- Jin Xianghai 金香海：博士（政治学）中央大学：延辺大学政治学部助教授／同北東アジア国際政治研究所研究員（在延吉）
- Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ：博士（工学システム）東京都立科学技術大学：松下電器産業株式会社本社R&D部門主任技師（在大阪）
- Lee Hyun-Young 李炫瑛：博士（比較文化）お茶の水女子大学：建国大学校師範大学日本語教育科助教授（在ソウル）
- Lee Young-Suk 李英淑：博士（教育学）筑波大学：釜山大学校師範大学数学教育科非常勤講師（在釜山）

Liang Xingguo 梁 興国：博士（化学生命工学）東京大学：名古屋大学物質制御工学専攻助手（在名古屋）
 Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ：博士（公衆衛生学）東京医科歯科大学：理化学研究所遺伝子多型研究センター研究員
 Qi Jin Feng 奇 錦峰：博士（薬理学）東京医科歯科大学：広州中医薬大学中薬学院教授（在広州）
 Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ・スマンティヨ、ヨサファット・テトオコ：博士（人工システム科学）千葉大学：千葉大学環境リモートセンシング研究センター助教授

2002年度奨学生

Abliz Yimit アブリズ・イミテ：博士（人工環境システム）横浜国立大学：新疆大学化学化工学院助教授（在ウルムチ）
 Baek Insoo 白 寅秀：博士（商学）早稲田大学：大韓民国産業資源部所属産業研究院副研究委員／高麗大学非常勤講師（在ソウル）
 Chen Tzu-Ching 陳 姿菁：博士（国際日本学）お茶の水女子大学：長栄大学助教授（在台南）
 Hu Bingqun 胡 炳群：博士（システム工学）日本工業大学：日豊興業株式会社（在名古屋）
 Iko, Pramudiono イコ、プラムディオノ：博士（電子情報工学）東京大学：N T T 情報流通プラットフォーム研究所
 Jo Gyuhan 曹 奎煥：博士（地質学）早稲田大学：地球科学総合研究所地質部石油地質部門主任研究員
 Mandah, Ariunsaihan マンダフ、アリウンサイハン：博士（地域社会学）一橋大学：一橋大学客員研究員（日本学術振興会特別研究員）
 Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャナ：博士（宗教学宗教史）東京大学：名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授（在名古屋）
 Park Young-June 朴 栄濬：博士（国際関係論）東京大学：国防大学校安全保障大学院助教授（在ソウル）
 Sun Jianju 孫 建軍：博士（日本語学）国際基督教大学：北京外国語学院日本語文化学部専任講師（在北京）
 Wang Xi 王 溪：博士（電子情報工学）東京大学：イリノイ大学コンピュータサイエンス学部ポスドク研究員（在シカゴ）
 Yu Xiaofei 于 曉飛：博士（社会文化科学）千葉大学：日本大学法学部助教授

2003年度奨学生

Chae Sang Heon 蔡 相憲：博士（生物生産学）東京農工大学：天安蓮庵大学産学協力担当教授（在韓国天安）
 Chang Kuei-e 張 桂娥：東京学芸大学（学校教育学—言語文化）：東呉大学非常勤講師（在台北）
 Husel フスレ：東京外国語大学（地域文化）：昭和女子大学非常勤講師
 Kim Hyeon Wook 金 賢旭：博士（総合文化—表象文化）東京大学：仁荷大学非常勤講師（在ソウル）
 Kwak Jiwoong 郭 智雄：博士（経営学）立教大学：九州産業大学商学部商学科専任講師（在福岡）
 Lin Shaoyang 林 少陽：東京大学（総合文化—言語情報科学）：東京大学総合文化研究科教養学部特任助教授
 Lu Yuefeng 陸 躍鋒：東京海洋大学（海洋情報システム）：(株) インフォデリバ上海事務所代表（在上海）
 Piao Zhenji 朴 貞姫：博士（応用言語学）明海大学：北京語言大学外国語学院日本語学科長、助教授（在北京）
 Tisi, Maria Elena ティシ、マリア エレナ：白百合女子大学（児童文学）：白百合大学児童文化研究センター研究員
 Yamaguchi Ana Elisa ヤマグチ、アナ エリーザ：一橋大学（社会学）
 Yun Hui-suk 尹 熙淑：博士（材料学）東京大学：韓国機械研究院（K I M M）材料技術研究所（在慶南道昌原）
 Zang Li 臧 俐：博士（学校教育学—教育方法論）東京学芸大学：（在東京）

2004年度奨学生

Ampong, Beryl Nyamekye アンボン、ベリル・ニャメチェ：博士（薬理学）東京医科大学：国立精神神経センター研究員
 Chin, Angelina Yanyan チン、アンジェリーナ・ヤンヤン：博士（ジェンダー研究）カリフォルニア大学サンタクルーズ校 [

お茶の水女子大学]：ポノマ大学ポスドク講師（在米カリフォルニア）

Lee Jea Woo 李 済宇：博士（建設工学）早稲田大学：鹿島建設（株）技術研究所研究員

Lee Sung Young 李 承英：博士（応用言語学）筑波大学：慶北大学校日語日文学科非常勤講師（在大邱）

Meng Zimin 孟 子敏：博士（言語学）筑波大学：松山大学人文学部教授（在松山）

Mullagildin, Rishat ムラギルディン、リシャット：慶応義塾大学（環境デザイン）：RAUM Architects 社長

Napoleon ナポレオン：東京工業大学（機械制御システム）：株式会社ヤマタケ研究所研究員

Khomenko, Olga ホメンコ、オリガ：博士（地域文化研究）東京大学：キエフ大学非常勤講師（在キエフ）

Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ：東京大学（宗教史学）：富坂キリスト教センター研究主事

Tsai Ying-hsin 蔡 英欣：博士（法学）東京大学：（在台北）

Yang Myung Ok 梁 明玉：お茶の水女子大学（人間発達科学）

Ye Sheng 叶 盛：博士（先端学際工学）東京大学：香港中文大学医学部化学病理学研究員（在香港）

2005年度奨学生

Bao Lian Qun 包 聯群：東京大学（言語情報科学）

Han Junqiao 韓 珺巧：博士（建築学）早稲田大学：国立ローレンス・パークレー研究所（在カリフォルニア）

Han Kyoung Ja 韓 京子：博士（日本文化研究）東京大学：徳成女子大学非常勤講師（在ソウル）

Jiang Susu 江 蘇蘇：博士（物理情報工学）横浜国立大学：東芝セミコンダクター社

Kim Bumsu 金 範洙：博士（学校教育学—社会系教育（歴史））東京学芸大学：茨城キリスト教大学非常勤講師

Kim Yeonkyeong 金 娟鏡：東京学芸大学（心理学）

Lan Hung Yueh 藍 弘岳：東京大学（地域文化研究）

Tenegro, Brenda Resurecion Tiu テネグラ、ブレンダ・レスレション・ティウ：お茶の水女子大学（人間発達科学）：お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム研究員

Vo Chi Cong ヴォー・チー・コン：東京工業大学（数理計算科学）：Freshwind Information Technology Corporation 取締役

Wang Xueping 王 雪萍：博士（政策メディア）慶応義塾大学：慶応大学グローバルセキュリティー研究所

Wong Kin Foon 王 健歡：博士（統計科学）総合研究大学院大学：統計数理研究所外来研究員

Zhao Changxiang 趙 長祥：博士（商学）一橋大学：（在上海）

2006年度奨学生

Chu Xuan Gao チュ・スワン・ザオ：東京外国語大学（文化人類学）

Hu Xiuying 胡 秀英：千葉大学（看護教育学）

Hyun Seungsoo 玄 承洙：東京大学（地域文化）

Li Chengri 李 成日：慶応義塾大学（政治学）

Liang Yun-hsien 梁 蘊嫻：東京大学（比較文化）

Mohottala Shirmila モホッタラ・シャミラ：東京大学（情報理工学）

Pantcheva Elena Latchezarova パンチェワ、エレナ：千葉大学（日本研究）

Seo Kyoung Sook 徐 景淑：慶応義塾大学（美学美術史）

Sim Choon Kiat 沈 俊傑：東京大学（教育学）

Sun Junyue 孫 軍悦：東京大学（言語情報科学）

Weerasinghe Nalin ウィーラシンハ・ナリン（電子工学）

Woo Seonghoon 禹 成勲：東京大学（建築学）

◇ 2007年度渥美奨学生募集概要

渥美国際交流奨学財団は、関東地方の大学院博士課程に在籍する留学生を対象に、2007年度渥美奨学生を下記の通り募集します。

(1) 応募資格（下記のすべてに該当すること）

1. 日本以外の国籍を有し、関東地方の大学院博士課程に在籍し、当財団の奨学金支給期間に博士号を取得する見込みのある方。正規在籍年限を超えたために、或いは、他国の大学院より博士号を取得するために、研究員等として日本の大学院に在籍する方も含む。
2. 自分の所属する大学院研究科(研究室)および自分の居住地が、関東地方(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県)にある方。
3. 国際理解と親善に関心をもち、当財団の交流活動に積極的に参加する意思のある方。

(2) 交流活動

1. 当財団は、毎月の例会で学業や生活について報告していただいた上で、奨学金を支給します。
2. 毎年数回奨学生や元奨学生と当財団の理事・評議員ならびに選考委員を招き親睦会を催します。年度末には当該年度奨学生の研究報告会を催します。
3. 毎年7月に2泊3日の軽井沢リクリエーション旅行に招待します。
4. 海外学会派遣プログラム：渥美奨学生で博士号を取得した方には、海外で開催される学会等に一回参加するための旅費・宿泊費および参加費を支給します。ただし、海外にいる方は日本への旅費にあてることができる。

(3) 奨学金の詳細

1. 奨学金は月額20万円です。2007年度は12名採用します。
2. 奨学金の支給は1年間(2007年4月～2008年3月)です。継続は認められません。

(4) 募集方法

1. 奨学金希望者は、2006年7月1日以後、各大学院の留学生奨学金担当課または当財団事務局まで、応募要項と申込書をご請求ください。また、同日以後、当財団ホームページ(<http://www.aisf.or.jp>)からもダウンロードできます。
2. 2007年度奨学金の申込は、2006年9月1日から9月30日まで、郵便にて受け付けます。

(5) 選考の方法

事務局における書類審査と予備面接の後、選考委員による書類選考と面接により審査します。選考の結果は12月上旬に通知します。

財団法人 渥美国際交流奨学財団

Atsumi International Scholarship Foundation

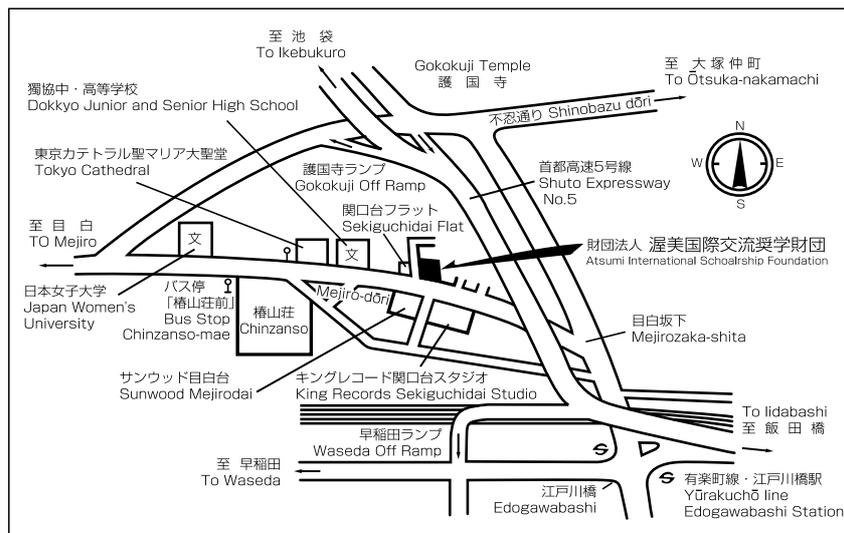
〒112-0014 東京都文京区関口3丁目5番8号

3-5-8 Sekiguchi Bunkyo-ku Tokyo 112-0014 Japan

Phone:03-3943-7612 Fax:03-3943-1512

<http://www.aisf.or.jp>

E-mail:office@aisf.or.jp



★ JR山の手線目白駅より、都バス 61 番 新宿駅西口行、「榎山荘前」下車・徒歩 3 分
Take The 61 bus from Mejiro Station (JR Yamanote line) and get off at the “Chinzansomae” stop. 3 min. walk.

★ 営団地下鉄有楽町線「江戸川橋」(出口 A 1) 下車・徒歩 10 分
Get off at Edogawabashi station from the Yurakucho subway line. (A1 exit 10 min.walk)